

# こころ

夏目漱石



一冊堂青空文庫



こころ

夏目漱石

上 先生と私

—

私<sup>わたくし</sup>はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚<sup>はば</sup>かる遠慮とい

うよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取つたので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取つた。電報には

母が病気だからと断つてあつたけれども友達はそのを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧ま<sup>すす</sup>ない結婚を強<sup>し</sup>いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心<sup>かんじん</sup>の当人が気に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談をした。私にはどうしていいか分らなかつた。けれども実際彼の母が病気であるとなれば彼は固<sup>もと</sup>より帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になつた。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分<sup>だいぶん</sup>日数<sup>ひかず</sup>があるので鎌倉におつて

もよし、帰ってもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留<sup>と</sup>まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子<sup>むすこ</sup>で金に不自由のない男であったけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかった。したがって一人<sup>ひとり</sup>ぼっちになつた私は別に恰好<sup>かっこう</sup>な宿を探す面倒ももたなかつたのである。

宿は鎌倉でも辺鄙<sup>へんぴ</sup>な方角にあつた。玉突き<sup>たまつき</sup>だのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇<sup>なわて</sup>を一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行っても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻<sup>くす</sup>ぶり返った藁<sup>わら</sup>葺<sup>づき</sup>の間<sup>あいだ</sup>を通り抜けて磯<sup>いそ</sup>へ下りると、この辺<sup>へん</sup>にこれほどの都会人種<sup>わいじんしゆ</sup>が住んでいるかと思うほど、避暑に來た男や女で砂の上<sup>すな</sup>が動いていた。あの時は海の中が銭湯<sup>せんとう</sup>のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあった。その中に知った人を一人ももたない私も、こういう販<sup>にぎ</sup>やかな景色の中に裹<sup>つつ</sup>まれて、砂の上に寝<sup>ね</sup>そべってみたり、膝頭<sup>ひざがしり</sup>を波に打たしてそこいらを跳<sup>は</sup>ね廻<sup>まわ</sup>るのは愉快であった。

私は実に先生をこの雑沓<sup>ざつとく</sup>の間<sup>あいだ</sup>に見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋<sup>かけぢやや</sup>が二軒あった。私はふとした機<sup>は</sup>会<sup>み</sup>からその一軒の方<sup>はう</sup>に行き慣<sup>な</sup>れていた。長谷<sup>はせ</sup>辺<sup>へん</sup>に大きな別荘を構<sup>か</sup>えている人と違<sup>ちが</sup>っ

て、各自めいめいに専有せんゆうの着換場きがえばを拵こしらえていないここいらの避暑客ひしょくかくには、  
ぜひともこうした共同着換所きゆうきゆうしよといった風ふうなものが必要ひつやうなのであつ  
た。彼らはここで茶を飲み、ここで休息しよきふする外ほかに、ここで海水着かいすいしよ  
を洗濯せんたくさせたり、ここで鹹しおはゆい身体からだを清めたり、ここへ帽子ぼうしや  
傘かさを預けたりするのである。海水着かいすいしよを持たない私にも持物を盗ぬすま  
れる恐れはあつたので、私は海へはいるたびにその茶屋ちやゑへ一切いっさいを  
脱ぬぎ棄すてる事ことにしていた。

私わたくしがその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちようど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであつた。私はその時反対に濡ぬれた身体からだを風に吹かして水から上がつて来た。二人の間あいだには目を遮かきる幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかも知れなかつた。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫ほうまんであつたにもかかわらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴つっていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否いなや、すぐ私の注意を惹ひいた。純粹の日本の浴衣ゆかたを着ていた彼は、それを

床几しよんぎの上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿はく猿股ざるまた一つの外何物ほかも肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった。私はその二日前に由井いが浜はままで行って、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺ながめていた。私の尻しりをおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍わきがホテルの裏口になっていたので、私の凝じっとしている間に、大分多だいぶんくの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕うでと股ももは出していなかった。女は殊更肉ことさらを隠しがちであった。大抵は頭に護謨製ゴムせいの頭巾ずきんを被かぶって、海老茶えびちやや紺こんや藍あいの色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼めには、猿

股一つで済まして皆みんなの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍わきを顧みて、そこにござんでいる日本人に、

一言二言ひとことふたこと何かいった。その日本人は砂の上に落ちた手拭てぬぐいを拾い上

げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿うしろすがたを見守っていた。すると彼らは真直まっすぐに波の中に足を踏み込んだ。

そうして遠浅とおあさの磯いそ近くにわいわい騒いでいる多人数たにんずの間あいだを通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの

頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻って来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体からだを拭ふいて着物を着て、さっさとどこへか行ってしまった。

彼らの出て行った後あと、私はやはり元の床几しようきに腰をおろして烟草タバコを吹かしていた。その時私はぽかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われてならなかった。しかしどうしてもいつどこで会った人が想おもい出せずにしまった。

その時の私は屈托くつたくがないというよりむしろ無聊むりょうに苦しんでいた。

た。それで翌日あくるひもまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛茶屋かけぢややまで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁むぎわら帽ぼうを被かぶってやって来た。先生は眼鏡めがねをとって台の上に置いて、すぐ手拭てぬぐいで頭を包んで、すたすた浜を下りて行った。先生が昨日きのうのように騒さわがしい浴客よくかくの中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後あとが追おい掛かけたくなくなった。私は浅い水を頭の上まで跳はねかして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標めじるしに拔手ぬきでを切きった。すると先生は昨日と違って、一種の弧線こせんを描えがいて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸おかへ上がって雫しずくの垂れる手を振りながら掛茶屋に

入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行つた。

### 三

私は次の日も同じ時刻に浜へ行つて先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶あいさつをする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の状態はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰って行った。周囲がいくら賑にぎやかでも、それに

はほとんど注意を払う様子が見えなかった。最初いつしよに来た西洋人はその後まるで姿を見せなかった。先生はいつでも一人であつた。

或る時先生が例の通りさつさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいつぱい着いていた。先生はそれを落とすために、後ろ向きになつて、浴衣を二、三度振った。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで

眼鏡を拾い出した。先生は有難うといって、それを私の手から受け取った。

次の日私は先生の後あとにつづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁ちやうほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた。広い蒼あおい海の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外ほかになかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歡喜きんぎに充みちた筋肉を動かして海の中で躍おどり狂った。先生はまたぱたりと手足の運動を已やめて仰向けになったまま浪なみの上に寝た。私もその真ま似ねをした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な

色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」といって私を促した。比較的強い体質をもった私は、もっと海の中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中<sup>なか</sup>二日おいてちょうど三日目の午後だったと思う。先

生と掛茶屋かけぢややで出会った時、先生は突然私に向かって、「君はまだ大分長だいぶんくここに居るつもりですか」と聞いた。考えのない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかった。それで「どうだか分りません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極きまりが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいらなかった。これが私の口を出た先生という言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といっても普通の旅館と違って、広い寺の境内けいだいにある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解わかった。私が先生先生と呼び掛

けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖くちくせだといって弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉かまくらにいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際つきあいをもたないのに、そういう外国人と近付きちかづになったのは不思議だといったりした。私は最後に先生に向かって、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないといった。若い私はその時暗あんに相手も私と同じような感じを持ってはいはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈ちん吟ぎんしたあとで、「どうも君の顔には見覚えみおぼがありませんね。人違

いじやないですか」といったので私は変に一種の失望を感じた。

#### 四

私は月の末わたくしに東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であつた。私は先生と別れる時に、「これから折々お宅たくへ伺つても宜よござんすか」と聞いた。先生は単簡たんかんにただ「ええいらつしやい」といっただけであつた。その時分の私は先生とよほど懇意になつたつもりでいたので、先生からもう少し濃こまやかな言葉を予期して掛かつたのである。それでこの物足りない返事

が少し私の自信を傷めた<sup>いた</sup>。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれ  
気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでも  
あった。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先  
生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、  
不安に揺か<sup>うご</sup>されるたびに、もつと前へ進みたくなつた。もつと前  
へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現わ  
れて来るだろうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人間  
に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかつた。私はな  
ぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解<sup>わか</sup>らなかつた。それが

先生の亡くなつた今日こんにちになつて、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌つていたのではなかつたのである。先生が私に示した時々の素気そっけない挨拶あいさつや冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのである。傷いたましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止よせと  
いう警告を与えたのである。他ひとの懐かしみに応じない先生は、他ひとを軽蔑けいべつする前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ歸つて来た。歸つてから授業の始まるまでにはまだ二週間の日数ひかずがあるので、そのうちに一度行つておこうと思つた。しかし歸つて二日三日と経たつうち

に、鎌倉かまくらにいた時の気分が段々薄くなつて来た。そうしてその上に彩いろどりられる大都会の空気が、記憶の復活に伴う強い刺戟しげきと共に、濃く私の心を染め付けた。私は往来で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まつて、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛たるみができてきた。私は何だか不足な顔をして往来を歩き始めた。物欲しそうに自分の室へやの中を見廻みまわした。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなくなった。

始めて先生の宅うちを訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に

行つたのは次の日曜だと覚えている。晴れた空が身に沁み込むように感ぜられる好い日和であつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵宅にいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。二度来て二度とも会えなかつた私は、その言葉を思い出して、理由もない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇してそこに立っていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内へはいつた。すると奥さんらしい人が代つて出て来た。美しい奥さんであつた。

私はその人から鄭寧ていねいに先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ぞうしヶ谷がやの墓地にある或ある仏へ花を手向けたむに行く習慣なのだそうである。「たった今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうにいつてくれた。私は会釈えしゃくして外へ出た。賑にぎやかな町の方へ一丁ちやうほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行ってみる気になった。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵かかとを回めぐらした。

わたくし  
私は墓地の手前にある苗畠なえばたけの左側からはいって、両方かえでに楓を植  
え付けた広い道を奥の方へ進んで行った。するとその端はすれに見え  
る茶店ちやみせの中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその人の眼めが  
鏡ねの縁ふちが日に光るまで近く寄って行った。そうして出し抜けに  
「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まって私の顔を  
見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍へん繰り返した。その言葉は森閑しんかんとした昼の  
中うちに異様な調子をもって繰り返された。私は急に何とも応こたえられ  
なくなつた。

「私の後を跟けて来たのですか。どうして……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいた。けれどもその表情の中には判然いえないような一種の曇りがあった。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰の墓へ参りに行ったか、妻がその人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおっしゃいません」

「そうですか。——そう、それはいいのですがありませんね、始めて会ったあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得心したらしい様子であった。しかし私にはそ

の意味がまるで解らなかつた。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉何々の墓だの、神僕ロギンの墓だのという傍に、一切衆生悉有仏生と書いた塔婆などが建ててあつた。全権公使何々というのもあつた。私は安得烈と彫り付けた小さい墓の前で、「これは何と読むんでしよう」と先生に聞いた。「アンドレとでも読ませるつもりでしょうね」といって先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種々の様式に対して、私ほどに滑稽もアイロニーも認めてないらしかつた。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりにかれこれいいたがるのを、

始めのうちは黙って聞いていたが、しまいには「あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事がありませんね」といった。私は黙った。先生もそれぎり何ともいわなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏いちようが一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢こやしを見上げて、「もう少しすると、綺麗きれいですよ。この木がすっかり黄葉こうようして、ここいらの地面は金色きんいろの落葉で埋まるようになります」といった。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。

向うの方で凸凹でこぼこの地面をならして新墓地を作っている男が、鍬くわの手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてす

ぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的あてのない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行った。先生はいつもより口数を利きかなかった。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶらいっしょに歩いて行った。

「すぐお宅たくへお帰りですか」

「ええ別に寄る所ありませんから」

二人はまた黙って南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか」と私がまた口を利き出した。

「いいえ」

「どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」

「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかった。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ちやうほど歩いた後あとで、先生が不意にそこへ戻って来た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「お友達のお墓へ毎月まいげつお参りをなさるんですか」

「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかつた。

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在宅であった。先生に会う度数どすうが重なるにつれて、私はますますしげ繁く先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶あいさつをした時も、懇意のちになつたその後も、あまり変りはなかつた。先生は何時いつも静かであつた。ある時は静か過ぎて淋さびしいくらいであつた。私は最初から先生には近づきがたい不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければいられないという感じが、どこ

かに強く働いた。こういう感じを先生に対してもっていたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知れない。しかしその私だけにはこの直感が後のちになって事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいといわれても、馬鹿ばかげていると笑われても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしくまた嬉うれしく思っている。人間を愛し得うる人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐ふところに入いろうとするものを、手をひろげて抱き締める事のできない人、——これが先生であった。

今いった通り先生は始終静かであった。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があった。窓に黒い鳥

影が射すように。射すかと思うと、すぐ消えるには消えたが。私  
が始めてその曇りを先生の眉間に認めたのは、雑司ヶ谷の墓地  
で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私はその異様の瞬間  
に、今まで快く流れていた心臓の潮流をちよつと鈍らせた。しか  
しそれは単に一時の結滞に過ぎなかつた。私の心は五分と経たな  
いうちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の  
影を忘れてしまった。ゆくりなくまたそれを思い出させられたの  
は、小春の尽きるに間のない或る晩の事であつた。

先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀  
杏の大樹を眼の前に想い浮かべた。勘定してみると、先生が毎月

例れいとして墓参に行く日が、それからちようど三日目に当あつていた。その三日目は私の課業ひるが午おで終おえる楽たのしい日であった。私は先生に向むかかってこういった。

「先生ぞうし雑が司やヶ谷の銀杏はもう散ちってしままったでしようか」

「まだ空坊主からぼうずにはなららないでしよう」

先生はそう答こたえながら私の顔を見守まもった。そうしてそこからしばし眼まなこを離はなさなかった。私はすぐいいった。

「今度お墓参はかまいりにいらいらいっしゃる時ときにお伴ともをしてしても宜よござんすか。

私は先生といいっしよにああすこいらが散歩さんぽしてみみたい」

「私は墓参はかまいりに行くいくんで、散歩さんぽに行くいくんじやないですよ」

「しかしついでに散歩をなすったらちようど好いじゃありませんか」

先生は何とも答えなかった。しばらくしてから、「私のは本当の墓参りだけなんだから」といって、どこまでも墓参ぼさんと散歩を切り離そうとする風ふうに見えた。私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私  
はなおと先へ出る気になった。

「じゃお墓参りでも好いからいっしょに伴つれて行って下さい。私もお墓参りをしますから」

実際私には墓参と散歩との区別がほとんど無意味のように思わ

れたのである。すると先生の眉まゆがちよつと曇くもった。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪けんおとも畏怖いふとも片付けられな  
い微かすかな不安らしいものであつた。私は忽たちまち雑司ヶ谷で「先生」  
と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じ  
だつたのである。

「私は」と先生がいった。「私はあなたに話す事のできないある  
理由があつて、他ひとといつしよにあすこへ墓参りには行きたくない  
のです。自分の妻さいさえまだ伴ともれて行つた事がないのです」

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅へ  
出入りをするのではなかった。私はただそのままにして打ち過ぎ  
た。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊  
むべきものの一つであった。私は全くそのために先生と人間らし  
い温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先  
生の心に向かって、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同  
情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまったろう。  
若い私は全く自分の態度を自覚していなかった。それだから尊  
のかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果  
が二人の仲に落ちて来たろう。私は想像してもぞつとする。先生

はそれだけでなく、冷たい眼まなこで研究されるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅うちへ行くようになった。私の足が段々繁しげくなった時のある日、先生は突然私に向かって聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやって来るのですか」

「何でと行って、そんな特別な意味はありません。——しかしお邪魔じゃまなんですか」

「邪魔だとはいいません」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかった。私は先生の交際の範囲の極めて狭い事を知っていた。先生の元の同級生などで、その頃東京にいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆な私ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。

「私は淋しい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいます。だからなぜそうたびたび来るのかと聞いて聞いたのです」

「そりやまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかった。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳ですか」といった。

この問答は私にとってすこぶる不得要領ふとくようりょうのものであったが、私はその時底そこまで押さずに帰ってしまった。しかもそれから四日と経たたないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否いなや笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といって自分も笑った。

私は外ほかの人からこういわれたらきつと癩しかくに触さわったろうと思う。

しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であった。癩しかくに触ら

ないばかりでなくかえって愉快だった。

「私は淋<sup>さび</sup>しい人間です」と先生はその晩またこの間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくってても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしよう。動けるだけ動きたいのでしよう。動いて何かに打<sup>ぶ</sup>つかりたいのでしよう……」

「私はちつとも淋<sup>さむ</sup>しくはありません」

「若いうちほど淋<sup>さむ</sup>しいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅<sup>うち</sup>へ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会ってもおそらくまだ淋しいさび気がどこかでしていいでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元ねもとから引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外ほかの方を向いて今に手を広げなければなりません。今に私の宅の方へは足が向かなくなります」

先生はこういって淋しい笑い方をした。

幸さいわいにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私わたくしは、この予言の中うちに含まれている明白な意義さえ了解し得なかつた。私は依然として先生に会いに行つた。その内うちいつの間にか先生の食卓で飯めしを食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利きかなければならないようになった。

普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかつた。けれども年の若い私の今まで経過して来た境遇からいって、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかつた。それが原因げんいんかどうかは疑問だが、私の興味は往来で出合う知りもしない女に向かつて多く働くだけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会つた

時、美しいという印象を受けた。それから会うたびに同じ印象を受けない事はなかった。しかしそれ以外に私はこれと比べてとくに奥さんについて語るべき何物ももたないような気がした。

これは奥さんに特色がないというよりも、特色を示す機会が来なかったのだと解釈する方が正当かも知れない。しかし私はいつでも先生に付属した一部分のような心持で奥さんに対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになっていた。それで始めて知り合いになった時の奥さんについては、ただ美しいという外ほかに何の感じも残っていないな

い。

ある時私は先生の宅で酒を飲まされた。その時奥さんが出て来て傍で酌をしてくれた。先生はいつもより愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」といって、自分の呑み干した盃を差した。奥さんは「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取った。奥さんは綺麗な眉を寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇の先へ持って行った。奥さんと先生の間で下のような会話が始まった。

「珍しい事。私に呑めとおっしやった事は滅多にないのにね」  
「お前は嫌いだからさ。しかし稀には飲むといいよ。好い心持に

なるよ」

「ちつともならないわ。苦しいぎりで。でもあなたは大変ご愉快ゆかいそうね、少しご酒しゅを召し上がると」

「時によると大変愉快になる。しかしいつでもというわけにはいかない」

「今夜はいかがです」

「今夜は好いい心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がると宜よござんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がって下さいよ。その方が淋さむしくなくって好いいから」

先生の宅は夫婦と下女だけであつた。行くたびに大抵はひそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかつた。或る時は宅の中にいるものは先生と私だけのよう気がした。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いていった。私は「そうですな」と答えた。しかし私の心には何の同情も起らなかつた。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅いもののように考えていた。

「一人貰つてやろうか」と先生がいった。

「貰ツ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。

「子供はいつまで経つたつてできっこないよ」と先生がいった。

奥さんは黙っていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時先生は「天罰だからさ」といって高く笑った。

## 九

私わたくしの知る限り先生と奥さんとは、仲の好いい夫婦のいっつい一対であった。家庭の一員として暮した事のない私のことだから、深い消息は無論解わからなかつたけれども、座敷で私と対坐たいざしている時、先生は何かのついでに、下女げじよを呼ばないで、奥さんを呼ぶ事があつた。（奥さんの名は静しずとあった）。先生は「おい静」といつでも

襖ふすまの方を振り向いた。その呼びかたが私には優しく聞こえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚はなはだ素直であった。ときたまご馳走ちそうになって、奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかに二人の間に描えがき出されるようであった。

先生は時々奥さんを伴つれて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつた。私は箱根はこねから貰つた絵端書えはがきをまだ持つている。日光にっこうへ行つた時は紅葉もみじの葉を一枚封じ込めた郵便も貰つた。

当時の私の眼に映つた先生と奥さんの間柄はまずこんなもので

あつた。そのうちにたつた一つの例外があつた。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくつて、どうも言逆いさかいらしかつた。先生の宅は玄関の次がすぐ座敷になつていたので、格子こうしの前に立っていた私の耳にその言逆いさかの調子だけはほぼ分つた。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音おんなので、誰ただか判然はつきりしなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあつた。私はどうしたものだろうと思つて玄関先で迷つたが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ帰つ

た。

妙に不安な心持が私を襲って来た。私は書物を読んでも呑み込む能力を失ってしまった。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようと言って、下から私を誘った。先刻帯の間へ包んだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであった。私は帰ったなりまだ袴を着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。

その晩私は先生といっしょに麦酒を飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であった。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険のできない人であった。

「今日は駄目だめです」といって先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は気の毒そうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻さつきの事が引ひつ懸かっていた。肴さかなの骨が咽喉のどに刺さった時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えた。止よした方が好よかろうかと思ひ直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。

「君、今夜はどうかしていますね」と先生の方からいい出した。

「実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」

私は何の答えもし得なかつた。

「実は先刻妻さつきさいと少し喧嘩けんかをしてね。それで下くだらない神経を昂奮こうふんさ

せてしまったんです」と先生がまたいった。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかった。

「妻が私を誤解するのです。それを誤解だといって聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」

「どんなに先生を誤解なさるんですか」

先生は私のこの問いに答えようとはしなかった。

「妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない

問題であつた。

十

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁も二丁もつづいた。その後で突然先生が口を利き出した。

「悪い事をした。怒って出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀そうなものですね。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから」

先生の言葉はちよつとそこで途切れたが、別に私の返事を期待

する様子もなく、すぐその続きへ移って行った。

「そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようで少し滑稽だが。

君、私は君の眼にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」

「中位ちゆうゐに見えます」と私は答えた。この答えは先生にとって少し案外あんがいらしかった。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。

先生の宅うちへ帰るには私の下宿のつい傍そばを通るのが順路であった。私はそこまで来て、曲り角で分れるのが先生に済まないような気がした。「ついでにお宅たくの前までお伴ともしましょうか」といった。先生は忽ち手たちまで私を遮さへぎった。

「もう遅いから早く帰りたまえ。私も早く帰ってやるんだから、妻君のために」

先生が最後に付け加えた「妻君のために」という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰ってから安心して寝る事ができた。私はその後も長い間この「妻君のために」という言葉を忘れなかった。

先生と奥さんの間に起った波瀾が、大したものではない事はこれでも解った。それがまた滅多に起る現象でなかった事も、その後絶えず出入りをして来た私にはほぼ推察ができた。それどころか先生はある時こんな感想すら私に洩らした。

「私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と想ってくれています。そういう意味からいって、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」

私は今前後の行き掛りを忘れてしまったから、先生が何のためにこんな自白を私にして聞かせたのか、判然という事ができない。けれども先生の態度の真面目であったのと、調子の沈んでいたのとは、いまだに記憶に残っている。その時ただ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」

という最後の一句であった。先生はなぜ幸福な人間といい切らな  
いで、あるべきはずであると断わったのか。私にはそれだけが不  
審であった。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が不審で  
あった。先生は事實はたして幸福なのだろうか、また幸福である  
べきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心  
の中で疑<sup>うち</sup>らざるを得<sup>うたぐ</sup>なかった。けれどもその疑いは一時限りどこ  
かへ葬<sup>ほつむ</sup>られてしまった。

私はそのうち先生の留守に行つて、奥さんと二人差向<sup>さむか</sup>いで話を  
する機会に出合つた。先生はその日横濱<sup>よこはま</sup>を出帆<sup>しゅっぱん</sup>する汽船に乗つて  
外国へ行くべき友人を新橋<sup>しんばし</sup>へ送りに行つて留守であつた。横濱か

ら船に乗る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのはその頃の習慣ころであった。私はある書物について先生に話してもらおう必要があったので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に来た友人に対する礼義れいぎとしてその日突然起った出来事であった。先生はすぐ帰るから留守でも私に待っているようにといい残して行った。それで私は座敷へ上がって、先生を待つ間、奥さんと話をした。

その時の私わたくしはすでに大学生であった。始めて先生の宅うちへ来た頃ころから見るとずっと成人した気でいた。奥さんとも大分だいぶん懇意こんいになつた後のちであった。私は奥さんに対して何の窮屈きゆうくつも感じなかつた。差さし向むかいで色々いろいろの話をした。しかしそれは特色とくしよくのないただの談話だんわだから、今ではまるで忘れてしまった。そのうちでたった一つ私の耳みみに留とどまったものがある。しかしそれを話す前に、ちよつと断ことわつておきたい事がある。

先生は大学出身であった。これは始めから私に知れていた。しかし先生の何もしないで遊あそんでいるという事は、東京へ帰かえつて少し経たつてから始めて分わつた。私はその時どうして遊あそんでいられる

のかと思つた。

先生はまるで世間に名前を知られていない人であつた。だから先生の学問や思想については、先生と密切みっせつの關係をもっている私より外ほかに敬意を払うもののあるべきはずがなかつた。それを私は常に惜おしい事だといつた。先生はまた「私のようなものが世の中へ出て、口を利きいては濟まない」と答えるぎりりで、取り合わなかつた。私にはその答えが謙遜けんそん過ぎてかえつて世間を冷評するようにも聞こえた。實際先生は時々昔の同級生で今著名になつていゝ誰彼だれかれを捉とらえて、ひどく無遠慮な批評を加える事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云々うんぬんしてみた。私の精神は反抗の

意味というよりも、世間が先生を知らないで平気でいるのが残念だったからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向かって働き掛ける資格のない男だから仕方ありません」といった。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解<sup>わか</sup>らなかったけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇気が出なかった。

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて来た。

「先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけ

で、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」

「あの人は駄目だめですよ。そういう事が嫌いなんですから」

「つまり下くだらない事だと悟っていらっしやるんでしょうか」

「悟るの悟らないのって、——そりゃ女だからわたくしには解りませんけれど、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのでしよう。それでいてできないんです。だから気の毒ですわ」

「しかし先生は健康からいって、別にどこも悪いところはないよ  
うじゃありませんか」

「丈夫ですとも。何にも持病はありません」

「それでなぜ活動ができないんでしょう」

「それが解<sup>わか</sup>らないのよ、あなた。それが解<sup>わか</sup>るくらいなら私だつて、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」

奥さんの語気には非常に同情があった。それでも口元だけには微笑が見えた。外側からいえば、私の方がむしろ真<sup>ま</sup>面<sup>じ</sup>目<sup>め</sup>だった。私はむずかしい顔をして黙っていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。

「若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変ってしまったんです」

「若い時っていつ頃ですか」と私が聞いた。

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知っていらっしやっただんですか」

奥さんは急に薄赤い顔をした。

## 十二

奥さんは東京の人であった。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知っていた。奥さんは「本当あいうと合この子こなんですよ」といった。奥さんの父親はたしか鳥取とっとりかどこかの出である

のに、お母さんの方はまだ江戸といった時分の市ヶ谷で生れた女なので、奥さんは冗談半分そうだったのである。ところが先生は全く方角違いの新潟県人であった。だから奥さんがもし先生の書生時代を知っているとすれば、郷里の関係からでない事は明らかであった。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだったので、私の方でも深くは聞かずにおいた。

先生と知り合いになってから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々の問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何もものも聞き得なかった。私は時によると、それを善意に解釈してもみた。年輩の先生の事だから、艶

めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎<sup>つつし</sup>んでいるの  
だろうと思った。時によると、またそれを悪くも取った。先生に  
限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因  
襲のうちに成人したために、そういう艶<sup>つや</sup>っぽい問題になると、正  
直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。もつと  
もどちらも推測に過ぎなかった。そうしてどちらの推測の裏に  
も、二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮定し  
ていた。

私の仮定ははたして誤らなかった。けれども私はただ恋の半面  
だけを想像に描<sup>えが</sup>き得たに過ぎなかった。先生は美しい恋愛の裏

に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとって見<sup>み</sup>惨<sup>じめ</sup>なものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまった。

私は今この悲劇について何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たともいえる二人の恋愛については、先<sup>さ</sup>刻<sup>つき</sup>いった通りであった。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかった。奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために。

ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或<sup>あ</sup>る時<sup>は</sup>花<sup>な</sup>時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>に私は

先生といっしょに上野へ行った。そうしてそこで美しい一対の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添って花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙だてている人が沢山あった。

「新婚の夫婦のようだね」と先生がいった。

「仲が好さそうですね」と私が答えた。

先生は苦笑さえしなかった。二人の男女を視線の外ほかに置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。

「君は恋をした事がありますか」

私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」

私は答えなかった。

「したくない事はないでしょう」

「ええ」

「君は今あの男と女を見て、冷評ひやかしましたね。あの冷評ひやかのうちに  
は君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声が交まじって  
いました」

「そんな風ふうに聞こえましたか」

「聞こえました。恋の満足を味わっている人はもっと暖かい声を  
出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解わかっていい

ますか」

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった。

### 十三

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉しうれそうな顔をしていた。そこを通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。

「恋は罪悪ですか」と私わたくしがその時突然聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じよう

に強かった。

「なぜですか」

「なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずですよ。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃないですか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であった。思いあたるようなものは何にもなかった。

「私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」

「目的物が無いから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思っ

て動きたくなるのです」

「今それほど動いちゃいません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」

「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」

「恋に上るのぼ階段かいだんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異ことにしているように思われま  
す」

「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えら

れない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。しかし……」

私は変に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお思になれば仕方がありませんが、私にそんな気の起った事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかつた。

「しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪

で縛られた時の心持を知っていますか」

私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生のいう罪悪という意味は朦朧もうろうとしてよく解わからなかつた。その上私は少し不愉快になつた。

「先生、罪悪という意味をもつと判然はつきりいつて聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真実まことを話している気でいた。ところが実際は、あなたを焦慮じらしていたのだ。私は悪い事をした」

先生と私とは博物館の裏から鶯溪うぐいすだにの方角に静かな歩調で歩いて

行った。垣の隙間すきまから広い庭の一部に茂る熊笹くまざさが幽邃ゆうすいに見えた。

「君は私がなぜ毎月まいげつ雑司ヶ谷ぞうしがやの墓地うまに埋っている友人の墓へ参るのか知っていますか」

先生のこの問いは全く突然であつた。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて気が付いたようにこういった。

「また悪い事をいった。焦慮じらせるのが悪いと思つて、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。

どうも仕方がない。この問題はこれで止やめましよう。とにかく恋

は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」  
私には先生の話がますます解<sup>わか</sup>らなくなつた。しかし先生はそれ  
ぎり恋を口にしなかつた。

## 十四

年の若い私<sup>わたくし</sup>はややともすると一<sup>いち</sup>図<sup>ず</sup>になりやすかつた。少なくとも  
も先生の眼にはそう映っていたらしい。私には学校の講義よりも  
先生の談話の方が有益なのであつた。教授の意見よりも先生の思  
想の方が有難いのであつた。とどの詰まりをいえば、教壇に立つ

て私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りひとを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった。

「あんまり逆上のぼせちゃいけません」と先生がいった。

「覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は肯うけがってくれなかった。

「あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭いやになります。私は今のあなたからそれほどに思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起るべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」

「私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用な

んですか」

「私はお気の毒に思うのです」

「気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぼたぼた点じていた椿つばきの花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺ながめる癖があつた。

「信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」

その時生垣いけがきの向うで金魚売りらしい声がした。その外ほかには何の聞こえるものもなかった。大通りから二丁ちやうぢも深く折れ込んだ小路こうじ

は存外静かであった。家の中はいつもの通りひっそりしていた。私は次の間に奥さんのいる事を知っていた。黙って針仕事か何かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知っていた。しかし私は全くそれを忘れてしまった。

「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。

「私は私自身さえ信用していません。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになっていくのです。自分を呪うより外に仕方がないのでです」

「そうむずかしく考えれば、誰だって確かなものはないでしょ

う」

「いや考えたんじゃない。やったんです。やった後で驚いたんです。そうして非常に怖こわくなっただんです」

私はもう少し先まで同じ道を辿たどって行きかけた。すると襖ふすまの陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といった。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間まへ呼んだ。二人の間にどんな用事が起ったのか、私には解わからなかつた。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ歸つて来た。

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するか

ら。そうして自分が欺あざむかれた返報に、残酷な復讐ふくしゅうをするようになるものだから」

「そりやどういう意味ですか」

「かつてはその人の膝ひざの前に跪ひざまづいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載のせさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥しりぞけたいと思うのです。私は今より一層淋さびしい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己おのれとに充みちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

私はこういう覚悟をもっている先生に対して、いふべき言葉を知らなかった。

## 十五

その後私は奥さんおわたくしの顔を見るたびに気になった。先生は奥さんに対して、始終こういう態度に出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極きめようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかったから。それから奥

さんは私に会うたびに尋常であったから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅多めったに顔を合せなかつたから。

私の疑惑はまだその上にもあつた。先生の人間に対するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を観察したりした結果なのだろうか。先生は坐すわつて考える質たちの人であつた。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐すわつて世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばかりとは思えなかつた。先生の覚悟は生きた覚悟らしかつた。火に焼けて冷却し切つた石造家屋せきぞうの輪廓りんかくとは違つていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であつた。けれどもその思想家の纏まとめ

上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。

これは私の胸で推測するがものはない。先生自身すでにそうだと告白していた。ただその告白が雲の峯みねのようであった。私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽おほい被かぶせた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解わからなかつた。告白はぼうとしていた。それでいて明らかに私の神経を震ふるわせた。

私は先生のこの人生観の基点に、或ある強烈な恋愛事件を仮定し

てみた。（無論先生と奥さんとの間に起った）。先生がかつて恋は罪悪だといった事から照らし合せて見ると、多少それが手掛りにもなつた。しかし先生は現に奥さんを愛していると私に告げた。すると二人の恋からこんな厭世に近い覚悟が出ようはずがなかつた。「かつてはその人の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとする」といった先生の言葉は、現代一般の誰彼について用いられるべきで、先生と奥さんの間には当てはまらないもののものであつた。

雑司ヶ谷にある誰だか分らない人の墓、——これも私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い縁故のある墓だという事を

知っていた。先生の生活に近づきつつありながら、近づく事のできない私は、先生の頭の中にある生命いのちの断片として、その墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取ってその墓は全く死んだものであった。二人の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎにはならなかった。むしろ二人の間に立って、自由の往来を妨げる魔物のようであった。

そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならぬ時機が来た。その頃は日の詰つまって行くせわしない秋に、誰も注意を惹ひかれる肌寒はださむの季節であった。先生の附近ふきんで盗難かかに罹かったものが三、四日続いて出た。盗難はいずれも宵の口

であった。大したものを持って行かれた家はほとんどなかつたけれども、はいられた所では必ず何か取られた。奥さんは気味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空あけなければならぬ事情ができてきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職しているものが上京したため、先生は外ほかの二、三名と共に、ある所でその友人に飯めしを食わせなければならなくなった。先生は訳を話して、私に帰ってくる間までの留守番を頼んだ。私はすぐ引き受けた。

私わたくしの行ったのはまだ灯ひの点つくか点かかない暮くれ方であつたが、几きち帳ようめん面な先生はもう宅うちにいなかった。「時間おくに後くれると悪いって、つい今しがた出掛でけました」といった奥さんは、私を先生の書齋へ案内した。

書齋には洋机テーブルと椅子いすの外ほかに、沢山の書物が美しい背皮せがわを並べて、硝子ガラス越ごしに電燈でんとうの光で照らされていた。奥さんは火鉢の前に敷いた座蒲団ざぶとんの上へ私を坐すわらせて、「ちつとそこいらにある本でも読んでいて下さい」と断つて出て行った。私はちょうど主人の歸りを待ち受ける客のような気がして済まなかつた。私は畏かしこまつたまま烟草タバコを飲んでいた。奥さんが茶の間で何か下女げじよに話している

声が聞こえた。書齋は茶の間の縁側を突き当って折れ曲った角かどにあるので、棟むねの位置からいうと、座敷よりもかえって掛け離れた静かさを領りやうしていた。ひとしきりで奥さんの話し声が已やむと、後あとはしんとした。私は泥棒を待ち受けるような心持で、凝じっとしながら気をどこかに配った。

三十分ほどすると、奥さんがまた書齋の入口へ顔を出した。「おや」といって、軽く驚いた時の眼を私に向けた。そうして客に來た人のように鹿爪しかつめらしく控えている私をおかしそうに見た。

「それじゃ窮屈でしょう」

「いえ、窮屈じゃありません」

「でも退屈でしょう」

「いいえ。泥棒が来るかと思って緊張しているから退屈でもありません」

奥さんは手に紅茶茶碗こうちやぢやわんを持ったまま、笑いながらそこに立っていた。

「ここは隅っこだから番をするには好よくありませんね」と私がいった。

「じゃ失礼ですがもっと真中へ出て来て頂戴ちやうだい。ご退屈たいくつだろうと  
思っおもって、お茶を入れて持って来たんですが、茶の間ちやまで宜よろしければ  
あちらで上げますから」

私は奥さんの後に尾おといて書齋しよさいを出た。茶の間には綺麗きれいな長火鉢ながひばちに鉄瓶てつびんが鳴なっていた。私はそこで茶と菓子のご馳走ちそうになった。奥さんは寝ねられないといけないといつて、茶碗ちawanに手を触れなかつた。

「先生はやっぱり時々こんな会へお出掛でかけになるんですか」

「いいえ滅多めったに出た事はありません。近頃ちかごろは段々人の顔を見るのが嫌きらいになるようです」

こういった奥さんの様子に、別段困こったものだという風ふうも見えなかつたので、私はつい大胆だたんになった。

「それじゃ奥さんだけが例外れいげなんですか」

「いいえ私も嫌われている一人なんです」

「そりゃ嘘うそです」と私がいった。「奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」

「なぜ」

「私にいわせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」

「あなたは学問をする方かただけあつて、なかなかお上手じょうずね。空からっぽ  
な理屈を使いこなす事が。世の中が嫌いになつたから、私までも  
嫌いになつたんだともいわれるじゃありませんか。それと同おんなじ  
理屈で」

「両方ともいわれる事はいわれますが、この場合は私の方が正しいのです」

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空からの盃さかずきでよくああ飽あききずに献酬けんしゅうができると思いますわ」

奥さんの言葉は少し手痛てひどかった。しかしその言葉の耳障みみざわりからいうと、決して猛烈なものではなかった。自分に頭脳のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出みいすだほどに奥さんは現代的でなかった。奥さんはそれよりもっと底の方に沈んだ心を大事にしているらしく見えた。

## 十七

私はまだその後あとにいうべき事をもっていた。けれども奥さんから徒らいたらずに議論を仕掛ける男のように取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶茶碗こうちやぢやわんの底のぞを覗いて黙っている私を外そらさないように、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？ 一つ？ ニツつ？」

妙なもので角砂糖をつまみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖かすの数を聞いた。奥さんの態度は私に媚こびると

いうほどではなかったけれども、先刻さつきの強い言葉を力つとめて打ち消そうとする愛嬌あいきょうに充みちていた。

私は黙って茶を飲んだ。飲んでしまっても黙っていた。

「あなた大変黙り込んだのね」と奥さんがいった。

「何かいうとまた議論を仕掛けるなんて、叱しかり付けられそうですから」と私は答えた。

「まさか」と奥さんが再びいった。

二人はそれを緒口いとくちにまた話を始めた。そうしてまた二人に共通な興味のある先生を問題にした。

「奥さん、先刻さつきの続きをもう少しわけて下さいませんか。奥さ

んには空からな理屈と聞こえるかも知れませんが、私はそんな上うわの空そらでいつてる事じゃないんだから」

「じゃおっしやい」

「今奥さんが急にいなくなったとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」

「そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外ほかに仕方がないじゃありませんか。私の所へ持って来る問題じゃないわ」

「奥さん、私は真面目まじめですよ。だから逃げちゃいけません。正直に答えなくっちゃ」

「正直よ。正直にいつて私には分らないのよ」

「じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしやるんですか。

これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、  
あなたに伺います」

「何もそんな事を開き直って聞かなくっても好いいじゃありません  
か」

「真面目くさって聞くがものはない。分り切つてるとおっしやる  
んですか」

「まあそうよ」

「そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなったら、先生は

どうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるんでしょう。先生から見てじゃない。あなたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるんでしょうか」

「そりゃ私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れれば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんか。そういうと、己惚おのぼれになるようですが、私は今先生を人間としてできるだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福にできるものはないとまで思い込んでいますわ。それだから

こうして落ち付いていられるんです」

「その信念が先生の心に好く映るはずだと私は思いますが」

「それは別問題ですわ」

「やっぱり先生から嫌われているとおっしゃるんですか」

「私は嫌われてるとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより近頃ちかごろでは人間が嫌いになっっているんでしょう。だからその人間の一人いちにんとして、私も好かれるはずがないじゃありませんか」

奥さんの嫌われているという意味がやっと私に呑み込めた。

私は奥さんわたくしの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺戟しげきを与えた。それで奥さんはその頃流行ころはやり始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。

私は女というものに深い交際つきあいをした経験のない迂闊うかつな青年であつた。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬どうけいの目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺ながめるような心持で、ただ漠然ぼくぜんと夢みていたに過ぎなかつた。だか

ら実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥力はんぱつりよくを感じた。奥さんに対した私にはそんな気がまるで出なかった。普通男女なんによの間に横たわる思想の不平均という考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

「奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもっと活動なさらないのでだろうと行って、あなたに聞いた時に、あなたはおっしやった事がありますね。元はああじゃなかったんだって」

「ええいいました。実際あんなじゃなかつたんですもの」

「どんなだつたんですか」

「あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だつたんです」

「それがどうして急に変化なすつたんですか」

「急にじゃありません、段々ああなたつて来たのよ」

「奥さんはその間あいだ始終先生といっしよにいらしたんでしよう」

「無論いましたわ。夫婦ですもの」

「じゃ先生がそう変つて行かれる原因げんいんがちゃんと解わかるべきはずで  
すがね」

「それだから困るのよ。あなたからそういわれると実に辛い<sup>つら</sup>んですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍<sup>なんべん</sup>あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」

「先生は何とおっしゃるんですか」

「何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからというだけで、取り合ってくれないんです」

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切<sup>とぎ</sup>らした。下女<sup>げじよべや</sup>部屋にいる下女はことりとも音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れ

てしまった。

「あなたは私に責任があるんだと思ってやしませんか」と突然奥さんが聞いた。

「いいえ」と私が答えた。

「どうぞ隠さずにいって下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまたいった。「これでも私は先生のためにできるだけの事はしているつもりなんです」

「そりゃ先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」

奥さんは火鉢の灰を掻き馴らした。それから水注の水を鉄瓶に

注した。鉄瓶は忽ち鳴りを沈めた。

「私はとうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なくいつて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだというんです。そういわれると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めた。

始め私は理解のある女性として奥さんに対していた。私がその気で話しているうちに、奥さんの様子が次第に変って来た。奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動かし始めた。自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それなのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあった。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちっともそこに落ち付いていられなかった。底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう

世の中まで厭いやになったのだらうと推測していた。けれどもどう骨を折っても、その推測を突き留めて事実とする事ができなかつた。先生の態度はどこまでも良人おととらしかった。親切で優しかった。疑いの塊かたまりをその日その日の情合じやうあひで包んで、そっと胸の奥にしまっておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

「あなたどう思ってた？」と聞いた。「私からああなったのか、それともあなたのいう人世観じんせいかんとか何とかいうものから、ああなったのか。隠ひそさずいって頂戴ちやうだい」

私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らないあるものが

そこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた。

「私には解りません」

奥さんは予期の外れた時に見る憐れな表情をその咄嗟に現わした。私はすぐ私の言葉を継ぎ足した。

「しかし先生が奥さんを嫌っていらっしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘を吐かない方でしょう」

奥さんは何とも答えなかった。しばらくしてからこういった。

「実は私すこし思いあたる事があるんですけども……」

「先生がああいう風ふうになった原因げんいんについてですか」

「ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが、……」

「どんな事ですか」

奥さんはいい渋ひびって膝ひざの上に置いた自分の手を眺めていた。

「あなた判断して下すって。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱しかられるから。叱しかられな  
いところだけよ」

私は緊張して唾液つばきを呑み込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達いが一人あったのよ。その方がかたちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私語ささやくような小さな声で、「実は変死したんです」といった。それは「どうして」と聞き返さずにはいられないようないい方であった。

「それっ切りしかいえないのよ。けれどもその事があってから後のちなんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解っていないで

しよう。けれどもそれから先生が変わって来たと思えば、そう思われない事もないのよ」

「その人の墓ですか、ぞうしがや雑司ヶ谷にあるのは」

「それもいわない事になってるからいいません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化できるものでしょうか。

私はそれが知りたくってたま堪らないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」

私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

私わたくしは私のつらまえた事実の許す限り、奥さんを慰めようとした。奥さんもまたできるだけ私によつて慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合つた。けれども私  
はもともと事の大根おおねを攫つかんでいなかった。奥さんの不安も実はそ  
こに漂ただよう薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になる  
と、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところ  
でも悉すつかり皆は私に話す事ができなかった。したがつて慰める私も、  
慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆら  
ゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、覚束おぼつかない私の判  
断すだに縋すがり付こうとした。

十時頃ごろになって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐すわっている私をそっちのけにして立ち上がった。そうして格子こうしを開ける先生をほとんど出で合い頭あがしらに迎えた。私は取り残されながら、後あとから奥さんに尾ついて行いった。下女げじよだけは仮寝うたたねでもしていたとみえて、ついに出て来こなかつた。

先生はむしろ機嫌がよかつた。しかし奥さんの調子はさらによかつた。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜たまった涙の光と、それから黒い眉毛まゆげの根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺ながめた。もしそれが詐いつわりでな

かったならば、（実際それは詐りとは思えなかったが）、今までの奥さんの訴えは感傷を玩ぶためセンチメントもてあそにとくに私を相手に拵こしらえた、徒いたずらな女性の遊戯と取れない事もなかった。もつともその時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかった。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必要もなかったんだと考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張合はりあいが抜けやしませんか」といった。

帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調

子は忙しいところを暇を潰つぶさせて気の毒だというよりも、せつかく来たのに泥棒がはいらなくって気の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそっぴいなながら、先刻さつぎ出した西洋菓子せいようかしの残りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂たもとへ入れて、人通りの少ない夜寒よさむの小路こうじを曲折にぎして賑やかな町の方へ急いだ。

私はその晩の事を記憶のうちから抽ひき抜いてここへ詳くわしく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実をいうと、奥さんに菓子を貰もらって帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日よくじつ午飯ひるめしを食いに学校から帰ってきて、昨夜机ゆうべの上に載のせて置いた菓子の包みを見ると、す

ぐその中からチョコレートを塗った鳶色とびいろのカステラを出して頬ほお張はった。そうしてそれを食う時に、必竟ひつぎようこの菓子を私にくれた二人の男女なんによは、幸福な一対いっついとして世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅うちへ出ではいりをするついでに、衣服あらいの洗い張りはりや仕立したて方かたなどを奥さんに頼んだ。それまで繻絆じゆばんというものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねるようになったのはこの時からであった。子供のない奥さんは、そういう世話を焼くのがかえって退屈たいくつ凌しのぎになつて、結句けっく身体からだの薬くすりだぐらいの事をいって

た。

「こりや手織りね。こんな地の好い着物は今まで縫った事がないわ。その代り縫い悪いのよそりやあ。まるで針が立たないんですもの。お蔭で針を二本折りましたわ」

こんな苦情をいう時ですら、奥さんは別に面倒くさいという顔をしなかった。

## 二十一

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。

私の母から受け取った手紙の中に、父の病気の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった。

父はかねてから腎臓を病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病は慢性であった。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかった。現に父は養生のお蔭一つで、今日までどうかこうか凌いで来たように客が来ると吹聴していた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返った。家内のも

のは軽症の脳溢血のういつけつと思い違えて、すぐその手当をした。後あとで医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間まがあった。私は学期の終りまで待っていても差支さしつかえあるまいと思って一日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様子だの、母の心配している顔だのが時々眼に浮かんだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗なめた私は、とうとう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手数てかずと時間を省くため、私は暇いとま乞ひいかたがた先生の所へ行っ

て、要<sup>い</sup>るだけの金を一時立て替えてもらおう事にした。

先生は少し風邪<sup>かぜ</sup>の気味で、座敷へ出るのが臆<sup>おっくう</sup>劫<sup>くわう</sup>だといって、私をその書齋に通した。書齋の硝子戸<sup>ガラスど</sup>から冬に入<sup>い</sup>って稀<sup>まれ</sup>に見るような懐<sup>な</sup>かしい和<sup>やわ</sup>らかな日光が机掛<sup>つくえか</sup>けの上に射<sup>さ</sup>していた。先生はこの日あたりの好<sup>い</sup>室<sup>へや</sup>の中へ大きな火鉢を置いて、五徳<sup>ごとく</sup>の上に懸けた金盥<sup>かなだらい</sup>から立ち上<sup>あが</sup>る湯気<sup>ゆげ</sup>で、呼<sup>い</sup>吸<sup>き</sup>の苦しくなるのを防<sup>ま</sup>いでいた。

「大病は好<sup>い</sup>いが、ちよつとした風邪<sup>かぜ</sup>などはかえって厭<sup>いや</sup>なものですね」といった先生は、苦笑しながら私の顔を見た。

先生は病氣という病氣をした事のない人であった。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなくなった。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病気は真平まっぴらです。先生だって同じ事でしょう。試みにやっでご覧になるとよく解わかります」

「そうかね。私は病気になるくらいなら、死病に罹かかりたいと思ってる」

私は先生のいう事に格別注意を払わなかった。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりゃ困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持って行きたまえ」

先生は奥さんと呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれ

た。それを奥の茶筆筒ちゃだんすか何かの抽出ひきだしから出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭寧ていねいに重ねて、「そりゃご心配ですね」といった。

「何遍なんべんも卒倒したんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」

「ええ」

先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなったのだという事が始めて私に解った。

「どうせむずかしいんでしょう」と私がいった。

「そうさね。私が代られれば代ってあげても好いが。——嘔気はきけは

あるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、大方おおかたないんでしょう」  
「吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんがいった。

私はその晩の汽車で東京を立った。

## 二十二

父の病気は思ったほど悪くはなかった。それでも着いた時は、  
床とこの上に胡坐あぐらをかいて、「みんなが心配するから、まあ我慢して  
こう凝じっとしている。なにももう起きてもいいのさ」といった。しか

しその翌日よくじつからは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてしまった。母は不承無性ふしやうぶしやうに太織ふとおりの蒲団ふとんを畳みながら「お父さんはお前が帰って来たので、急に気が強くおなりなんだよ」といった。私わたくしには父の挙動がさして虚勢を張っているようにも思えなかった。

私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは万一の事があ  
る場合でなければ、容易ちちははに父母の顔を見る自由の利きかない男であ  
った。妹は他国へ嫁とついだ。これも急場の間に合うように、おい  
それと呼び寄せられる女ではなかった。兄妹きょうだい三人のうちで、一番  
便利なのはやはり書生をしている私だけであった。その私が母の

いい付け通り学校の課業を放り出して、休み前に帰って来たという事が、父には大きな満足であった。

「これしきの病気に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰山な手紙を書くものだからいけない」

父は口ではこういった。こういったばかりでなく、今まで敷いていた床を上げさせて、いつものような元気を示した。

「あんまり軽はずみをしてまた逆回すといけませんよ」

私のこの注意を父は愉快そうにしかし極めて軽く受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように要心さえしていれば」

実際父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切

れなければ、眩暈めまいも感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもないので、私たちは格別それを気に留めなかった。

私は先生に手紙を書いて恩借おんしゃくの礼を述べた。正月上京する時に持参するからそれまで待ってくれるようにと断わった。そうして父の病状の思ったほど険悪でない事、この分なら当分安心な事、眩暈はきけも嘔気いぢこんも皆無なな事などを書き連ねた。最後に先生の風邪ふうじゃについて一言いちごんの見舞を附つけ加えた。私は先生の風邪を實際軽く見ていたので。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかつ

た。出した後で父や母と先生の噂うわせなどをしながら、遥はるかに先生の書斎を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎茸しいたけでも持って行ってお上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸なぞを食うかしら」

「旨うまいくはないが、別に嫌きらいな人もないだろう」

私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であった。

先生の返事が来た時、私はちよつと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかった時、驚かされた。先生はただ親切せいちんづくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった。もつと

もこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一というと私と先生の間には書信の往復がたびたびあったように思われるが、事實は決してそうでない事をちよつと断わつておきたい。私は先生の生前にたった二通の手紙しか貰<sup>もら</sup>つていない。その一通は今いうこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛<sup>あて</sup>で書いた大変長いものである。

父は病気の性質として、運動を慎まなければならぬので、床を上げてからも、ほとんど戸外<sup>そと</sup>へは出なかつた。一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万<sup>ま</sup>一<sup>いつ</sup>を気遣<sup>きづか</sup>つ

て、私が引き添うように傍そばに付いていた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑って応じなかった。

二十三

私わたくしは退屈な父の相手としてよく将碁盤しょうぎばんに向かった。二人とも無精な性質たなので、炬燵こたつにあたたたまま、盤やぐらを櫓の上へ載のせて、駒こまを動かすたびに、わざわざ手を掛蒲団かけぶとんの下から出すような事をした。時々持駒もちこまを失なくして、次の勝負の来るまで双方とも知らずにいたりした。それを母が灰の中から見付け出して、火箸ひばしで挟はさみ上

げるといふ滑稽こっけいもあつた。

「碁ごだと盤ばんが高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵こたげの上では打てないが、そこへ来ると将碁盤しょうごばんは好いいね、こうして楽らくに差せるから。無精者むせうしやには持つて来いだ。もう一番やろう」

父は勝つた時は必ずもう一番やろうといった。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうといった。要するに、勝つても負けても、炬燵こたげにあたつて、将碁しょうごを差したがる男であつた。始めのうちには珍めづしいので、この隠居いんきよじみた娯楽ごらくが私にも相当の興味きょうみを与えたが、少し時日が経たつに伴つれて、若い私の気力きりきはそのくらいな刺戟しげきで満足まんぞくできなくなつた。私は金きんや香車かうしやを握にぎつた拳こぶしを頭の上へ伸ば

して、時々思い切ったあくびをした。

私は東京の事を考えた。そうして漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不思議にもその鼓動の音がある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であった。他に認められるという点からいえばどっちも零であった。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかった。かつて遊興のために往来をした

覚えおぼのない先生は、歡樂の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭というのはあまりに冷ひややか過ぎるから、私は胸といい直したい。肉のなかに先生の力が喰くい込んでいるといっても、血のなかに先生の命が流れているといっても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまたいうまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになって来た。これは夏休みなどに国へ帰る

誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐら  
いは下にも置かないように、ちやほやもてな歓迎されるのに、その峠を  
定規通りていきどお通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、し  
まいには有っても無くっても構わないもののように粗末に取り扱  
われがちになるものである。私も滞在中にその峠を通り越した。  
その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを  
東京から持って帰った。昔でいうと、儒者じゆしやの家へ切支丹キリシタンの臭いにおを  
持ち込むように、私の持って帰るものは父とも母とも調和しな  
かった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いてい  
るものだから、出すまいと思っても、いつかそれが父や母の眼に

留<sup>と</sup>まった。私はつい面白くなくなった。早く東京へ帰りたくなつた。

父の病気は幸い現状維持のまま、少しも悪い方へ進む模様は見えなかった。念のためにわざわざ遠くから相当の医者を招いたりして、慎重に診察してもらってもやはり私の知っている以外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといい出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。

「もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母がいった。

「まだ四、五日いても間に合うんだろう」と父がいった。

私は自分の極めた出立の日を動かさなかつた。

## 二十四

東京へ帰ってみると、松飾はいつか取り払われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた景気はなかつた。

私は早速先生のうちへ金を返しに行つた。例の椎茸もついでに持つて行つた。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれといいましたとわざわざ断つて奥さんの前へ置いた。椎茸

は新しい菓子折に入れてあった。鄭寧ていねいに礼を述べた奥さんは、次の間まへ立つ時、その折を持って見て、軽いのに驚かされたのか、「こりや何の御菓子おかし」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊たんぱくな小供こどもらしい心を見せた。

二人とも父の病気について、色々掛念けねんの問いを繰り返してくれた中に、先生はこんな事をいった。

「なるほど容体ようたいを聞くと、今が今どうという事もないようですが、病気が病気だからよほど気をつけないといけません」

先生は腎臓じんぞうの病やまいについて私の知らない事を多く知っていた。

「自分で病気に罹かかっていながら、気が付かないで平気でいるのが

あの病の特色です。私の知ったある士官しかんは、とうとうそれでやられたが、全く嘘うそのような死に方をしたんですよ。何しろ傍そばに寝ていた細君さいくんが看病をする暇もなんにもないくらいなんですからね。夜中にちよつと苦しいといつて、細君を起したぎり、翌あくる朝はもう死んでいたんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思ってたんだっていうんだから」

今まで楽天的に傾いていた私は急に不安になった。

「私の父おやじもそんなになるでしょうか。ならんともいえないですね」

「医者は何とこののです」

「医者は到底治らないというんです。けれども当分のところ心配はあるまいともいうんです」

「それじゃ好いでしよう。医者がそういうなら。私の今話したのは気が付かずにいた人の事で、しかもそれがずいぶん乱暴な軍人なんだから」

私はやや安心した。私の変化を凝と見ていた先生は、それからこう付け足した。

「しかし人間は健康にしる病気にしる、どっちにしても脆いものですね。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」

「先生もそんな事を考えてお出いでですか」

「いくら丈夫の私でも、満まん更げ考ごうえない事もあります」

先生の口元には微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあっと思まう間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」

「不自然な暴力って何ですか」

「何だかそれは私にも解わからないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」

「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭かげですね」

「殺される方はちっとも考えていなかった。なるほどそういえば

そうだ」

その日はそれで帰った。帰ってから父の病気はそれほど苦にならなかった。先生のいった自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、後は何らのこだわりを私の頭に残さなかった。私は今まで幾度か手を着けようとしては手を引っ込めた卒業論文を、いよいよ本式に書き始めなければならぬと思いついた。

その年の六月に卒業するはずの私は、わたくしぜひともこの論文を成規せいぎ通り四月いっばいに書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折って余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑うたぐった。他のものはよほど前から材料を蒐あつめたり、ノートを溜ためたりして、余所目にも忙いそがしそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改まったら大いにやろうという決心だけがあった。私はその決心でやり出した。そうして忽たちまち動けなくなつた。今まで大きな問題を空くうに描えがいて、骨組みだけはほぼでき上っているくらいに考えていた私は、頭を抑おさえて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。

そうして練り上げた思想を系統的に纏める<sup>まと</sup>手数を省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相当な結論をちよつと付け加える事にした。

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしようといった。狼狽<sup>ろうばい</sup>した気味の私は、早速<sup>さつそく</sup>先生の所へ出掛けて、私の読まなければならぬ参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうといった。しかし先生はこの点について毫<sup>ごう</sup>も私を指導する任に当ろうとしなかった。

「近頃ちかごろはあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」

先生は一時非常の読書家であったが、その後ごどういいう訳か、前ほどのこの方面に興味が無くなったようだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思い出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味をもち得ないんですか」

「なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほどえらくならないと思うせいでしょう。それから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないと恥のようにきまりが悪かったものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなっただけでしょう。まあ早くいえば老い込んだのです」

先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を向けた人の苦味<sup>み</sup>を帯びていなかっただけに、私にはそれほどの手応え<sup>てごた</sup>もなかつた。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せず<sup>ず</sup>に歸つた。

それからの私はほとんど論文に崇たられた精神病者のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前ぜんに卒業した友達について、色々様子聞いてみたりした。そのうちの一人いちにんは締切しめきりの日に車で事務所へ馳かけつけて漸ようやく間に合わせたといった。他の一人は五時を十五分ほど後おくらして持って行ったため、危あやうく跳はね付けられようとしたところを、主任教授の好意でやっと受理してもらったといった。私は不安を感じると共に度胸を据すえた。毎日机の前で精根のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書庫にはいつて、高い本棚のあちらこちらを見廻みまわした。私の眼は好事家こうずかが骨董こつとうでも掘り出す時のように背表紙の金文字をあさった。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向を南へ更えて行った。それが一仕切経つと、桜の噂がちらほら私の耳に聞こえ出した。それでも私は馬車馬のように正面ばかり見て、論文に鞭うたれた。私はついに四月の下旬が来て、やっと予定通りのものを書き上げるまで、先生の敷居を跨がなかった。

## 二十六

私の自由になつたのは、八重桜の散った枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であった。私は籠を抜け出した

小鳥の心をもつて、広い天地を一目に見渡しながら、自由に羽搏はばたきををした。私はすぐ先生の家うちへ行つた。枳殼からたちの垣が黒ずんだ枝の上に、萌もえるような芽を吹いていたり、柘榴ざくろの枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかかそうに日光を映していたりするのが、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍しさを覚えた。

先生は嬉うれしそうな私の顔を見て、「もう論文は片付いたんですか、結構ですね」といった。私は「お蔭かげでようやく済みました。もう何にもする事はありません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべきすべての仕事ですでに結了けつりょう

して、これから先は威張って遊んでいても構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、しきりにその内容を喋々ちやうちやうちした。先生はいつもの調子で、「なるほど」とか、「そうですね」とかいつてくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物足りないというよりも、聊ちやうか拍子抜けの気味であった。それでもその日私の気力は、因循いんじゆんらしく見える先生の態度に逆襲を試みるほどに生々いきいきしていた。私は青く蘇よみがえ生ろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。

「先生どこかへ散歩しましょう。外へ出ると大変たいへん好い心持です」

「どっこへ」

私はどこでも構わなかった。ただ先生を伴<sup>つ</sup>れて郊外へ出たかった。

一時間の後<sup>のち</sup>、先生と私は目的どおり市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛<sup>あて</sup>もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉を撈<sup>も</sup>ぎ取って芝笛<sup>しばふえ</sup>を鳴らした。ある鹿兒島人<sup>かごしまじん</sup>を友達にもって、その人の真似<sup>まね</sup>をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であった。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖<sup>と</sup>ざされたように蓊鬱<sup>こんもり</sup>した小高い一構<sup>ひとかま</sup>えの下に細

い路みちが開ひらけた。門の柱に打ち付けた標札に何々園とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上のぼりになつてゐる入口を眺ながめて、「はいつてみようか」といった。私はすぐ「植木屋ですわね」と答えた。

植込うえこみの中をひと一うねりして奥へ上のぼると左側に家うちがあつた。明け放しつた障子しょうじの内はがらんとして人の影も見えなかつた。ただ軒先のきさきに据えた大きな鉢の中に飼つてある金魚が動いていた。

「静かだね。断ことわらずにはいつても構かまわないだらうか」  
「構かまわないでしょう」

二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかつ

た。躑躅つつじが燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺色かばいろの丈たけの高いのを指して、「これは霧島きりしまでしょう」といった。

芍薬しやくやくも十坪とつぽあまり一面に植え付けられていたが、まだ季節が来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬畠ばたけの傍そばにある古びた縁台のようなものの上に先生は大の字なりに寝た。私はその余った端はじの方に腰をおろして烟草タバコを吹かした。先生は蒼いあお透き徹すとおるような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。その若葉の色をよくよく眺ながめると、一々違っていた。同じ楓かえでの樹きでも同じ色を枝に着けているものは一つもなかった。細い杉苗いただきの頂いただきに投げ被かぶせてあった先生の帽子が風に吹かれて落ち

た。

二十七

私はわたくしすぐその帽子を取り上げた。所々ところどころに着いている赤土を爪つめで弾はじきながら先生を呼んだ。

「先生帽子が落ちました」

「ありがとう」

身体からだを半分起してそれを受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家には財産がよっぽどあるんですか」

「あるというほどありません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼のようだが」

「どのくらいって、山と田地が少しあるぎりで、金なんかまるでないでしょう」

先生が私の家の経済について、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであった。私の方はまだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかった。先生と知り合いになった始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑った。その後もこの疑いは絶えず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨な問題を先生の

前に持ち出すのをぶしつけとばかり思っていていつでも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。

「先生はどうなんです。どのくらいの財産をもっていていらっしやるんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服装なをしていた。それに家内かないは小人数にんずであった。したがって住宅も決して広くはなかった。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪にはいり込まない私の眼にさえ明らかであった。要するに先生の暮しは贅沢ぜいたくといえないま

でも、あたじけなく切り詰めた無弾力性のものではなかった。

「そうでしょう」と私がいった。

「そりゃそのくらいの金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもつと大きな家うちでも造るさ」

この時先生は起き上って、縁台の上に胡坐あぐらをかいていたが、こ  
ういい終ると、竹の杖つえの先で地面の上へ円のようなものを描かき始  
めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直まっすぐに立  
てた。

「これでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独り言ひとごとのようであった。それですぐ後あとに尾つい

て行き損なつた私は、つい黙っていた。

「これでも元は財産家なんですよ、君」といい直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかつた。むしろ不調法で答えられなかつたのである。すると先生がまた問題を他へ移した。

「あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」

私は父の病気について正月以後何にも知らなかつた。月々国から送ってくれる為替かわせと共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟しゅせきであつたが、病気の訴えはそのうちにほとんど見当らなかつた。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫えふるが少しも筆

の運びを乱していなかった。

「何ともいって来ませんが、もう好いでしょう」

「好ければ結構だが、——病症が病症なんだからね」

「やっぱり駄目ですかね。でも当分は持ち合ってるんでしょう。

何ともいって来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にす  
る、普通の談話と思って聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があった。先生自身の経験を持た

ない私は無論そこに気が付くはずがなかった。

二十八

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらっておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰<sup>じ</sup>うものはちゃんと貰<sup>じ</sup>っておくようにしたらどうですか。万一の事があったあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「ええ」

私は先生の言葉に大した注意を払わなかった。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに実際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。

「あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想してかかるような言葉遣いをするのが気に触ったら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なものでも、いつ死ぬか分らないものだからね」

先生の口気は珍しく苦々しかった。

「そんな事をちつとも気に掛けちゃいけません」と私は弁解した。

「君の兄弟きょうだいは何人でしたかね」と先生が聞いた。

先生はその上に私の家族の人数にんずを聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父おじや叔母おばの様子を問いただした。そうして最後にこういった。

「みんな善い人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもないようです。大抵田舎者いなかものですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追窮しゅうきゅうに苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる

余裕さえ与えなかつた。

「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいなものです。それから、君は今、君の親戚しんせきなぞのうち中に、これといって、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんないかた鑄型に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。だから油断ができないんです」

先生のいう事は、ここで切れる様子もなかつた。私はまたここ

で何かいおうとした。すると後ろうしろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の傍そばに、熊笹くまざさが三坪みつぼほど地を隠すように茂って生えていた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十とおぐらいの小供こどもが馳かけて来て犬を叱しかり付けた。小供は徽章きしやうの着いた黒い帽子を被かぶつたまま先生の前へ廻まわって礼をした。

「叔父さん、はいつて来る時、家うちに誰だれもいなかったかい」と聞いた。

「誰もいなかったよ」

「姉さんやおっかさんが勝手の方にいたのに」

「そうか、いたのかい」

「ああ。叔父さん、今日はって、断ってはいって来ると好よかったのに」

先生は苦笑した。懐中から墓口がまぐちを出して、五銭の白銅はくどうを小供の手に握らせた。

「おっかさんにそういつとくれ。少しここで休まして下さいて」

小供は怜悧りこうそうな眼に笑いわらを漲みなぎらして、首肯うなずいて見せた。

「今斥候長しやくこうぢやうになつてるところなんだよ」

小供はこう断つて、躑躅つっじの間を下の方へ駈け下りて行った。犬も尻尾しっぽを高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じくらいの年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行った方へ駈けていった。

## 二十九

先生の談話は、この犬と小供のために、結末まで進行する事ができなくなつたので、私はついにその要領を得ないでしまった。先生の氣にする財産うんぬん云々の掛念けねんはその時の私わたくしには全くなかつた。

私の性質として、また私の境遇からいって、その時の私には、そんな利害の念に頭を悩ます余地がなかったのである。考えるところは私がまだ世間に出ないためでもあり、また実際その場に臨まないためでもあったろうが、とにかく若い私にはなぜか金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかったのは、人間がいざという間際に、誰でも悪人になるとい言葉の意味であった。単なる言葉としては、これだけでも私に解<sup>わか</sup>らない事はなかった。しかし私はこの句についてもっと知りたかった。

犬と小供<sup>こども</sup>が去ったあと、広い若葉の園は再び故<sup>もと</sup>の静かさに帰っ

た。そうして我々は沈黙に鎖とざされた人のようにしばらく動かず  
にいた。うるわしい空の色がその時次第に光を失って来た。眼の  
前にある樹きは大概かえで楓であつたが、その枝に滴したたるように吹いた軽い  
緑の若葉が、段々暗くなつて行くように思われた。遠い往来を荷  
車を引いて行く響きがごろごろと聞こえた。私はそれを村の男が  
植木か何かを載せて縁えん日にちへでも出掛けるものと想像した。先生は  
その音を聞くと、急に瞑想めいそうから呼息いきを吹き返した人のように立ち  
上がった。

「もう、そろそろ帰りましょう。大分だいぶん日ひが永ながくなつたようだが、  
やっぱりこう安閑あんかんとしていゝうちには、いつの間にか暮れて行く

んだね」

先生の背中には、さつき縁台の上に仰向きあおもむに寝た痕あとがいつぱい着いていた。私は両手でそれを払い落した。

「ありがとうございます。脂やにがこびり着いてやしませんか」

「綺麗きれいに落ちました」

「この羽織はつい此間こないだごろ拵しらえたばかりなんだよ。だからむやみに汚して帰ると、妻さいに叱しかられるからね。有難う」

二人はまただらだら坂ざかの中途にある家うちの前へ来た。はいる時には誰もいる気色けしきの見えなかった縁えんに、お上かみさんが、十五、六の娘を相手に、糸巻へ糸を巻きつけていた。二人は大きな金魚鉢の横

から、「どうもお邪魔をしました」と挨拶あいさつした。お上さんは「いえお構かまい申しも致いたしませんで」と礼を返した後あと、先刻さっき小供にやった白銅はくどうの礼を述べた。

門口かどぐちを出て二、三町来ちやうた時、私はついに先生に向かつて口を切った。

「さきほど先生のいわれた、人間は誰だれでもいざという間に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」

「意味とって、深い意味もありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」

「事実で差支さしつかえありませんが、私の伺うかがいたいのは、いざという間

際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」

先生は笑い出した。あたかも時機じきの過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風ふうに。

「金かねさ君。金を見ると、どんな君子くんしでもすぐ悪人になるのさ」

私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰つまらなかった。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であった。私は澄ましてさっさと歩き出した。いきおい先生は少し後おくれがちになった。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。

「そら見たまえ」

「何をですか」

「君の気分だって、私の返事一つですぐ変わるじゃないか」  
待ち合わせるために振り向いて立ち留<sup>ど</sup>まった私の顔を見て、先生はこういった。

### 三十

その時の私<sup>わたくし</sup>は腹の中で先生を憎らしく思った。肩を並べて歩き出してからも、自分の聞きたい事をわざと聞かずにいた。しかし先生の方では、それに気が付いていたのか、いないのか、まるで私の態度に拘<sup>こ</sup>泥<sup>だわ</sup>る様子を見せなかった。いつもの通り沈黙がちに

落ち付き払った歩調をすまして運んで行くので、私は少し業腹ごうはらうになつた。何とかいって一つ先生をやっ付けてみたくなつて来た。

「先生」

「何ですか」

「先生はさつき少し昂奮こうふんなさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多めったに見た事がないんですが、今日は珍しいところを拝見したような気がします」

先生はすぐ返事をしなかつた。私はそれを手応えてごたのあつたようにも思つた。また的まとが外れたはずようにも感じた。仕方がないから後あとはいわれない事にした。すると先生がいきなり道の端はじへ寄つて行つ

た。そうして綺麗きれいに刈り込んだ生垣いけがきの下で、裾すそをまくって小便をした。私は先生が用を足す間ぼんやりそこに立っていた。

「やあ失敬」

先生はこういつてまた歩き出した。私はとうとう先生をやり込める事を断念した。私たちの通る道は段々賑にぎやかになった。今までちらほらと見えた広い畠はたけの斜面や平地ひらちが、全く眼に入いらないように左右の家並いえなみが揃そろってきた。それでも所々宅地たくちの隅などに、豌えん豆とうの蔓つるを竹にからませたり、金網かなあみで鶏にわとりを囲い飼いにしたりするのが閑静なごに眺ながめられた。市中から帰る駄馬だばが仕切りなく擦すれ違ちがって行った。こんなものに始終気を奪とられがちな私は、さつきまで胸

の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまつた。先生が突然そこへ後戻りあともとどをした時、私は実際それを忘れていた。

「私は先刻さつきそんなに昂奮したように見えただけですか」

「そんなにというほどでもありませんが、少し……」

「いや見えても構わない。実際昂奮こうふんするんだから。私は財産の事をいうときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、私はこれで大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年たつても二十年たつても忘れやしないんだから」

先生の言葉は元よりもなお昂奮していた。しかし私の驚いたのは、決してその調子ではなかつた。むしろ先生の言葉が私の耳に

訴える意味そのものであった。先生の口からこんな自白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執着力をいまだかつて想像した事さえなかった。私は先生をもっと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処ところに、私の懐かしみの根を置いていた。一時の気分で先生にちよつと盾たてを突いてみようとした私は、この言葉の前に小さくなつた。先生はこういつた。

「私は他ひとに欺あざむかれたのです。しかも血のつづいた親戚しんせきのものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼らは、父の死ぬや否いなや許しがたい不徳

義漢に変わったのです。私は彼らから受けた屈辱と損害を小供こどもの時から今日きょうまで背負しよわされている。恐らく死ぬまで背負わされ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事ができないんだから。しかし私はまだ復讐ふくしゅうをしずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えてたのだ。私はそれで沢山だと思おう」

私は慰藉いしやの言葉さえ口へ出せなかった。

その日の談話もついにこれぎりで発展せずじまつた。私はむしろ先生の態度に畏縮して、先へ進む気が起らなかったのである。

二人は市の外れから電車に乗ったが、車内ではほとんど口を聞かなかつた。電車を降りると間もなく別れなければならなかつた。別れる時の先生は、また変っていた。常よりは晴やかな調子で、「これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ」といった。私は笑って帽子を脱った。その時私は先生の顔を見て、先生ははたして心のどこで、一般の人間を憎んでいるのだろうかと疑った。

その眼、その口、どこにも厭世的の影は射していなかった。

私は思想上の問題について、大いなる利益を先生から受けた事を  
を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとして  
も、受けられない事が間々あったといわなければならない。先生  
の談話は時として不得要領に終わった。その日二人の間に起った郊  
外の談話も、この不得要領の一例として私の胸の裏に残った。  
無遠慮な私は、ある時ついにそれを先生の前に打ち明けた。先  
生は笑っていた。私はこういった。

「頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解ってる  
くせに、はつきりいつてくれないのは困ります」

「私は何にも隠してやしません」

「隠していらっしゃいます」

「あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごちやに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏まとめ上げた考えをむやみに人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉ことごとくあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」

「別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には

ほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足はできないのです」

先生はあきれたといった風に、私の顔を見た。巻烟草まきタバコを持っていたその手が少し顫ふるえた。

「あなたは大胆だ」

「ただ真面目まじめなんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」

「私の過去を詫あはいてもですか」

詫くという言葉が、突然恐ろしい響ひびきをもって、私の耳を打った。私は今私の前に坐すわっているのが、一人の罪人ざいにんであって、不断

から尊敬している先生でないような気がした。先生の顔は蒼あおかつた。

「あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「私は過去の因果いんがで、人を疑うたぐりつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純すぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いいから、他ひとを信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたははらの底から真面目ですか」

「もし私の命が真面目なものなら、私の今いった事も真面目で

す」

私の声は顫えた。

「よろしい」と先生がいった。「話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取ってそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増ましかも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適当の時機が来なくっちゃ話さないんだから」

私は下宿へ帰ってからも一種の圧迫を感じた。

私の論文は自分が評価していたほどに、教授の眼にはよく見えなかつたらしい。それでも私は予定通り及第した。卒業式の日、私は黴臭かびくさくなつた古い冬服を行李こくりの中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであつた。私は風を通らない厚羅紗あつらシヤの下に密封された自分の身体からだを持て余した。しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐしょぐしょになつた。

私は式が済むとすぐ帰つて裸体はだかになつた。下宿の二階の窓をあ

けて、遠眼鏡とおめがねのようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見えるだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになって、室へやの真中に寝そべった。私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。するとその間に立って一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた。

私はその晩先生の家へ御馳走ごちそうに招かれて行った。これはもし卒業したらその日の晩餐ばんさんはよそで喰くわずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であった。

食卓は約束通り座敷の縁近くに据えられてあった。模様の織り出された厚い糊の硬い卓布が美しくかつ清らかに電燈の光を射返していた。先生のうちで飯を食うと、きつとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸や茶碗が置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真白なものに限られていた。

「カラヤカフスと同じ事さ。汚れたのを用いるくらいなら、一層始めから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくつちや」

こういわれてみると、なるほど先生は潔癖であった。書斎なども実に整然と片付いていた。無頓着な私には、先生のそういう特

色が折々著しく眼に留まった。

「先生は癩性かんしょうですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは「でも着物などは、それほど気にしないようですよ」と答えた事があつた。それを傍そばに聞いていた先生は、「本当をいうと、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿かばか馬鹿かしい性分しょうぶんだ」といつて笑つた。精神的に癩性という意味は、俗にいう神経質という意味か、または倫理的に潔癖だという意味か、私には解わからなかつた。奥さんにも能よく通じないらしかつた。

その晩私は先生と向い合せに、例の白い卓布たくふの前に坐すわつた。奥

さんは二人を左右に置いて、独り庭ひとの方を正面にして席を占めた。

「お目出とう」といって、先生が私のために杯さかずきを上げてくれた。

私はこの盃さかずきに対してそれほど嬉しいうれ気を起さなかった。無論私自身の心がこの言葉に反響するように、飛び立つ嬉しさをもっていなかったのが、一つの源因げんいんであつた。けれども先生のいい方も決して私の嬉うれしさを唆そそる浮々うきうきした調子を帯びていなかった。先生は笑って杯さかずきを上げた。私はその笑いのうちに、些ちつとも意地の悪いアイロニーを認めなかった。同時に目出たいという真情も汲くみ取る事ができなかつた。先生の笑いは、「世間はこんな場合によくお

目出とうといいたがるものですね」と私に物語っていた。

奥さんは私に「結構ね。さぞお父<sup>とう</sup>さんやお母<sup>かあ</sup>さんはお喜びでしよう」といつてくれた。私は突然病気の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行って見せてやろうと思った。

「先生の卒業証書はどうしました」と私が聞いた。

「どうしたかね。——まだどこかにしまっていたかね」と先生が奥さんに聞いた。

「ええ、たしかしまっているはずですが」

卒業証書の在処<sup>あつち</sup>は二人ともよく知らなかった。

飯めしになった時、奥さんは傍そばに坐すわっている下女げじよを次へ立たせて、自分で給仕きゆうじの役をつとめた。これが表立たない客に対する先生の家の仕来りしきたりしかつた。始めの一、二回は私わたくしも窮屈を感じたが、度数の重なるにつけ、茶碗ちやわんを奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。

「お茶？ ご飯はん？ ずいぶんよく食べるのね」

奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事をいうことがあつた。しかしその日は、時候が時候なので、そんなに調戯からかわれるほど食

欲が進まなかった。

「もうおしまい。あなた近頃ちかごろ大変小食しょうしょくになったのね」

「小食になったんじゃないありません。暑いんで食われないんです」

奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子みずがしを運ばせた。

「これは宅うちで拵こしらえたのよ」

用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞ふるうだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更かえてもらった。

「君もいよいよ卒業したが、これから何をする気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居際しきいぎわで背中を

障子しようじに靠もたせていた。

私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的あてもなかった。返事にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役人やくにん？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出した。

「本当いうと、まだ何を考える考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんですから。だいたいどれが善いいか、どれが悪いいか、自分がやって見た上でないと解わからないんだから、選択に困る訳だと思えます」

「それもそうね。けれどもあなたは必竟ひつきやう財産があるからそんな呑のん

気きな事をいっていられるのよ。これが困る人でご覧なさい。なか  
なかあなたのように落ち付いちゃいられないから」

私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人  
があつた。私は腹の中で奥さんのいう事実を認めた。しかしこう  
いった。

「少し先生にかぶれたんでしよう」

「碌ろくなかぶれ方をして下さらないのね」

先生は苦笑した。

「かぶれても構わないから、その代りこの間いった通り、お父さ  
んの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらってお置きなさい

い。それでないと決して油断はならない」

私は先生といっしょに、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躑躅つつじの咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途みちに、先生が昂奮こうふんした語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄すごい言葉であつた。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあつた。

「奥さん、お宅たくの財産はよッぽどあるんですか」

「何だつてそんな事をお聞きになるの」

「先生に聞いても教えて下さらないから」

奥さんは笑いながら先生の顔を見た。

「教えて上げるほどないからでしょう」

「でもどのくらいあったら先生のようにしていただけるか、宅へ  
帰って一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」

先生は庭の方を向いて、澄まして烟草タバコを吹かしていた。相手は  
自然奥さんでなければならなかった。

「どのくらいってほどありやしませんわ。まあこうしてどうかこ  
うか暮してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜いと  
して、あなたはこれから何か為なさらなくっちゃ本当にいけません  
よ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」

「ごろごろばかりしていやしないさ」

先生はちよつと顔だけ向け直して、奥さんの言葉を否定した。

### 三十四

私はその夜十時過ぎに先生の家を辞した。二、三日うちに帰国するはずになっていたので、座を立つ前に私はちよつと暇乞いの言葉を述べた。

「また当分お目にかかれませんか」

「九月には出ていらっしやるんでしょうね」

私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかった。しかし暑い盛りの八月を東京まで来て送ろうとも考えていなかった。私には位置を求めるための貴重な時間というものがなかった。

「まあ九月頃ごろになるでしょう」

「じゃずいぶんご機嫌きげんよう。私たちもこの夏はことによるとどこかへ行くかも知れないのよ。ずいぶん暑そうだから。行ったらまた絵端書えはがきでも送って上げましょう」

「どちらの見当です。もしいらっしやるとすれば」

先生はこの問答をにやにや笑って聞いていた。

「何まだ行くとも行かないとも極めていやしないんです」

席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「時にお父さんの病気はどうなんです」と聞いた。私は父の健康についてほとんど知るところがなかった。何ともいつて来ない以上、悪くはないのだろうくらいに考えていた。

「そんなに容易く考えられる病気じゃありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」

尿毒症という言葉も意味も私には解らなかった。この前の冬休みに国で医者と会見した時に、私はそんな術語をまるで聞かなかった。

「本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんもいった。「毒が脳へ廻まわるようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」

無経験な私は気味を悪がりながらも、にやにやしていた。

「どうせ助からない病気だそうですから、いくら心配したって仕方ありません」

「そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」

奥さんは昔同じ病気で死んだという自分のお母さんの事でも憶おもい出したのか、沈んだ調子でこういったなり下を向いた。私も父の運命が本当に気の毒になった。

すると先生が突然奥さんの方を向いた。

「静しず、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」

「なぜ」

「なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己おれの方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那だんなが先で、細君さいくんが後へ残るのが当り前のようになってるね」

「そう極きまった訳でもないわ。けれども男おとこの方はどうしても、そら  
年が上でしよう」

「だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己もお前より先に  
あの世へ行かなくっちゃならない事になるね」

「あなたは特別よ」

「そうかね」

「だって丈夫なんですもの。ほとんど煩わづらひった例ためしがないじゃありませんか。そりやどうしたって私の方が先だわ」

「先かな」

「え、きつと先よ」

先生は私の顔を見た。私は笑った。

「しかもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」

「どうするって……」

奥さんはそこで口籠くちごもった。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちよつと奥さんの胸を襲ったらしかった。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更かえていた。

「どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定ろうしよふじょうっていうくらいだから」

奥さんはことさらに私の方を見て笑談じょうだんらしくこういった。

### 三十五

私はわたくし立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人

の相手になっていた。

「君はどう思います」と先生が聞いた。

先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固もとより私に判断のつくべき問題ではなかった。私はただ笑っていた。

「寿命は分りませんね。私にも」

「こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極きまつた年数をもらって来るんだから仕方がないわ。先生のお父ちちさんやお母おんさんなんか、ほとんど同じよ、あなた、亡なくなったのが」

「亡なくなられた日がですか」

「まさか日まで同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だって

続いて亡くなっちまったんですもの」

この知識は私にとって新しいものであった。私は不思議に思った。

「どうしてそう一度に死なれたんですか」

奥さんは私の問いに答えようとした。先生はそれを遮った。

「そんな話はお止しよ。つまらないから」

先生は手に持った団扇うちわをわざとばたばたいわせた。そうしてまた奥さんを顧みた。

「静しず、おれが死んだらこの家うちをお前にやろう」

奥さんは笑い出した。

「ついでに地面も下さいよ」

「地面は他のものだから仕方がない。その代りおれの持つてるものは皆みんななお前にやるよ」

「どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰もらっても仕様がないわね」

「古本屋に売るさ」

「売ればいくらぐらいになつて」

先生はいくらともいわなかった。けれども先生の話は、容易に自分の死という遠い問題を離れなかった。そうしてその死は必ず奥さんの前に起るものと仮定されていた。奥さんも最初のうち

は、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えた。それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。

「おれが死んだら、おれが死んだらって、まあ何遍なんべんおっしやるの。後生ごしようだからもう好いい加減にして、おれが死んだら止よして頂ちよう戴だい。縁喜えんぎでもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いいじゃありませんか」

先生は庭の方を向いて笑った。しかしそれぎり奥さんの厭いやがる事をいわなくなった。私もあまり長くなるので、すぐ席を立った。先生と奥さんは玄関まで送って出た。

「ご病人をお大事だいじに」と奥さんがいった。

「また九月に」と先生がいった。

私は挨拶あいさつをして格子こうしの外へ足を踏み出した。玄関と門の間にあるこんもりした木犀もくせいの一株ひとかぶが、私の行手ゆくてを塞ふさぐように、夜陰やいんのうちには枝を張っていた。私は二、三步動き出しながら、黒ずんだ葉おほに被おほわれているその梢こずえを見て、来たるべき秋の花と香を想おもい浮べた。私は先生の宅うちとこの木犀とを、以前から心のうちで、離す事のできないもののように、いっしよに記憶していた。私が偶然その樹きの前に立って、再びこの宅の玄関を跨またぐべき次の秋に思いを馳はせた時、今まで格子の間から射さしていた玄関の電燈がふっと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へはいったらしかった。私は一人暗

い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかつた。国へ帰る前に調<sup>ととの</sup>える買物もあつたし、ご馳走<sup>ちそう</sup>を詰めた胃袋にくつつろぎを与える必要もあつたので、ただ賑<sup>にぎ</sup>やかな町の方へ歩いて行つた。町はまだ宵の口であつた。用事もなさそうな男女<sup>なんによ</sup>がぞろぞろ動く中に、私は今日私といつしよに卒業したなにがしに会つた。彼は私を無理やりにある酒場<sup>バー</sup>へ連れ込んだ。私はそこで麦酒<sup>ビール</sup>の泡のような彼の気焰<sup>きえん</sup>を聞かされた。私の下宿へ歸つたのは十二時過ぎであつた。

私はその翌日よくじつも暑さわたくしを冒おかして、頼まれものを買い集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないように考えていたのが、いざとなると大変臆劫おっくうに感ぜられた。私は電車の中で汗を拭ふきながら、他の時間ひとと手数ひとに気の毒いなかものという観念をまるでもっていない。田舎者いなかものを憎らしく思った。

私はこの一夏ひとなつを無為に過ごす気はなかった。国へ帰ってからの日程というようなものをあらかじめ作っておいたので、それを履りこ行うするに必要な書物も手に入れなければならなかった。私は半日を丸善まるぜんの二階で潰つぶす覚悟つづでいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立って、隅から隅まで一冊ずつ点検して行った。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟はんえりであった。小僧に  
いうと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいの  
か、買う段になつては、ただ迷うだけであった。その上価あたいが極きわめ  
て不定であった。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、  
高かろうと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かつたりし  
た。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違さちがひが出るの  
か見当の付かないのもあつた。私は全く弱よわらせられた。そうして  
心のうちで、なぜ先生の奥おくさんを煩わづらわさなかつたかを悔くいた。

私は靴かばんを買つた。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それ  
でも金具やなどがぴかぴかしているので、田舎ものを威嚇おどかすに

は充分であった。この鞆を買うという事は、私の母の注文であった。卒業したら新しい鞆を買って、そのなかに一切の土産物を入れて帰るようにと、わざわざ手紙の中に書いてあった。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料簡が解らないというよりも、その言葉が一種の滑稽として訴えたのである。

私は暇乞いをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立って国へ帰った。この冬以来父の病気について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういうものか、それが大して苦にならなかつた。私はむしろ父がいなくなったあとの母を想像して気の毒に

思った。そのくらいだから私は心のどこかで、父はすでに亡くなるべきものと覚悟していたに違いなかった。九州にいる兄へやつた手紙のなかにも、私は父の到底故とてもとのような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあろうが、できるなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰ったらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎりいで田舎にいるのは定さだめて心細いだろう、我々も子として遺憾いの至いたりであるというような感傷的な文句さえ使った。私は実際心に浮ぶままを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違っていた。

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分

が自分に気の変りやすい軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になった。私はまた先生夫婦の事をおも思い浮べた。ことに二、三日前ばんめし晩食に呼ばれた時の会話をおも憶い出した。

「どつちが先へ死ぬだろう」

私はその晩先生と奥さんの間に起った疑問をひとり口の内で繰り返してみた。そうしてこの疑問には誰も自信をもって答える事ができないのだと思った。しかしどつちが先へ死ぬとはっきり判然分つていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外ほかに仕方がないだろうと思つた。（死に近づきつつある父を国元に控えながら、この

私がどうする事もできないように)。私は人間を果敢<sup>は</sup>ないもの<sup>か</sup>に  
観じた。人間のどうする事もできない持って生れた軽薄を、果敢  
ないものに観じた。

中  
両親と私

—

宅<sup>うち</sup>へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった。

「ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業ができてまあ結構だった。ちよつとお待ち、今顔を洗って来るから」

父は庭へ出て何かしていたところであった。古い麦藁帽むぎわらぼうの後ろへ、日除ひよけのために括り付けた薄汚うすぎたないハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻まわって行った。

学校を卒業するのを普通の人間として当然のように考えていた私は、それを予期以上に喜んでくれる父の前に恐縮わたくしした。

「卒業ができてまあ結構だ」

父はこの言葉を何遍なんべんも繰り返した。私は心のうちでこの父の喜びと、卒業式があった晩先生の家の食卓うちで、「お目出とう」とい

われた時の先生の顔付かおつきとを比較した。私には口で祝いわってくれながら、腹の底でけなしている先生の方が、それほどにもないものを珍うれしそうに嬉うれしがる父よりも、かえって高尚に見えた。私はしまいに父の無知から出る田舎臭いなかくさいところに不快を感じ出した。

「大学ぐらい卒業したって、それほど結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だってあります」

私はついにこんな口の利ききようをした。すると父が変な顔をした。

「何も卒業したから結構とばかりいうんじゃない。そりゃ卒業は結構に違ちがいが、おれのいうのはもう少し意味があるんだ。そ

れがお前に解わかっていてくれさえすれば、……」

私は父からその後あとを聞こうとした。父は話したくなさそうであつたが、とうとうこういつた。

「つまり、おれが結構という事になるのさ。おれはお前の知つて通りの病気だろう。去年の冬お前に会つた時、ことによるともみつきう三月よつきか四月よつきぐらいなものだろうと思つていたのさ。それがどうしあわいう仕合せか、今日までこうしている。起居たちいに不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉うれしいのさ。せつかく丹精たんせいした息子が、自分のいなくなつた後あとで卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉うれしい

だろうじゃないか。大きな考えをもっているお前から見たら、高たかが大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だといわれるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取ってより、このおれに取って結構なんだ。解ったかい」

私は一言いちごんもなかった。詫あやまる以上に恐縮して俯向うつむいていた。父は平気なうちに自分の死を覚悟していたものとみえる。しかも私の卒業する前に死ぬだろうと思いつめていたとみえる。その卒業が父の心にどのくらい響くかも考えずにいた私は全く愚おろかものであった。私は鞆かばんの中から卒業証書を取り出して、それを大事そう

に父と母に見せた。証書は何かに押し潰されて、元の形を失っていた。父はそれを鄭寧に伸した。

「こんなものは巻いたなり手に持って来るものだ」

「中にも心でも入れると好かったのに」と母も傍から注意した。

父はしばらくそれを眺めた後、起って床の間の所へ行つて、誰の目にもすぐはいるような正面へ証書を置いた。いつもの私ならすぐ何とかいうはずであったが、その時の私はまるで平生と違っていた。父や母に対して少しも逆らう気が起らなかった。私はだまって父の為すがままに任せておいた。一旦癖のついた鳥の子紙の証書は、なかなか父の自由にならなかつた。適当な位置に置か

れるや否いなや、すぐ己おのれに自然いな勢いきいを得て倒れようとした。

二

私わたくしは母を蔭かげへ呼んで父の病状を尋ねた。

「お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」

「もう何ともないようだよ。大方おおかた好くおなりなんだろう」

母は案外平気であった。都会から懸かけ隔たった森や田の中に住んでいる女の常として、母はこういう事に掛けてはまるで無知識

であった。それにしてもこの前父が卒倒した時には、あれほど驚いて、あんなに心配したものを、と私は心のうちで独り異な感じを抱いた。

「でも医者はその時到底むずかしいって宣告したじゃありませんか」

「だから人間の身体ほど不思議なものはないと思うんだよ。あれほどお医者が手重くいったものが、今までしゃんしゃんしているんだからね。お母さんも始めのうちは心配して、なるべく動かさないようにと思ってたんだがね。それ、あの気性だろう。養生はしなざるけれども、強情でねえ。自分が好いと思ひ込んだら、な

かなか私わたしのいう事なんか、聞きそうにもなさらないんだからね」

私はこの前帰った時、無理に床とこを上げさして、髭ひげを剃そった父の様子と態度とを思い出した。「もう大丈夫、お母さんがあんまり仰山ぎやうせん過ぎるからいけないんだ」といったその時の言葉を考えてみると、満更母まんせぼばかり責める気にもなれなかった。「しかし傍はたでも少しは注意しなくっちゃ」といおうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかった。ただ父の病やまいの性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。しかしその大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかった。母は別に感動した様子も見せなかった。ただ「へえ、やっぱり同じ病おんな気でね。お気

の毒だね。いくつでお亡くなりかえ、その方は」かたなどと聞いた。

私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かった。父は私の注意を母よりは真面目まじめに聞いてくれた。「もつともだ。お前のいう通りだ。けれども、己おれの身体からだは必竟ひっきょう己おれの身体からだで、その己の身体についての養生法は、多年の経験上、己が一番能く心得ているはずだからね」といった。それを聞いた母は苦笑した。「それご覧な」といった。

「でも、あれでお父さんは自分でちゃんと覚悟だけはしているんですよ。今度私が卒業して帰ったのを大変喜んでいるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業はできまいと思ったの

が、達者なうちに免状を持って来たから、それが嬉しいんだって、お父さんは自分でそういつていましたぜ」

「そりゃ、お前、口でこそそうおいだけどもね。お腹のなかではまだ大丈夫だと思ってお出のだよ」

「そうでしょうか」

「まだまだ十年も二十年も生きる気でお出のだよ。もっとも時々はわたしにも心細いような事をおいだがね。おれもこの分じゃもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はどうする、一人でこの家うちにいる気かなんて」

私は急に父がいなくなつて母一人が取り残された時の、古い広

い田舎家を想像して見た。この家から父一人を引き去った後は、そのまま立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母は何と  
いうだろうか。そう考える私はまたこの土を離れて、東京で気  
楽に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の  
注意——父の丈夫でいるうちに、分けて貰うものは、分けて貰っ  
て置けという注意を、偶然思い出した。

「なにね、自分で死ぬ死ぬっていう人に死んだ試しはないんだか  
ら安心だよ。お父さんなんぞも、死ぬ死ぬっていういいながら、これ  
から先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙ってる丈  
夫の人の方が剣呑さ」

私は理屈から出たとも統計から来たとも知れない、この陳腐ちんぷな  
ような母の言葉を默然もくねんと聞いていた。

三

私わたくしのために赤い飯めしを炊たいて客をするといふ相談が父と母の間に  
起った。私は帰った当日から、あるいはこんな事になるだろうと  
思つて、心のうちで暗あんにそれを恐れていた。私はすぐ断わつた。

「あんまり仰山ぎやうざんな事は止よしてください」

私は田舎いなかの客が嫌いだった。飲んだり食ったりするのを、最後

の目的としてやって来る彼らは、何か事があれば好いといった風  
の人ばかり揃そろっていた。私は子供の時から彼らの席に待じするのを  
心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、  
私の苦痛はいつそう甚はなはだしいように想像された。しかし私は父や母  
の手前、あんな野鄙やひな人を集めて騒ぐのは止せともいいかねた。  
それで私はただあまり仰山だからとばかり主張した。

「仰山仰山とおいだが、些ちっとも仰山じゃないよ。生涯に二度と  
ある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そ  
う遠慮をお為しでない」

母は私が大学を卒業したのを、ちようど嫁でも貰もらったと同じ程

度に、重く見ているらしかった。

「呼ばなくつても好いが、呼ばないとまた何とかいうから」

これは父の言葉であつた。父は彼らの陰口を気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分たちの予期通りにならないと、すぐ何とかいいたがる人々であつた。

「東京と違って田舎は蒼蠅うるせいからね」

父はこうもいった。

「お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えた。

私は我がを張る訳にも行かなかつた。どうでも二人の都合の好いいようにしたらと思ひ出した。

「つまり私のためなら、止よして下さいというだけなんです。陰で何かいわれるのが厭いやだからというご主意しゅいなら、そりやまた別です。あなたがたに不利益な事を私が強いて主張したって仕方がありません」

「そう理屈をいわれると困る」

父は苦い顔をした。

「何もお前のためにするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だって世間への義理ぐらいは知っているだろう」

母はこうなると女だけにしどろもどろな事をいった。その代り

口数からいうと、父と私を二人寄せてもなかなか敵うどころではなかった。

「学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなっていけない」

父はただこれだけしかいわなかった。しかし私はこの簡単な一句のうちに、父が平生から私に対してもっている不平の全体を見た。私はその時自分の言葉使いの角張ったところに気が付かずに、父の不平の方ばかりを無理のように思った。

父はその夜また気を更えて、客を呼ぶなら何日にするかと私の都合を聞いた。都合の好いも悪いもなしにただぶらぶら古い家の中に寝起きしている私に、こんな問いを掛けるのは、父の方が折

れて出たのと同じ事であった。私はこの穏やかな父の前に拘泥こだわらない頭を下げた。私は父と相談の上招待しょうたいの日取りを極きめた。

その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇めいじてんのうのご病気の報知であった。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡ったこの事件は、一軒の田舎家いなかやのうちに多少の曲折を経てようやく纏まとまろうとした私の卒業祝いを、塵ちりのごとくに吹き払った。

「まあ、ご遠慮申した方がよからう」

眼鏡めがねを掛けて新聞を見ていた父はこういった。父は黙って自分の病気の事も考えているらしかった。私はついこの間の卒業式に例年の通り大学へ行幸きやうけいになった陛下てんかを憶おもい出したりした。

## 四

小勢こせいな人数にんずには広過ぎる古い家がひっそりしている中に、私はわたくし行李こうりを解いて書物を繙ひもとき始めた。なぜか私は気が落ち付かなかつた。あの目眩めまぐるしい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁ページを一枚一枚にまくって行く方が、気に張りがあった。心持よく勉強ができた。

私はややともすると机にもたれて仮寝うたたねをした。時にはわざわざ枕まくらさえ出して本式に昼寝を貪むさぼる事もあった。眼が覚めると、蝉せみの声を聞いた。うつつから続いているようなその声は、急に八釜やかま

しく耳の底を搔き乱した。私は凝とそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いた。

私は筆を執って友達のだれかれに短い端書または長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残っていた。あるものは遠い故郷に帰っていた。返事の来るのも、音信の届かないのもあった。私は固より先生を忘れなかった。原稿紙へ細字で三枚ばかり国へ帰ってから以後の自分というようなものを題目にして書き綴ったのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生ははたしてまだ東京にいるだろうかと疑った。先生が奥さんといっしょに宅を空ける場合には、五十恰好の切下の女の人がどこから来て、

留守番をするのが例になっていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類と思い違えていた。先生は「私には親類はありませんよ」と答えた。先生の郷里にいる続きあいの人々と、先生は一向音信の取り遣りをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚であつた。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽に後ろで結んでいゝるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行つたあとへこの郵便が届いたら、あの切下のお婆さんは、それをすぐ転地先へ送つてくれるだけの気転と親切があるだろうか

どと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれというほどの必要の事も書いてないのを、私は能く承知していた。ただ私は淋しかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかった。

父はこの前の冬に帰って来た時ほど将棋を差したがらなくなつた。将棋盤はほこりの溜ったまま、床の間の隅に片寄せられてあつた。ことに陛下のご病氣以後父は凝と考え込んでいるように見えた。毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ。それからその読がらをわざわざ私のいる所へ持って来てくれた。

「おいご覧、今日も天子さまの事が詳しく出ている」

父は陛下のことを、つねに天子さまといていた。

「勿体ない話だが、天子さまのご病気も、お父さんのとまあ似たものだろうな」

こういう父の顔には深い掛念けねんの曇りくもがかかっていた。こういうられる私の胸にはまた父がいつ斃たおれるか分らないという心配がひらめいた。

「しかし大丈夫だろう。おれのような下くだらないものでも、まだこうしていられるくらいだから」

父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己おのれに落ち

かかって来そうな危険を予感しているらしかった。

「お父さんは本当に病気を怖こわがってるんですよ。お母さんのおっしゃるように、十年も二十年も生きる気じゃなさそうですね」

母は私の言葉を聞いて当惑そうな顔をした。

「ちよつとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」

私は床の間から将棋盤を取りおろして、ほこりを拭ふいた。

## 五

父の元気は次第に衰えて行った。私わたくしを驚かせたハンケチ付きの

古い麦藁帽子むぎわらぼうしが自然と閑却かんきやくされるようになった。私は黒い煤すすけた棚の上に載のっているその帽子を眺ながめるたびに、父に対して気の毒な思いをした。父が以前のように、軽々と動く間は、もう少し慎つつしんでくれたらと心配した。父が凝じっと坐すわり込むようになると、やはり元の方が達者だったのだという気が起った。私は父の健康についてよく母と話し合った。

「まったく気のせいだよ」と母がいった。母の頭は陛下やまいの病と父の病とを結び付けて考えていた。私にはそうばかりとも思えなかった。

「気じゃない。本当に身体からだが悪かないんでしょうか。どうも気分

より健康の方が悪くなつて行くらしい」

私はこういって、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。

「今年の夏はお前も詰つまらなからう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事ができず、お父さんの身体からだもあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いっその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かつたんだよ」

私が帰つたのは七月の五、六日で、父や母が私の卒業を祝うために客を呼ぼうといいだしたのは、それから一週間後ごであつた。そうしていよいよと極きめた日はそれからまた一週間の余も先に

なっていた。時間に束縛を許さない悠長な田舎いなかに帰った私は、お蔭かげで好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であったが、私を理解しない母は少しもそこに気が付いていないらしかった。

崩御ほうぎょの報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「ああ、ああ」といった。

「ああ、ああ、天子様もとうとうおかくれになる。己おれも……」  
父はその後あとをいわなかった。

私は黒いうすものを買うために町へ出た。それで旗竿はたざおの球たまを包んで、それで旗竿の先へ三寸幅すんはばのひらひらを付けて、門の扉の横

から斜めに往来へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった。私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあった。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹さえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣が違っていますかね」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもあった。また先生に見せるの

が恥ずかしくもあつた。

私はまた一人家のなかへはいった。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなつた都会の、不安でざわざわしているなかに、一点の燈火のごとくに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦つすの中に、自然と捲まき込まれている事に気が付かなかつた。しばらくすれば、その灯ひもまたふっと消えてしまふべき運命を、眼めの前に控えているのだとは固もより気が付かなかつた。

私は今度の事件について先生に手紙を書こうかと思つて、筆を執りかけた。私はそれを十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸々に引き裂いて屑籠へ投げ込んだ。（先生に宛ててそういう事を書いて仕方がないとも思つたし、前例に徴してみると、とても返事をくれそうになかったから）。私は淋しかった。それで手紙を書くのであつた。そうして返事が来れば好いと思うのであつた。

八月の半ばなかごろになつて、私わたくしはある朋友ほうゆうから手紙を受け取つた。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあつた。この朋友は經濟の必要上、自分でそんな位地を探し廻まわる男であつた。この口も始めは自分の所へかかつて来たのだが、もっと好いい地方へ相談ができたので、余つた方を私に譲る気で、わざわざ知らせて来てくれたのであつた。私はすぐ返事を出して断つた。知り合いの中には、ずいぶん骨を折つて、教師の職にありつきたがつているものがあるから、その方へ廻まわしてやったら好よかろうと書いた。

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の

断った事に異存はないようであった。

「そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだろう」

こういつてくれる裏に、私は二人が私に対してもっている過大な希望を読んだ。迂闊な父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。

「相当の口って、近頃じゃそんな旨い口はなかなかあるものじゃありません。ことに兄さんと私とは専門も違うし、時代も違うんだから、二人を同じように考えられちゃ少し困ります」

「しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行ってくれなくっちゃこっちも困る。人からあなたじなんの所のご二男は、大学を

卒業なすって何をしてお出いでですかと聞かれた時に返事ができないようじゃ、おれも肩身が狭いから」

父は渋面しゆめんをつくった。父の考えは、古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかった。その郷里の誰彼だれかれから、大学を卒業すればいくらぐらい月給が取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円ぐらいなものだろうかといわれたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付けたかったのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇体きたいな人間に異ならなかった。私の方でも、実際そういう人間のような気持を折々起した。私は

あからさまに自分の考えを打ち明けるとは、あまりに距離の懸隔けんかくの甚はなはだしい父と母の前に默然もくねんとしていた。

「お前のよく先生先生という方にでもお願いしたら好いいじゃないか。こんな時こそ」

母はこうより外ほかに先生を解釈する事ができなかつた。その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であつた。卒業したから、地位の周旋をしてやろうという人ではなかつた。

「その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。

「何にもしていないんです」と私が答えた。

私はとくの昔から先生の何もししていないという事を父にも母にも告げつつもりでした。そうして父はたしかにそれを記憶しているはずであった。

「何もしていないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやっつけていそうなものだがね」

父はこういって、私を諷ふうした。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必ひつ竟きやうやくざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。

「おれのような人間だって、月給こそ貰もらっちゃいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」

父はこうもいった。私はそれでもまだ黙っていた。

「お前のいうような偉い方なら、きつと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。

「いいえ」と私は答えた。

「じゃ仕方がないじゃないか。なぜ頼まないんだい。手紙でも好いからお出しな」

「ええ」

私は生返事なまへんじをして席を立った。

父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者<sup>いしや</sup>の来るたびに蒼蠅<sup>そうらさ</sup>い質問<sup>しつもん</sup>を掛けて相手<sup>あいて</sup>を困らす質<sup>たち</sup>でもなかった。医者<sup>いしや</sup>の方<sup>かた</sup>でもまた遠慮<sup>えんりょ</sup>して何ともいわなかった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも自分がいなくなつた後<sup>あと</sup>のわが家<sup>いえ</sup>を想像<sup>さうざう</sup>して見るらしかった。

「小供<sup>こども</sup>に学問<sup>がくもん</sup>をさせるのも、好<sup>よ</sup>し悪<sup>あ</sup>しだね。せつかく修業<sup>しゆぎやう</sup>をさせると、その小供<sup>こども</sup>は決して宅<sup>うち</sup>へ帰<sup>かえ</sup>つて来<sup>こ</sup>ない。これじゃ手<sup>て</sup>もなく親<sup>おや</sup>子を隔離<sup>かくり</sup>するために学問<sup>がくもん</sup>させるようなものだ」

学問<sup>がくもん</sup>をした結果<sup>けいこ</sup>兄<sup>あに</sup>は今遠国<sup>えんごく</sup>にいた。教育<sup>きういく</sup>を受けた因果<sup>いんぐわ</sup>で、私<sup>わたし</sup>はまた東京<sup>とうきやう</sup>に住<sup>す</sup>む覚悟<sup>かくご</sup>を固<sup>かた</sup>くした。こういう子<sup>こ</sup>を育<sup>そだ</sup>てた父<sup>ちち</sup>の愚痴<sup>ぐち</sup>は

もとより不合理ではなかった。永年住み古した田舎家の中に、  
たった一人取り残されそうな母を描き出す父の想像はもとより淋  
しいに違いなかった。

わが家は動かす事のできないものと父は信じ切っていた。その  
中に住む母もまた命のある間は、動かす事のできないものと信じ  
ていた。自分が死んだ後、この孤独な母を、たった一人伽藍堂の  
わが家に取り残すのもまた甚だしい不安であった。それなのに、  
東京で好い地位を求めるといって、私を強いたがる父の頭には矛  
盾があった。私はその矛盾をおかしく思ったと同時に、そのお蔭  
でまた東京へ出られるのを喜んだ。

私は父や母の手前、この地位をできるだけの努力で求めつつあるごとくに装おわなくてはならなかった。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述べた。もし自分の力でできる事があつたら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合うまいと思いつつながらこの手紙を書いた。また取り合うつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事もできまいと思いつつながらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思つて書いた。

私はそれを封じて出す前に母に向かつていった。

「先生に手紙を書きましたよ。あなたのおっしゃった通り。」

ちよつと読んでご覧なさい」

母は私の想像したごとくそれを読まなかった。

「そうかい、それじゃ早くお出し。そんな事は他ひとが気を付けないでも、自分で早くやるものだよ」

母は私をまだ子供のように思っていた。私も実際子供のような感じがした。

「しかし手紙じゃ用は足りませんよ。どうせ、九月にでもなつて、私が東京へ出てからでなくっちゃ」

「そりゃそうかも知れないけれども、またひよつとして、どんな好いい口がないとも限らないんだから、早く頼んでおくに越した事

はないよ」

「ええ。とにかく返事は来るに極きまってますから、そうしたらまたお話ししましょう」

私はこんな事に掛けて几帳面きちょうめんな先生を信じていた。私は先生の返事の来るのを心待ちに待った。けれども私の予期はついはずに外れた。先生からは一週間経たっても何の音信たよりもなかった。

「大方おおかたどこかへ避暑にでも行っているんでしよう」

私は母に向かって言訳いいわけらしい言葉を使わなければならなかった。そうしてその言葉は母に対する言訳ばかりでなく、自分の心に対する言訳でもあった。私は強しいても何かの事情を仮定して先

生の態度を弁護しなければ不安になった。

私は時々父の病気を忘れた。いつそ早く東京へ出てしまおうかと思ったりした。その父自身もおのれの病気を忘れる事があった。未来を心配しながら、未来に対する所置は一向取らなかつた。私はついに先生の忠告通り財産分配の事を父にいい出す機会を得ずに過ぎた。

## 八

九月始めになって、私はわたくしいよいよまた東京へ出ようとした。私

は父に向かって当分今まで通り学資を送ってくれるようにと頼んだ。

「ここにこうしていたって、あなたのおっしゃる通りの地位が得られるものじゃないですから」

私は父の希望する地位を得るために東京へ行くような事をいった。

「無論口の見付かるまでで好いですから」ともいった。

私は心のうちで、その口は到底私の頭の上に落ちて来ないと思っていた。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。

「そりや僅わずかの間あいだの事だろ。うから、どうにか都合してやろう。その代り永くはいけないよ。相当の地位を得え次第独立しなくっちゃ。元来学校を出た以上、出たあくる日から他ひとの世話になんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得ていて、金を取る方は全く考えていないようだね」

父はこの外ほかにもまだ色々な小言こごとをいった。その中には、「昔の親は子に食わせてもらったのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があった。それらを私はただ黙って聞いていた。

小言が一通り済んだと思った時、私は静かに席を立とうとした。父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好よかった。

「お母さんに日を見てもらいなさい」

「そうしましょう」

その時の私は父の前に存外ぞんがいおとなしかった。私はなるべく父の機嫌きげんに逆らわずに、田舎いなかを出ようとした。父はまた私を引き留ひくとめた。

「お前おれが東京へ行くと宅うちはまた淋さみしくなる。何しろ己おれとお母さんだけなんだからね。そのおれも身体からださえ達者なら好いいが、この様子じゃいつ急にどんな事がないともいえないよ」

私はできるだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐すわって、心細そうな父の態度と

言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私はその時また蝉の声を聞いた。その声はこの間中間いたのと違って、つくつく法師の声であつた。私は夏郷里に帰って、煮え付くような蝉の声の中に凝と坐っていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあつた。私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めていた。

私の哀愁はこの夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蝉の声がつくつく法師の声に変わるごとくに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いているように思われた。

私は淋<sup>さび</sup>しそうな父の態度と言葉を繰り返しながら、手紙を出しても返事を寄こさない先生の事をまた憶<sup>おも</sup>い浮べた。先生と父とは、まるで反対の印象を私に与える点において、比較の上にも、連想の上にも、いっしょに私の頭に上<sup>のほ</sup>りやすかった。

私はほとんど父のすべても知り尽<sup>つく</sup>していた。もし父を離れるとすれば、情合<sup>しじやうあひ</sup>の上に親子の心残りがあるだけであった。先生の多くはまだ私に解<sup>わか</sup>っていないかった。話すと約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとって薄暗かった。私はぜひともそこを通り越して、明るい所まで行かなければ気が済まなかつた。先生と関係の絶えるのは私にとって大い

な苦痛であつた。私は母に日を見てもらつて、東京へ立つ日取りを極めた。

## 九

私わたくしがいよいよ立とうという間際になつて、（たしか二日前の夕方ひの事であつたと思うが、）父はまた突然引ひつ繰くり返かえつた。私はその時書物や衣類を詰めた行李こうりをからげていた。父は風呂ふろへ入つたところであつた。父の背中を流しに行つた母が大きな声を出して私を呼んだ。私は裸はだか体のまま母に後ろから抱かれています父を見

た。それでも座敷へ伴つれて戻った時、父はもう大丈夫だといった。念のために枕元まくらもとに坐すわって、濡手拭ぬれてぬぐいで父の頭を冷ひやしていた私は、九時頃ごころになつてようやく形かたばかりの夜食を済すました。

翌日よくじつになると父は思ったより元気が好よかった。留とめるのも聞かずに歩いて便所へ行つたりした。

「もう大丈夫」

父は去年の暮倒れた時に私に向かつていったと同じ言葉をまた繰り返した。その時ははたして口でいった通りまあ大丈夫であった。私は今度もあるいはそうなるかも知れないと思った。しかし医者はただ用心が肝要だと注意するだけで、念を押しても判然はつきりし

た事を話してくれなかった。私は不安のために、出立しゅったつの日が来てもついに東京へ立つ気が起らなかつた。

「もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。

「そうしておくれ」と母が頼んだ。

母は父が庭へ出たり背戸せどへ下りたりする元気を見ている間だけは平気でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉もんだりした。

「お前は今日東京へ行くはずじゃなかったか」と父が聞いた。

「ええ、少し延ばしました」と私が答えた。

「おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちよつと躊躇ちゆうちゆうした。そうだといえ、父の病気の重いのを裏書きするようなものであった。私は父の神経を過敏にしたくなかった。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかった。

「気の毒だね」といって、庭の方を向いた。

私は自分の部屋にはいって、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出しても差支さしつかえないように、堅く括くられたままであった。私はぼんやりその前に立って、また縄を解こうかと考えた。

私は坐ったまま腰を浮かした時の落ち付かない気分で、また

三、四日を過ごした。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安臥<sup>が</sup>を命じた。

「どうしたものだろかね」と母が父に聞こえないような小さな声で私にいった。母の顔はいかにも心細そうであった。私は兄と妹に電報を打つ用意をした。けれども寝ている父にはほとんど何の苦悶<sup>くもん</sup>もなかった。話をするところなどを見ると、風邪<sup>かぜ</sup>でも引いた時と全く同じ事であった。その上食欲は不断よりも進んだ。傍<sup>はた</sup>のものが、注意しても容易にいう事を聞かなかった。

「どうせ死ぬんだから、旨<sup>うまい</sup>いものでも食って死ななくっちゃ」  
私には旨いものという父の言葉が滑稽<sup>こっけい</sup>にも悲酸<sup>ひさん</sup>にも聞こえた。

父は旨いものを口に入れられる都には住んでいなかっただのである。夜に入<sup>い</sup>ってかき餅<sup>もち</sup>などを焼いてもらってぼりぼり噛<sup>か</sup>んだ。

「どうしてこう渴<sup>かわ</sup>くのかね。やっぱり心<sup>しん</sup>に丈夫の所があるのかも知れないよ」

母は失望していいところにかえって頼<sup>たの</sup>みを置いた。そのくせ病気の時にしか使<sup>つか</sup>わない渴<sup>かわ</sup>くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用<sup>もち</sup>いていた。

伯父<sup>おじ</sup>が見舞<sup>まゐ</sup>に来たとき、父はいつまでも引き留<sup>とど</sup>めて帰<sup>かえ</sup>さなかつた。淋<sup>さむ</sup>しいからもつといてくれというのが重<sup>おも</sup>な理由であつたが、母や私が、食べたいだけ物を食べさせないという不平を訴<sup>こ</sup>えるの

も、その目的の一つであつたらしい。

十

父の病気は同じような状態で一週間以上つづいた。私はその間に長い手紙を九州にいる兄宛あてで出した。妹へは母から出させた。私は腹の中で、おそらくこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信たよりだろうと思つた。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書き込めた。

兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であつた。だから父の危険が

眼の前に逼せまらないうちに呼び寄せる自由は利きかなかった。といつて、折角都合して来たには来たが、間まに合わなかったといわれるのも辛つらかった。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。

「そう判然はつきりした事になると私にも分りません。しかし危険はいつ来るか分らないという事だけは承知していて下さい」

停車場ステーションのある町から迎えた医者には私にこういった。私は母と相談して、その医者の周旋で、町の病院から看護婦を一人頼む事にした。父は枕元まくらもとへ来て挨拶あいさつする白い服を着た女を見て変な顔をした。

父は死病に罹<sup>かか</sup>っている事をとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気が付かなかった。

「今に癒<sup>なお</sup>ったらもう一返<sup>いっぺん</sup>東京へ遊びに行ってみよう。人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事は、生きてるうちにやっておくに限る」

母は仕方なしに「その時は私もいっしょに伴<sup>つ</sup>れて行って頂きましよう」などと調子を合せていた。

時とするとまた非常に淋<sup>さみ</sup>しかった。

「おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやってくれ」

私はこの「おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもって

いた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かつて何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であった。私は笑いを帯びた先生の顔と、縁喜でもないと耳を塞いだ奥さんの様子とを憶い出した。あの時の「おれが死んだら」は単純な仮定であった。今私が聞くのはいつ起るか分らない事実であった。私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事ができなかつた。しかし口の先では何とか父を紛らさなければならなかつた。

「そんな弱い事をおっしゃっちゃいけませんよ。今に癒つたら東京へ遊びにいらっしやるはずじゃありませんか。お母さんといっしよに。今度いらっしやるときつと吃驚しますよ、変っているん

で。電車の新しい線路だけでも大変増ふえていますからね。電車が通るようになれば自然町並まちなみも変わるし、その上に市区改正もあるし、東京が凝じっとしている時は、まあ二六時中にろくじちゆう一分もないといつていいくらいです」

私は仕方がないからいいわないでいい事まで喋しゃべ舌べった。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。

病人があるので自然家いえの出入りも多くなった。近所にいる親類などは、二日に一人ぐらいの割で代る代る見舞に来た。中には比較的遠くにいて平生疎遠くさむつなものもあった。「どうかと思ったら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘡やせ

ていないじゃないか」などといって帰るものがあつた。私の歸つた当時はひっそりし過ぎるほど静かであつた家庭が、こんな事段々ざわざわし始めた。

その中に動かずにいる父の病気は、ただ面白くない方へ移つて行くばかりであつた。私は母や伯父おじと相談して、とうとう兄と妹いもに電報を打つた。兄からはすぐ行くという返事が来た。妹の夫からも立つという報知しらせがあつた。妹はこの前懐妊かいにんした時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねていい越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかつた。

こうした落ち付きのない間にも、私はまだ静かに坐る余裕をもっていた。偶には書物を開けて十頁もつづけざまに読む時間さえ出て来た。一旦堅く括られた私の行李は、いつの間にか解かれてしまった。私は要るに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極めた、この夏中の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三が一にも足らなかった。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思った通り仕事の運ばない例も少なかつた。これが人の世

の常だろろうと思いながらも私は厭いやな気持ちに抑おさえ付けられた。

私はこの不快うちの裏うちに坐りながら、一方に父の病気を考えた。父の死んだ後あとの事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思い浮べた。私はこの不快な心持の両端に地位、教育、性格の全然異なつた二人の面影なまがを眺めた。

私が父の枕元まくらもとを離れて、独り取り乱した書物の中に腕組みをしていてところへ母が顔を出した。

「少し午眠ひるねでもおしよ。お前もさぞ草臥くたびれるだろろう」

母は私の気分を了解していなかつた。私も母からそれを予期するほどの子供でもなかつた。私は単簡たんかんに礼を述べた。母はまだ室へや

の入口に立っていた。

「お父さんは？」と私が聞いた。

「今よく寝てお出だよ」と母が答えた。

母は突然はいつて来て私の傍そばに坐すわった。

「先生からまだ何ともいつて来ないかい」と聞いた。

母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきつと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかった。私は心得があつて母を欺あやむいたと同じ結果に陥った。

「もう一遍いっぺん手紙を出してご覧な」と母がいった。

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰安になるなら、手数を厭いとうような私ではなかった。けれどもこういう用件で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱しかられたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遥はるかに恐れていた。あの依頼に対して今まで返事の貰もらえないのも、あるいはそうした訳からじゃないかしらという邪推もあつた。

「手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒らちは明きませんよ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼んで廻まわらなくっちゃ」

「だってお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるか

分らないじゃないか」

「だから出やしません。癒なおるとも癒らないとも片付かないうちは、ちゃんとこうしているつもりです」

「そりゃ解わかり切った話だね。今にもむずかしいという大病人を放ちらかしておいて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐あわれんだ。しかし母がなぜこんな問題をこのざわざわした際に持ち出したのか理解できなかった。私が父の病気をよそに、静かに坐ったり書見したりする余裕のあるごとくに、母も眼の前の病人を忘れて、外ほかの事を考えるだけ、胸に空地すきまがあるのかしらと疑うたぐった。その時「実はね」

と母がいい出した。

「実はお父さんの生きてお出いでのうちに、お前の口が極きまったらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥たしかなら気も慥かなんだから、ああしてお出のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」

憐れな私は親孝行のできない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかつた。

兄が帰って来た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平生へいせいから何を措おいても新聞だけには眼を通す習慣であったが、床とこについてからは、退屈のため猶更なおさらそれを読みたがった。母も私わたくしも強いしては反対せずに、なるべく病人の思い通りにさせておいた。

「そういう元気なら結構なものだ。よっぽど悪いかと思っ  
て来たら、大変好いいようじゃありませんか」

兄はこんな事をいいながら父と話をした。その賑にぎやか過ぎる調子が私にはかえって不調和に聞こえた。それでも父の前はつを外はずして私と差し向いになった時は、むしろ沈んでいた。

「新聞なんか読ましちやいけなかないか」

「私もわたしそう思うんだけれども、読まないと承知しないんだから、仕様がない」

兄は私の弁解を黙って聞いていた。やがて、「よく解わかるのかな」といった。兄は父の理解力が病気のために、平生よりはよっぽど鈍にぶっているように観察したらしい。

「そりゃ慥たしかです。私はわたしさつき二十分ばかり枕元まくらもとに坐すわって色々話してみたが、調子の狂ったところは少しもないです。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」

兄と前後して着いた妹いもうとの夫の意見は、我々よりもよほど楽観的であった。父は彼に向かって妹の事をあれこれと尋ねていた。

「身体からだが身体だからむやみに汽車になんぞ乗って揺ゆれない方が好い。無理をして見舞に来られたりすると、かえってこっちが心配だから」といっていた。「なに今に治なったら赤ん坊の顔でも見  
に、久しぶりにこっちから出掛けるから差支さしつかえない」ともいっ  
いた。

乃木大将のぎだいししょうの死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知った。

「大変だ大変だ」といった。

何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。

「あの時はいよいよ頭が変になったのかと思つて、ひやりとし  
た」と後で兄が私にいった。「私わたしも実は驚きました」と妹の夫も

同感らしい言葉つきであった。

その頃の新聞は実際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりであった。私は父の枕元に坐つて鄭寧ていねいにそれを読んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室へやへ持つて来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女かんじよみたような服装なかりをしたその夫人の姿を忘れる事ができなかつた。

悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹きや草を震わせている最中さいちゆうに、突然私は一通の電報を先生から受け取った。洋服を着た人を見ると犬が吠ほえるような所では、一通の電報すら大

事件であった。それを受け取った母は、はたして驚いたような様子をして、わざわざ私を人のいない所へ呼び出した。

「何だい」といって、私の封を開くのを傍そばに立って待っていた。

電報にはちよつと会いたいたいが来られるかという意味が簡単に書いてあった。私は首を傾けた。

「きつとお頼たのもうしておいた口の事だよ」と母が推断してくれた。

私もあるいはそうかも知れないと思った。しかしそれにしては少し変だとも考えた。とにかく兄あにや妹いもうとの夫まで呼び寄せた私が、父の病気を打遣うちやって、東京へ行く訳には行かなかった。私は母と

相談して、行かれないという返電を打つ事にした。できるだけ簡略な言葉で父の病気の危篤きとくに陥りつつある旨むねも付け加えたが、それでも気が済まなかったから、委細いさい手紙として、細かい事情をその日のうちに認したためて郵便で出した。頼んだ位地の事とばかり信じ切った母は、「本当に間まの悪い時は仕方のないものだね」といつて残念そうな顔をした。

### 十三

私わたくしの書いた手紙はかなり長いものであった。母も私も今度こそ

先生から何とかいって来るだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛あてで届いた。それには来ないでもよろしいという文句だけしかなかった。私はそれを母に見せた。

「大方手紙おおかたで何とかいってきて下さるつもりだろうよ」

母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋してくれるものとはかり解釈しているらしかった。私もあるいはそうかとも考えたが、先生の平生から推おしてみると、どうも変に思われた。

「先生が口を探してくれる」。これはあり得うべからざる事のように私には見えた。

「とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだから、この

電報はその前に出したものに違いないですね」

私は母に向かつてこんな分り切った事をいった。母はまたもつともらしく思案しながら「そうだね」と答えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打ったという事が、先生を解釈する上において、何の役にも立たないのは知れているのに。

その日はちょうど主治医が町から院長を連れて来るはずになっていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかった。二人の医者は立ち合いの上、病人に浣腸かんちようなどをして帰って行った。

父は医者から安臥あんがを命ぜられて以来、両便とも寝たまま他の手ひと

で始末してもらっていた。潔癖な父は、最初の間こそ甚だしくそれを忌み嫌ったが、身体が利かないので、やむを得ずいやいや床の上で用を足した。それが病気の加減で頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経るに従って、無精な排泄を意としないようになった。たまには蒲団や敷布を汚して、傍のものが眉を寄せるのに、当人はかえって平気でいたりした。もつとも尿の量は病気の性質として、極めて少なくなった。医者はそれを苦にした。食欲も次第に衰えた。たまに何か欲しがっても、舌が欲しがるだけで、咽喉から下へはごく僅しか通らなかつた。好きな新聞も手に取る気力がなくなつた。枕の傍にある老眼鏡は、いつまでも黒い

鞘さやに納められたままであった。子供の時分から仲の好さかった作さくさんという今では一里りばかり隔へたった所に住んでいる人が見舞まに来た時、父は「ああ作さんか」といって、どんよりした眼まなこを作さんの方かたに向けた。

「作さんよく来てくれた。作さんは丈夫ぢゆうぶで羨あやむましいね。己おれはもう駄目だめだ」

「そんな事はないよ。お前まへなんか子供は二人とも大学を卒業そつぎょうするし、少しぐらい病びょう気きになっただって、申し分しんぶんはないんだ。おれをおれご覧よ。かかあには死しなれるしさ、子供はなしさ。ただこうして生きているだけの事ことだよ。達者たつしやだらって何なにの楽らくしみももないじやない

か」

浣腸かんちやうをしたのは作さんが来てから二、三日あとの事であつた。

父は医者のお蔭かげで大変楽になつたといつて喜んだ。少し自分の寿命に對する度胸ができたといふ風ふうに機嫌が直つた。傍そばにいる母は、それに釣り込まれたのか、病人に氣力を付けるためか、先生から電報のきた事を、あたかも私の位置が父の希望する通り東京にあつたように話した。傍そばにいる私はむずがゆい心持がしたが、母の言葉を遮さへきる訳にもゆかないので、黙つて聞いていた。病人は嬉うれしそうな顔をした。

「そりや結構です」と妹いもうとの夫もいった。

「何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。

私は今更それを否定する勇気を失った。自分にも何とも訳の分らない曖昧あいまいな返事をして、わざと席を立った。

## 十四

父の病気は最後の一撃を待つ間際まぎわまで進んで来て、そこでしばらく躊躇ちゅうちよするようにみえた。家のものは運命の宣告が、今日下くだるか、今日下るかと思つて、毎夜床とこにはいった。

父は傍はたのものを辛つらくするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。

た。その点になると看病はむしろ楽であった。要心のために、誰か一人ぐらいつつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自めいめいの寢床へ引き取って差支さしつかえなかった。何かの拍子で眠れなかった時、病人の唸うなるような声を微かすかに聞いたと思ひ誤つた私は、一遍ぺんよなか半夜に床を抜け出して、念のため父の枕元まくらもとまで行つてみた事があつた。その夜は母が起きている番に當つていた。しかしその母は父の横に肱ひじを曲げて枕としたなり寢入つていた。父も深い眠りの裏うちにそつと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寢床へ歸つた。

私は兄といっしよの蚊帳かやの中に寢た。妹いもうとの夫だけは、客扱いを

受けているせいかな、独り離れた座敷に入いって休んだ。

「関せきさんも気の毒だね。ああ幾日も引ひつ張はられて帰れなくっちゃあ」

関というのはその人の苗字みょうじであつた。

「しかしそんな忙しい身体からだでもないんだから、ああして泊とっていてくれるんでしょう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、こう長くなっちゃ」

「困こつても仕方がない。外ほかの事と違ちがうからな」

兄と床とこを並べて寝る私は、こんな寝物語をした。兄の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあつた。どうせ助

からないものならばという考えもあった。我々は子として親の死ぬのを待っているようなものであった。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表わすのを憚はばかった。そうしてお互いにお互いがどんな事を思っているかをよく理解し合っていた。

「お父さんは、まだ治る気でいるようだな」と兄が私にいった。

実際兄のいう通りに見えるところもないではなかった。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うと行って承知しなかった。会えばきつと、私の卒業祝いに呼ぶ事ができなかつたのを残念がった。その代り自分の病気が治ったらというような事も時々付け加えた。

「お前の卒業祝いは已<sup>や</sup>めになって結構だ。おれの時には弱<sup>よ</sup>ったからね」と兄は私の記憶を突<sup>つ</sup>ついた。私はアルコールに煽<sup>あお</sup>られたその時の乱雑な有様を想<sup>おも</sup>い出して苦笑した。飲むものや食<sup>く</sup>うものを強<sup>し</sup>いて廻<sup>まわ</sup>る父の態度も、にがにがしく私の眼に映<sup>うつ</sup>った。

私たちはそれほど仲の好<sup>い</sup>い兄弟ではなかった。小<sup>ち</sup>さいうちは好<sup>よ</sup>く喧<sup>けん</sup>嘩<sup>か</sup>をして、年の少ない私の方がいつでも泣<sup>な</sup>かされた。学校へはいつてからの専門の相違も、全く性格の相違から出<sup>で</sup>ていた。大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠<sup>とほ</sup>くから兄を眺<sup>なが</sup>めて、常に動物的だと思<sup>おも</sup>っていた。私は長く兄に会<sup>あ</sup>わなかったので、また懸<sup>か</sup>け隔<sup>へ</sup>たった遠<sup>とほ</sup>くにいたので、時<sup>とき</sup>からいつても距離<sup>きょり</sup>か

らいつても、兄はいつでも私には近くなかったのである。それでも久しぶりにこう落ち合ってみると、兄弟の優しい心持がどこから自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因になっていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕元で、兄と私は握手したのであった。

「お前これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違った質問を兄に掛けた。

「一家の財産はどうなってるんだらう」

「おれは知らない。お父さんはまだ何ともいわないから。しかし財産っていったところで金としては高の知れたものだらう」

母はまた母で先生の返事の来るのを苦にしていた。

「まだ手紙は来ないかい」と私を責めた。

## 十五

「先生先生というのは一体誰だれの事だい」と兄が聞いた。

「こないだ話したじゃないか」と私わたくしは答えた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他の説明ひとを忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。

「聞いた事は聞いたけれども」

兄は必竟ひっきやう聞いても解わからないというのであった。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解してもらおう必要はなかった。けれども腹は立った。また例の兄らしい所が出て来たと思った。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考えていた。少なくとも大学の教授ぐらいだろうと推察していた。名もない人、何もしていない人、それがどこに価値をもっているだろう。兄の腹はこの点において、父と全く同じものであった。けれども父が何もできないから遊んでい  
るのだと速断するのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるの  
に、ぶらぶらしているのは詰つまらん人間に限るといった風ふうの口吻こうふんを

洩<sup>も</sup>らした。

「イゴイストはいけないね。何もしないで生きていようというのは横着<sup>りよつけん</sup>な了簡<sup>りよつけん</sup>だからね。人は自分のもっている才能をできるだけ働かせなくっちゃ嘘<sup>うそ</sup>だ」

私は兄に向かって、自分の使っているイゴイストという言葉の意味がよく解<sup>わか</sup>るか<sup>わか</sup>と聞き返してやりたかった。

「それでもその人のお蔭<sup>かげ</sup>で地位<sup>ちゐ</sup>ができればまあ結構だ。お父<sup>とう</sup>さんも喜んでるようじゃないか」

兄は後からこんな事をいった。先生から明瞭<sup>めいりょう</sup>な手紙の来ない以上、私はそう信ずる事もできず、またそう口に出す勇氣もなかつ

た。それを母の早呑み込みでみんなにそう吹聴してしまつた今となつてみると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなつた。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の口の事が書いてあればいいがと念じた。私は死に瀕している父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他妹の夫だの伯父だの叔母だのの手前、私のちつとも頓着していかない事に、神経を悩まさなければならなかつた。

父が変な黄色いものも嘔いた時、私はかつて先生と奥さんから

聞かされた危険を思い出した。「ああして長く寝ているんだから胃も悪くなるはずだね」といった母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。

兄と私が茶の間で落ち合った時、兄は「聞いたか」といった。それは医者か帰り際に兄に向っていった事を聞いたかという意味であった。私には説明を待たないでもその意味がよく解っていた。

「お前ここへ帰って来て、宅うちの事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかった。

「お母さん一人じゃ、どうする事もできないだろう」と兄がまた

いった。兄は私を土の臭いにおを嗅かいで朽ちて行っても惜おしくないよ  
うに見ていた。

「本を読むだけなら、田舎いなかでも充分いできるし、それに働く必要も  
なくなるし、ちょうど好いいだろう」

「兄さんが帰って来るのが順ですね」と私がいった。

「おれにそんな事ができるものか」と兄は一口ひとくちに斥しりぞけた。兄の腹  
の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充みち満みちて  
いた。

「お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それ  
にしてもお母さんはどっちかで引き取らなくっちゃなるまい」

「お母さんがここを動くか動かないかがすでに大きな疑問ですよ」

兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後あとについて、こんな風に語り合った。

## 十六

父は時々囁語うわごとをいうようになった。

「乃木大将のぎたいししょうに済まない。実に面目次第めんぼくしだいがない。いえ私もすぐお後あとから」

こんな言葉をひよいひよい出した。母は気味を悪がった。なるべくみんなを枕元へ集めておきたがった。気のたしかな時は頻りに淋しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室の中を見廻して母の影が見えないと、父は必ず「お光は」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私はよく起って母を呼びに行った。「何かご用ですか」と、母が仕掛けた用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰めるだけで何もいわない事があった。そうかと思うと、まるで懸け離れた話をした。突然「お光お前にも色々世話になったね」などと優しい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前にきつと涙ぐんだ。そ

うした後ではまたきつと丈夫であった昔の父をその対照として想おもい出すらしかった。

「あんな憐あわれっぼい事をお言いだがね、あれでもとはずいぶん酷ひどかったんだよ」

母は父のために箒ほうきで背中をどやさされた時の事などを話した。今まで何遍なんべんもそれを聞かされた私と兄は、いつもとはまるで違った気分で、母の言葉を父の記念かたみのように耳へ受け入れた。

父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言ゆいごんらしいものを口に出さなかつた。

「今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見

た。

「そうだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のために好<sub>よ</sub>し悪<sub>あ</sub>しだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父<sub>おじ</sub>に相談をかけた。伯父も首を傾けた。

「いいたい事があるのに、いわないで死ぬのも残念だろうし、と  
いって、こっちから催促するのも悪いかも知れず」

話はとうとう愚<sub>ぐ</sub>図<sub>ず</sub>愚<sub>ぐ</sub>図<sub>ず</sub>になってしまった。そのうちに昏睡<sub>こんすい</sub>が来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思い違えてかえって喜んだ。「まああして楽に寝られれば、傍<sub>はた</sub>にいるものも助かります」といった。

父は時々眼を開けて、誰はだれどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先刻さっきまでそこに坐すわっていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とできて、その明るい所だけが、闇やみを縫う白い糸のように、ある距離を置いて連続するようにみえた。母が昏睡こんすい状態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかった。

そのうち舌が段々もつ纏れて来た。何かいい出しても尻しりが不明瞭ふめいりょうにおわるために、要領を得ないでしまう事が多くあった。そのくせ話し始める時は、危篤の病人とは思われないほど、強い声を出した。我々は固もとより不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せようになければならなかった。

「頭を冷やすと好い心持ですか」

「うん」

私は看護婦を相手に、父の水枕みずまくらを取り更かえて、それから新しい氷を入れた氷嚢ひょうのうを頭の上へ載のせた。がさがさに割られて尖とがり切つた氷の破片が、嚢ふくろの中で落ちつく間、私は父の禿はげ上つた額はつれの外はつれでそれを柔らかに抑おさえていた。その時兄が廊下ろうかづた伝たいにはいつて来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空あいた方の左手を出して、その郵便を受け取つた私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並なみの状袋じょうふくろにも入れてなかつた。また並の状袋に入れられべき分量

でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧ていねいに糊のりで貼り付けてあつた。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあつた。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐ふところに差し込んだ。

## 十七

その日は病人の出来がことに悪いように見えた。私が厠わたくしへ行かわくうとして席を立った時、廊下で行き合つた兄は「どこへ行く」と

番兵のような口調で誰何すいかした。

「どうも様子が少し変だからなるべく傍そばにいるようにしなくっちゃいけないよ」と注意した。

私もそう思っていた。懐中かいちゆうした手紙はそのままにしてまた病室へ帰った。父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明してやると、父はそのたびに首肯うなずいた。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。

「どうも色々お世話になります」

父はこういった。そうしてまた昏睡状態に陥った。枕辺まくらべを取り

巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。やがてその中の一人が立って次の間へ出た。するとまた一人立った。私も三人目にととうとう席を外して、自分の室へ来た。私には先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があった。それは病人の枕元でも容易にできる所作には違いなかった。しかし書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息にそこで読み通す訳には行かなかった。私は特別の時間を偷んでそれに充てた。

私は繊維の強い包み紙を引き搔くように裂き破った。中から出たものは、縦横に引いた罫の中へ行儀よく書いた原稿様のものでは

あつた。そうして封じる便宜のために、四つ折よおりに畳たたまれてあつた。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して読みやすいように平たくした。

私の心はこの多量の紙と印インキ気が、私に何事を語るのだろうかと思つて驚いた。私は同時に病室の事が気にかかった。私がこのかきものを読み始めて、読み終らない前に、父はきつとどうかかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父おじからか、呼ばれるに極きまつているといふ予覚よかくがあつた。私は落ち付いて先生の書いたものを読む気になれなかつた。私はそわそわしながらただ最初のページ一頁ページを読んだ。その頁は下のしものように綴つづられてい

た。

「あなたから過去を問いただされた時、答える事のできなかつた  
勇気のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得  
たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうち  
にはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。  
したがって、それを利用できる時に利用しなければ、私の過去を  
あなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸いっする  
ようになりません。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉  
がまるで嘘うそになります。私はやむを得ず、口でいうべきところ  
を、筆で申し上げる事にしました」

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のために書かれたのか、その理由を明らかに知る事ができた。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす気遣いきづかはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執とることの嫌いな先生が、どうしてあの事件をこう長く書いて、私に見せる気になつたのだろう。先生はなぜ私の上京するまで待っていられないだろう。

「自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならぬ」

私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。私はつづいて後あとを読もうとした。

その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声が聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を馳<sup>か</sup>け抜けるようにしてみんなのいる方へ行った。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚悟した。

## 十八

病室にはいつの間にか医者<sup>いしや</sup>が来ていた。なるべく病人を楽にするという主意からまた浣腸<sup>かんちよう</sup>を試みるところであった。看護婦は昨<sup>ゆう</sup>夜の疲<sup>べ</sup>れを休めるために別室で寝ていた。慣れない兄は起<sup>た</sup>つてま

ごまごしていた。私の顔を見ると、「ちよつと手をお貸し」と  
いったまま、自分は席に着いた。私は兄に代つて、油紙を父の尻  
の下に宛てがったりした。

父の様子は少しくつろいで来た。三十分ほど枕元に坐っていた  
医者いしやは、浣腸の結果を認めたと、また来るといつて、帰って行っ  
た。帰り際に、もしもの事があつたらいつでも呼んでくれるよう  
にわざわざ断っていた。

私は今にも変へんがありそうな病室を退しりぞいてまた先生の手紙を読もう  
とした。しかし私はすこしも寛ゆっくりした気分になれなかった。  
机の前に坐るや否いなや、また兄から大きな声で呼ばれそうであらな

かった。そうして今度呼ばれれば、それが最後だという畏怖いふが私の手を顫ふるわした。私は先生の手紙をただ無意味に頁ページだけ剥はく繰ぐって行った。私の眼は几帳面きちょうめんに枠わくの中に箆はめられた字画じかくを見た。けれどもそれを読む余裕はなかった。拾い読みにする余裕すら覚束おぼつかなかった。私は一番しまいの頁まで順々に開けて見て、またそれを元の通りに畳たたんで机の上に置こうとした。その時ふと結末に近い一句が私の眼にはいった。

「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」

私ははっと思った。今までざわざわと動いていた私の胸が一度

に凝結ぎやうけつしたように感じた。私はまた逆に頁をはぐり返した。そうして一枚に一句ぐらいずつの割で倒たかに読よんで行いった。私は咄嗟とつさの間に、私の知らなければならぬ事を知ろうとして、ちらちらする文字もんじを、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろうとするのは、ただ先生の安否だけであつた。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であつた。私は倒たかまに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてくれないこの長い手紙を自烈じれつたそうに置んだ。

私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行いった。病人の枕辺まくらべは存外ぞんがい静かであつた。頼りなさそうに疲れた顔をしてそこに坐つて

いる母を手招ぎてまねして、「どうですか様子は」と聞いた。母は「今少し持ち合ってるようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯うなずいた。父ははつきり「有難う」といった。父の精神は存外もつろつ朦朧もろろとしていなかった。

私はまた病室を退しりぞいて自分の部屋に帰った。そこで時計を見ながら、汽車の発着表を調べた。私は突然立って帯を締め直して、袂たもとの中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者の家へ馳かけ込んだ。私は医者から父がもう二、三日保さんちもつだろうか、そこを判然はつきり聞こうとした。注射

でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者あいにくは生憎留守であった。私には凝じっとして彼の帰るのを待ち受ける時間がなかった。心の落ち付つきもなかった。私はすぐ俾くるまを停車場ステーションへ急がせた。

私は停車場の壁へ紙片かみぎれを宛あてがって、その上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであったが、断らな  
いで走るよりまだ増しだろうと思って、それを急いで宅うちへ届ける  
ように車夫しゃふに頼んだ。そうして思い切った勢いきおいで東京行きしきの汽車  
に飛び乗ってしまった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また  
袂たもとから先生の手紙を出して、ようやく始めからしまいまで眼を通  
した。

下 先生と遺書

—

「……わたくし私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜よろしく頼むと書いてあったのは、た

しか二度目に手に入<sup>い</sup>ったものと記憶しています。私はそれを読んだ時何<sup>なん</sup>とかしたいと思ったのです。少なくとも返事を上げなければ済まんとは考えたのです。しかし自白すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかったのです。ご承知の通り、実際区域の狭いというよりも、世の中にたった一人で暮しているといった方が適切なくらいの私には、そういう努力をあえてする余地が全くないのです。しかしそれは問題ではありません。実をいうと、私はこの自分をどうすれば好<sup>い</sup>いのかと思<sup>わ</sup>い煩<sup>わづら</sup>っていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の私は「それとも」とい

う言葉を心のうちで繰り返すたびにぞっとしました。馳足で絶壁の端まで来て、急に底の見えない谷を覗き込んだ人のように。私は卑怯でした。そうして多くの卑怯な人と同じ程度において煩悶したのです。遺憾ながら、その時の私には、あなたというものがほとんど存在していなかったといっても誇張ではありません。一歩進めていうと、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとってまるで無意味なものでした。どうでも構わなかったのです。私はそれどころの騒ぎでなかったのです。私は状差へあなたの手紙を差したなり、依然として腕組をして考え込んでいました。宅に相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかし

ないのに、地位地位といって藻掻き廻るのか。私はむしろ苦々しい気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥を与えただけでした。私は返事を上げなければ済まないあなたに対して、言訳のためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無様な言葉を弄するのではありません。私の本意は後をご覧になればよく解る事と信じます。とにかく私は何とか挨拶すべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思います。

その後私はあなたに電報を打ちました。有体にいえば、あの時私はちよつとあなたに会いたかったのです。それからあなたの希

望通り私の過去をあなたのために物語りたかったのです。あなたは返電を掛<sup>か</sup>けて、今東京へは出られないと断つて来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺<sup>なが</sup>めていました。あなたも電報だけでは気が済まなかったとみえて、また後から長い手紙を寄こしてくれたので、あなたの出京<sup>しゅつぎやう</sup>できない事情がよく解<sup>わか</sup>りました。私はあなたを失礼な男だとも何とも思う訳がありません。あなたの大事なお父さんの病気をそっち退<sup>の</sup>けにして、何でああなたが宅<sup>うち</sup>を空<sup>あ</sup>けられるものですか。そのお父さんの生<sup>しょう</sup>死<sup>うし</sup>を忘れているような私の態度こそ不都合です。——私は実際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。そのくせあなたが東京にい

る頃には、難症だからよく注意しなくってはいけないと、あれほど忠告したのは私ですのに。私はこういう矛盾な人間なのです。あるいは私の脳髓よりも、私の過去が私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません。私はこの点においても充分私の我を認めています。あなたに許してもらわなくてはなりません。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執りかけましたが、一行も書かずに已めました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかったから、そ

うしてこの手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばないという簡単な電報を再び打ったのは、それがためです。

二

「私はそれからこの手紙を書き出しました。平生筆を持ちつけない私には、自分の思うように、事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少しで、あなたに対する私のこの義務を放擲するところでした。しかしいくら止そうと思つて筆を擱い

ても、何にもなりませんでした。私は一時間経たないうちにまた書きたくなりました。あなたから見たら、これが義務の遂行を重んずる私の性格のように思われるかも知れません。私もそれは否みません。私はあなたの知っている通り、ほとんど世間と交渉のない孤独な人間ですから、義務というほどの義務は、自分の左右前後を見廻しても、どの方角にも根を張っておりません。故意か自然か、私はそれをできるだけ切り詰めた生活をしていたのです。けれども私は義務に冷淡だからこうなったのではありません。むしろ鋭敏過ぎて刺戟に堪えるだけの精力がないから、ご覧のように消極的な月日を送る事になったのです。だから一旦約束

した以上、それを果たささないのは、大変厭いやな心持です。私はあなたに対してこの厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆をまた取り上げなければならぬのです。

その上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有といつても差支さしつかえないでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいともいわれるでしょう。私にも多少そんな心持があります。ただし受け入れる事のできない人に与えるくらいなら、私はむしろ私の経験を私の生命いのちと共に葬ほつむった方が好いいと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はつ

いに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしよう。私は何千万という日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいといったから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上げます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝と見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫みなさい。私の暗いというのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大分違ったところがあるかも知れません。しかしどう間

違っても、私自身のものです。間に合せて借りた損料着そんりようぎではあり  
ません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考  
になるだろうと思うのです。

あなたは現代の思想問題について、よく私に議論を向けた事を  
記憶しているでしょう。私のそれに対する態度もよく解わかっている  
でしょう。私はあなたの意見を軽蔑けいべつまでしなかったけれども、決  
して尊敬を払い得うる程度にはなれなかった。あなたの考えには何  
らの背景もなかったし、あなたは自分の過去をもつには余りに若  
過ぎたからです。私は時々笑った。あなたは物足りなそうな顔を  
ちよいちよい私に見せた。その極きよくあなたは私の過去を絵巻物えまきもののよ

うに、あなたの前に展開してくれと逼せまった。私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮ぶえんりよに私の腹の中から、或ある生きたものを捕つかまえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割わって、温かく流れる血潮を啜すすろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭いやであった。それで他た日を約つして、あなたの要求を斥しりぞけてしまった。私は今自分で自分の心臓を破やぶって、その血をあなたの顔に浴あびせかけようとしていたのです。私の鼓動こどうが停とまった時、あなたの胸に新あたらしい命が宿る事ができるなら満足です。

「私が両親を亡くしたのは、まだ私の廿歳にならない時分でした。いつか妻があなたに話していたようにも記憶していますが、二人は同じ病気で死んだのです。しかも妻があなたに不審を起させた通り、ほとんど同時とっていいくらいに、前後して死んだのです。実をいうと、父の病気は恐るべき腸窒扶斯ちようぢふすでした。それが傍そばにいて看護をした母に伝染したのです。

私は二人の間にできたたった一人の男の子でした。宅うちには相当の財産があったので、むしろ鷹揚おつように育てられました。私は自分の

過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどっちか、片方で好いから生きていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事ができたらうにと思います。

私は二人の後に茫然<sup>ぼうぜん</sup>として取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別もありませんでした。父の死ぬ時、母は傍にいる事ができませんでした。母の死ぬ時、母には父の死んだ事さえまだ知らせてなかったのです。母はそれを覚<sup>さと</sup>っていたか、または傍<sup>はた</sup>のもののごとく、実際父は回復期に向いつつあるものと信じていたか、それは分りません。母はただ叔父<sup>おじ</sup>に万事

を頼んでいました。そこに居合せた私を指さすようにして、「この子をどうぞ何分なにぶん」といいました。私はその前から両親の許可を得て、東京へ出るはずになっていましたので、母はそれもついでにいうつもりらしかったのです。それで「東京へ」とだけ付け加えましたら、叔父がすぐ後あとを引き取って、「よろしい決して心配しないがいい」と答えました。母は強い熱に堪え得る体質の女なりましたら、叔父は「確しつかりしたものだ」といって、私に向って母の事を褒めていました。しかしこれがはたして母の遺言であったのかどうだが、今考えると分らないのです。母は無論父の罹かかった病気の恐るべき名前を知っていたのです。そうして、自

分がそれに伝染していた事も承知していたのです。けれども自分  
はきつとこの病気で命を取られるとまで信じていたかどうか、そ  
こになると疑う余地はまだいくらでもあるだろうと思われるので  
す。その上熱の高い時に出る母の言葉は、いかにそれが筋道の  
通った明らかなものにせよ、一向記憶いっしやうとなつて母の頭に影さえ残  
していない事がしばしばあつたのです。だから……しかしそんな  
事は問題ではありません。ただこういう風ふうに物を解きほどこいてみ  
たり、またぐるぐる廻まわして眺ながめたりする癖くせは、もうその時分か  
ら、私にはちゃんと備わっていたのです。それはあなたにも始め  
からお断わりしておかなければならないと思いますが、その実例

としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、かえって役に立ちはしないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性分しょうぶんが倫理的に個人の行為やら動作の上  
に及んで、私は後来こうらいますます他の徳義心を疑うようになったのだ  
ろうと思うのです。それが私の煩悶はんもんや苦悩に向って、積極的に大  
きな力を添えているのは慥たしかですから覚えていて下さい。

話が本筋ほんすじをはずれると、分り悪にくくなりますからまたあとへ引き  
返しましょう。これでも私はこの長い手紙を書くのに、私と同じ  
地位に置かれた他の人ほかと比べたら、あるいは多少落ち付いていや  
しないかと思っっているのです。世の中が眠ると聞こえだすあの電

車の響ひびきももう途絶とだえました。雨戸の外にはいつの間にか憐あわれな虫の声が、露の秋をまた忍びやかに思い出させるような調子で微かすかに鳴いています。何も知らない妻さいは次の室へやで無邪むじゃ気にすやすや寝ね入いっています。私が筆を執とると、一字一劃かくができあがりつつペン先ので鳴っています。私はむしろ落ち付いた気分きぶんで紙に向っているのです。不馴ふなれのためにペンが横よこへ外それるかも知れませんが、頭あたまが悩乱のうらんして筆がしどろに走はるのではないように思います。

#### 四

「とにかくたった一人取り残された私は、母のいい付け通り、この叔父を頼るより外に途はなかつたのです。叔父はまた一切を引き受けて凡ての世話をしてくれました。そうして私を私の希望する東京へ出られるように取り計らってくれました。

私は東京へ来て高等学校へはいりました。その時の高等学校の生徒は今よりもよほど殺伐で粗野でした。私の知ったものに、夜中職人と喧嘩をして、相手の頭へ下駄で傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句の事なので、夢中に擲り合いをして

いる間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形

の白いきれの上に書いてあったのです。それで事が面倒になつて、その男はもう少しで警察から学校へ照会されるところでした。しかし友達が色々と骨を折って、ついに表沙汰おもてぎたにせず済むようにしてやりました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育ったあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿ばかばかしい感じを起すでしょう。私も実際馬鹿馬鹿ばかばかしく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴しつぽくな点をその代りにもっていたのです。当時の私の月々叔父から貰もらっていた金は、あなたが今、お父さんから送ってもらおう学資に比べると遥はるかに少ないものでした。（無論物価も違いました）。それでいて私は少しの不足も感じません

でした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨ましがる憐れな境遇にいた訳ではないのです。今から回顧すると、むしろ人に羨ましがられる方だったのでしよう。というのは、私は月々極った送金の外に、書籍費、（私はその時分から書物を買う事が好きでした）、および臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思うように消費する事ができたのですから。

何も知らない私は、叔父を信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもって、叔父をありがたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係か

らでもありましよう、政党にも縁故があつたように記憶していま  
す。父の實の弟ですけれども、そういう点で、性格からいうと父  
とはまるで違つた方へ向いて發達したようにも見えます。父は先  
祖から譲られた遺産を大事に守つて行く篤実とくじつ一方いっぽうの男でした。楽  
しみには、茶だの花だのをやりました。それから詩集などを読む  
事も好きでした。書画骨董しよがこつとうといつた風ふうのものにも、多くの趣味を  
もっている様子でした。家は田舎いなかにありましたけれども、二里にりば  
かり隔したつた市、——その市には叔父が住んでいたので、——  
その市から時々道具屋が懸物かけものだの、香炉こうろだのを持って、わざわざ  
父に見せに來ました。父は一口ひとくちにいうと、まあマン・オフ・ミー

ンズとでも評したら好いのでしよう。比較的上品な嗜好をもった田舎紳士だったので。だから気性からいうと、闊達な叔父とはよほどの懸隔がありました。それでいて二人はまた妙に仲が好かったのです。父はよく叔父を評して、自分よりも遙かに働きのある頼もしい人のようにいっていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材幹が鈍る、つまり世の中と闘う必要がないからいけないのだともいってました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。父はむしろ私の心得になるつもりで、それをいっただらしく思われます。「お前もよく覚えているが好い」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。

だから私はまだそれを忘れずにいます。このくらい私の父から信用されたり、褒められ<sup>ほ</sup>たりしていた叔父を、私がどうして疑う事ができるでしょう。私にはただでさえ誇りになるべき叔父でした。父や母が亡くなって、万事その人の世話にならなければならぬ私には、もう単なる誇りではなかったのです。私の存在に必要な人間になっていたのです。

## 五

「私が夏休みを利用して始めて国へ帰った時、両親の死に断えた

私の住居すまいには、新しい主人として、叔父夫婦が入れ代って住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束でした。たった一人取り残された私が家にいない以上、そうでもするより外ほかに仕方がなかったのです。

叔父はその頃ころ市にある色々な会社に関係していたようです。業務の都合からいえば、今までの居宅きょたくに寝起ねおきする方が、二里りも隔へだたった私の家に移るより遥かに便利だといって笑いました。これは私の父母が亡くなった後あと、どう邸やしきを始末して、私が東京へ出るかという相談の時、叔父の口を洩もれた言葉であります。私の家は古い歴史をもっているので、少しはその界限かいわいで人に知られていま

した。あなたの郷里でも同じ事だろうと思いますが、田舎では由緒のある家を、相続人があるのに壊したり売ったりするのは大事件です。今の私ならそのくらいの事は何とも思いませんが、その頃はまだ子供でしたから、東京へは出たし、家はそのままにして置かなければならず、はなはだ所置に苦しんだのです。

叔父は仕方なしに私の空家へはいる事を承諾してくれました。しかし市の方にある住居もそのままにしておいて、両方の間を往ったり来たりする便宜を与えてもらわなければ困るといいました。私に固より異議のありようはありません。私はどんな条件でも東京へ出られれば好いくらいに考えていたのです。

子供らしい私は、故郷ふるさとを離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅人たびびとの心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出て来た私にも、力強くあったのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後あと、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ました。

私の留守の間、叔父はどんな風ふうに両方の間を往ゆき来きしていたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家いえの内うちに集まっていました。学校へ出る子供などは平生へいせいおそらく市の方かたにいたのでしようが、これも休暇のために田舎いなかへ遊び半分といっ

た格<sup>かく</sup>で引き取られていました。

みんな私の顔を見て喜びました。私はまた父や母のいた時より、かえって賑<sup>にぎ</sup>やかで陽気になった家の様子を見て嬉<sup>うれ</sup>しがりました。叔父はもと私の部屋になっていた一<sup>ひと</sup>間<sup>ま</sup>を占領している一番目の男の子を追い出して、私をそこへ入れました。座敷の数<sup>かず</sup>も少ないのだから、私はほかの部屋で構わないと辞退したのですけれども、叔父はお前の宅<sup>うち</sup>だからといって、聞きませんでした。

私は折々亡くなった父や母の事を思い出す外<sup>ほか</sup>に、何の不愉快もなく、その一<sup>ひと</sup>夏<sup>なつ</sup>を叔父の家族と共に過ごして、また東京へ帰ったのです。ただ一つその夏の出来事として、私の心にむしろ薄暗い

影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃そろえて、まだ高等学校へ入ったばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私も始めはただその突然なのに驚いただけでした。二度目には判然はつきり断りました。三度目にはこっちからとうとうその理由を反問しなければならなくなりました。彼らの主意は単簡たんかんでした。早く嫁よめを貰もらってこの家へ帰って来て、亡くなった父の後を相続しろというだけなのです。家は休暇やすみになって帰りさえすれば、それでいいものと私は考えていました。父の後を相続する、それには嫁が必要だから貰もらう、両方とも理屈としては一通り聞ひととおこえます。ことに田舎の事情を知っている私には、よ

く解わかります。私も絶対にそれを嫌ってはいなかったのでしょう。しかし東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠とお眼鏡めがねで物を見るように、遥はるか先の距離に望まれるだけでした。私は叔父の希望に承諾を与えないで、ついにまた私の家を去りました。

## 六

「私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周ぐる囲を取り捲まいている青年の顔を見ると、世帯染しよたいじみたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉ことごとく単独らしく思われたのです。

こういう気楽な人の中にも、裏面にはいり込んだら、あるいは家庭の事情に余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私はそこに気が付きませんでした。それからそういう特別の境遇に置かれた人の方でも、四辺に気兼をして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたのでしょう。後から考えると、私自身がすでにその組だったので、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。

学年の終りに、私はまた行李を絡げて、親の墓のある田舎へ帰って来ました。そうして去年と同じように、父母のいたわが家

の中で、また叔父夫婦とその子供の変わらない顔を見ました。私は再びそこで故郷の匂いを嗅ぎました。その匂いは私に取って依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違いなかったのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂いの中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父のいう所は、去年の勧誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前勧められた時には、何らの目的物がなかったのに、今度はちゃんと肝心の当人を捕まえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわ

ち私の従妹いとこに当る女でした。その女を貰もらってくれれば、お互いのために便宜である、父も存生中ぞんしゅうちゅうそんな事を話していた、と叔父がいうのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風ふうな話をしたというのもあり得うべき事と考えました。しかしそれは私が叔父にいわれて、始めて気が付いたので、いわれない前から、覚さとっていた事柄ではないのです。だから私は驚きませんでした。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがためによく解わかりました。私は迂闊うかつなんでしょうか。あるいはそうなのかも知れませんが、おそらくその従妹に無頓着むとんじやくであったのが、おもな原因げんいんになっているのでしよう。私は小供こどものうちから市

にいる叔父の家へ始終遊びに行きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかったのです。あなたもご承知でしょう、兄妹の間きょうだいに恋の成な立ためた例ためしのないのを。私はこの公認された事実を勝手に布ふ衍えんしているかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男女なんによの間には、恋に必要な刺戟しげきの起る清新な感じが失われてしまうように考考えています。香かうをかぎ得うるのは、香かを焚たき出した瞬間しゅんに限るごとく、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹那せつなにあるごとく、恋の衝動しゅんどうにもこういう際きわどい一点が、時間の上じかんの上に存在そんざいしているとしか思思われなないのです。一度平気でそこを通り抜けたら、馴なれれば馴なれ

るほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺して来るだけです。私はどう考え直しても、この従妹を妻にする気にはなれませんでした。

叔父はもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいといいました。けれども善は急げという諺もあるから、できるなら今のうちに祝言の盃だけは済ませておきたいともいいました。当人に望みのない私にはどっちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は厭な顔をしました。従妹は泣きました。私に添われなから悲しいではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛かったからです。私が従妹を愛して

いないごとく、従妹も私を愛していない事は、私によく知れていました。私はまた東京へ出ました。

## 七

「私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取付とつつきでした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷ふるさとがそれほど懐かしかったからです。あなたにも覚えがあるでしょう、生れた所は空気の色が違います、土地の匂においも格別です、父や母の記憶も濃こかに漂たっています。一年のう

ちで、七、八の二月ふたつきをその中にくる包まれて、穴に入った蛇へびのように凝じっとしているのは、私に取って何よりも温かい好い心持だったのです。

単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思っていました。厭いとなものは断る、断ってさえしまえば後あとには何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲げなかったにもかかわらず、私はむしろ平気でした。過去一年の間いまだかつてそんな事に屈く托たくした覚えもなく、相変らずの元気で国へ帰ったのです。

ところが帰って見ると叔父の態度が違っています。元のように

好い顔をして私を自分の懐ふところに抱だこうとしません。それでも鷹揚おうように育った私は、帰って四、五日の間は気が付かずにいました。ただ何かの機会にふと変に思い出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母おばも妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の高等商業へはいるつもりだといつて、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性分しやうぶんとして考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変ったのだろう。いやどうして向うがこう変ったのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍にぶい私の眼を洗って、急に世

の中が判然はつきり見えるようにしてくれたのではないかと疑いました。

私は父や母がこの世にいなくなつた後あとでも、いた時と同じように私を愛してくれるものと、どこか心の奥で信じていたのです。

もつともその頃ころでも私は決して理に暗い質たちではありませんでした。しかし先祖から譲かたられた迷信の塊かたまりりも、強い力で私の血の中に潜ひそんでいたのです。今でも潜ひそんでいるでしょう。

私はたった一人山へ行つて、父母の墓の前に跪ひざまずきました。半なかばは哀悼あいとうの意味、半は感謝の心持で跪ひざまずいたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握にぎられてでもいるような気分で、私の運命を守るべく彼らに祈いのりました。

あなたは笑うかもしれない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったのです。

私の世界は掌たなごころを翻すように変わりました。もつともこれは私に取って始めての経験ではなかったのです。私が十六、七の時でしたらう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはっと驚きました。何遍なんべんも自分の眼を疑うたぐって、何遍も自分の眼を擦こすりました。そうして心の中うちでああ美しいと叫びました。十六、七といえば、男でも女でも、俗にいう色気いろけの付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいものの代表者として、始めて女を見る事ができたのです。今までその存在に少しも

気の付かなかった異性に対して、盲目めくらの眼が忽ちたちま開いたあのです。  
それ以来私の天地は全く新しいものとなりました。

私が叔父おじの態度に心づいたのも、全くこれと同じなんでしよう。俄然がぜんとして心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に来たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映ったのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行先ゆくさきがどうなるか分らないという気になりました。

「私は今まで叔父任せまかにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母ちちははに対して済まないという気を起したのです。叔父は忙しい身体からだだと自称するごとく、每晚同じ所に寝泊りまはしていませんでした。二日家うちへ帰ると三日は市しの方で暮らすといった風ふうに、両方ゆききの間を往来して、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという言葉くちくせを口癖のように使いました。何の疑いも起らない時は、私も実際に忙しいのだろうと思っていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだろうと、皮肉にも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛かかる話をしようという目的ができた

眼で、この忙しがる様子を見ると、それが単に私を避ける口実としか受け取れなくなってきたのです。私は容易に叔父を捕まえる機会を得ませんでした。

私は叔父が市の方に妾めかけをもっているという噂うわさを聞きました。私はその噂を昔中学の同級生であったある友達から聞いたのです。妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪あやしむに足らないのですが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚おぼえのない私は驚きました。友達はその外ほかにも色々叔父についての噂を語って聞かせました。一時事業で失敗しかかっていたように他ひとから思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来た

というのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染めつけたものの一つでした。

私はとうとう叔父おじと談判を開きました。談判というのは少し不ふ穏当んとうかも知れませんが、話の成行きなりゆからいうと、そんな言葉で形容するより外に途みちのないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとしています。私はまた始めから猜疑さいぎの眼で叔父に對しています。穏やかに解決のつくはずはなかったのです。

遺憾いかんながら私は今その談判の顛末てんまつを詳しくここに書く事のできないほど先を急いでいます。実をいうと、私はこれより以上に、

もつと大事なものを控えているのです。私のペンは早くからそこへ辿りつきたがっているのを、漸やっとの事で抑えつけているくらいです。あなたに会って静かに話す機会を永久に失った私は、筆を執とる術すべに慣れないばかりでなく、貴たつとい時間を惜おしむという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたはまだ覚えているでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないといった事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけな  
いといった事を。あの時あなたは私に昂こつふん奮ふんしていると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと

尋ねました。私がただ一口金と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪ぞうおと共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取って物足りなかつたかも知れませ  
ん、陳腐ちんぷだったかも知れませんか。けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮していたではありませんか。私は冷やか  
な頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる

方が生きていると信じています。血の力で体が動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もっと強い物にもっと強く働き掛ける事ができるからです。

## 九

「一口ひとくちでいうと、叔父わたくしは私の財産を胡魔化ごまかしたのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易たやすく行われたのです。すべてを叔父任まかせにして平気でいた私は、世間的に言えば本当の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、あるいは純なる尊たつとい男とでもい

えましようか。私はその時の己おのれを顧みて、なぜもつと人が悪く生れて来なかつたかと思うと、正直過ぎた自分が口く惜やしくつて堪たまりません。しかしまたどうかして、もう一度ああいう生れたままの姿に立ち帰って生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知っている私は塵ちりに汚れた後あとの私です。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかにあなたより先輩でしょう。

もし私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取って有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思います。叔父おじは策略で娘を私に押し付けようとし

たのです。好意的に両家の便宜を計るといふよりも、ずっと下卑げびた利害心に駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹いとこを愛していないだけで、嫌ってはいなかったのですが、後から考えてみると、それを断ったのが私には多少の愉快になると思えます。胡魔化ごまかされるのはどっちにしても同じでしょうけれども、載のせられ方からいえば、従妹を貰もらわない方が、向うの思い通りにならないという点から見て、少しは私の我がが通った事になるのですから。しかしそれはほとんど問題とするに足りない些細ささいな事柄です。ことに関係のないあなたにいわせたら、さぞ馬鹿気ばかげた意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他の親戚のものがはいりました。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵視していました。私は叔父が私を欺いたと覚ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違いないと思い詰めました。父があれだけ賞め抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはとというのが私の論理でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見積ると、私の予期より遙かに少ないものでした。私としては黙ってそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取って公沙汰にするか、二つの方法しかなかったの

です。私は憤こみんりました。また迷まよいました。訴訟しゅうじにすると落着おちつかまで  
に長い時間のかかる事も恐れしました。私は修業中のからだですか  
ら、学生として大切な時間を奪さらわれるのは非常の苦痛だとも考え  
ました。私は思案の結果、市しにおける中学の旧友に頼たのんで、私の受  
け取ったものを、すべて金の形かたちに変えようと思いました。旧友は止よ  
した方が得だといって忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。  
私は永とこく故郷こきやうを離れる決心をその時に起したのです。叔父  
の顔を見まいと心のうちで誓ったのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎ  
りその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないで

しよう。

私の旧友は私の言葉通りに取り計らってくれました。もっともそれは私が東京へ着いてからよほど経った後の事です。田舎で畠地などを売ろうとしたって容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取った金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。告白すると、私の財産は自分が懐にして家を出た若干の公債と、後からこの友人に送ってもらった金だけなのです。親の遺産としては固より非常に減っていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かったのです。けれども学生として生活

するにはそれで充分以上でした。実をいうと私はそれから出る利子の半分も使えませんでした。この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥おとし入れたのです。

## 十

「金に不自由のない私わたくしは、騒々そうぞうしい下宿を出て、新しく一戸を構えてみようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆ばあさんの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅うちを留守にし

ても大丈夫なものでなければ心配だし、といった訳で、ちよくらちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。ある日私はまあ宅だけで探してみようかというそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。電車の通路になってから、あそこいらの様子がまるで違ってしまいました。その頃は左手が砲兵工廠の土塀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立って、何心なく向うの崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずっとあの西側の趣が違っていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休

まります。私はふとここいらに適当な宅はないだろうかと思いま  
した。それで直ぐ草原を横切って、細い通りを北の方へ進んで行  
きました。いまだに好い町になり切れなくて、がたぴししている  
あの辺の家並は、その時分の事ですからいぶん汚らしいもの  
でした。私は露次を抜けたり、横丁を曲ったり、ぐるぐる歩き廻  
りました。しまいには駄菓子屋の上さんに、ここいらに小ぢんまり  
した貸家はないかと尋ねてみました。上さんは「そうですね」と  
いって、少時首をかしげていましたが、「かし家はちよいと：  
：」と全く思い当らない風でした。私は望のないものと諦らめて  
帰り掛けました。すると上さんがまた、「素人下宿じゃいけませ

んか」と聞くのです。私はちよつと気が変わりました。静かな素人しろう屋とやに一人で下宿しているのは、かえって家うちを持つ面倒がなくなつて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでい  
る家でした。主人は何でも日清戦争にっしんの時か何かに死んだのだと上  
さんがいいました。一年ばかり前までは、市ヶ谷いちがやの士官学校しかんの傍そば  
とかに住んでいたのだが、厩うまやなどがあつて、邸やしきが広過ぎるので、  
そこを売り払つて、ここへ引つ越して来たけれども、無人ぶにんで淋さむし  
くつて困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれてい

たのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人と一人娘と下女より外にいないのだという事を確かめました。私は閑静で至極好かろうと心の中に思いました。けれどもそんな家族のうちに、私のようなものが、突然行ったところで、素性の知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛念もありました。私は止そうかとも考えました。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装はしていませんでした。それから大学の制帽を被っていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだと。けれどもその頃の大学生は今と違って、大分世間に信用のあったものです。私はその場合この四角な帽子

に一種の自信を見出したくらいです。そうして駄菓子屋の上さんに教わった通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家を訪ねました。

私は未亡人に会って来意を告げました。未亡人は私の身元やら学校やら専門やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だということところをどこかに握ったのでしよう、いつでも引越して来て差支えないという挨拶を即坐に与えてくれました。未亡人は正しい人でした、また判然した人でした。私は軍人の妻君というものはみんなこんなものかと思って感服しました。感服もしたが、驚きもしました。この気性でどこが淋しいのだろ

うと疑いもしました。

十一

「私は早速その家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中で一番好い室でした。本郷辺に高等下宿といった風の家がぽつぽつ建てられた時分の事です。ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得ていました。私の新しく主人となった室は、それらよりもずっと立派でした。移った当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思

われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に違い棚があつて、縁と反対の側には一間の押入れが付いていました。窓は一つもなかったのですが、その代り南向きの縁に明るいい日がよく差し込みました。

私は移った日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どっちも私の気に入りませんでした。

私は詩や書や煎茶を嗜なむ父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちからもっていました。そのためでもありませんようか、こういう艶めかしい装飾をいつの間にか軽蔑する癖が付いていたのです。

私の父が存生中ぞんしようちゆうにあつめた道具類は、例の叔父おじのために滅茶滅めちやめち茶やにされてしまったのですが、それでも多少は残っていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かってもらいました。それからその中うちで面白おもしろそうなものを四、五幅ふく裸はだかにして行李こうりの底へ入れて来ました。私は移るや否いなや、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今いった琴ことと活花いけばなを見たので、急に勇気がなくなってしまうました。後あとから聞いて始めてこの花が私に対するご馳走ちそうに活けられたのだという事を知った時、私は心のうちで苦笑しました。もつとも琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむをえずそのままに立て懸

けてあったのでしよう。

こんな話をすると、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠めて通るでしょう。移った私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪気が予備的に私の自然を損なったためか、または私がまだ人慣れなかつたためか、私は始めてそこのお嬢さんに会った時、へどもどした挨拶をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。

私はそれまで未亡人の風采や態度から推して、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君だからあ

あなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうといった順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかった異性の匂いが新しく入って来ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりました。

その花はまた規則正しく凋れる頃になると活け更えられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がった筋違の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頬杖を突きながら、その琴の音を聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解ら

ないのです。けれども余り込み入った手を弾か<sup>ひ</sup>ないところを見ると、上手なのじゃなかろうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思いました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨<sup>うま</sup>い方ではなかったのです。

それでも臆<sup>おく</sup>面なく色々な花が私の床を飾ってくれました。もつとも活<sup>い</sup>方<sup>か</sup>はいつ見ても同じ事でした。それから花<sup>か</sup>瓶<sup>へい</sup>もついぞ変った例<sup>た</sup>め<sup>め</sup>しありませんでした。しかし片方の音楽になると花よりももつと変でした。ぽつんぽつん糸を鳴らすだけで、一向<sup>いっ</sup>肉<sup>にく</sup>声を聞かせないのです。唄<sup>うた</sup>わないのではありませんが、まるで内<sup>ない</sup>所<sup>しよ</sup>話<sup>わなし</sup>でもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱<sup>しか</sup>られると全

く出なくなるのです。

私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそのような琴の音に耳を傾けました。

## 十二

「私の気分は国を立つ時すでに厭世的になっていました。他は頼りにならないものだという観念が、その時骨の中まで染み込んでしまったように思われたのです。私は私の敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者のごとく考え

出しました。汽車へ乗ってさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくありません。私の心は沈鬱ちんうつでした。鉛を呑のんだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今いったごとくに鋭く尖とがってしまっただのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因げんいんになっっているように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなっただといえればそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懐中ふところに余裕ができて、好んでそんな面倒まねな真似はしなかつたでしょう。

私は小石川へ引き移ってから、当分の緊張した気分くつろに寛くわんぎ  
を与える事ができませんでした。私は自分で自分が恥ちずかしいほ  
ど、きよときよと周囲を見廻みまわしていました。不思議にもよく働はたらく  
のは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動うごかなくなつて  
来きました。私は家うちのものものの様子を猫ねこのようによく観くわん察さつしながら、  
黙もくつて机けいの前まえに坐すわっていました。時々は彼らかれらに對たいして氣きの毒どくだと  
思おもうほど、私は油断ゆだんのない注意ちゅういを彼らかれらの上うへに注そそいでいたのです。  
おれは物を偷ぬすまない巾着きんちやく切きりみたようなものだ、私はこう考かんえて、  
自分おれが厭いやになる事ことさえあつたのです。

あなたは定さだめて変かに思おもうでしょう。その私わたしがそこのお嬢お嬢さんを

どうして好く余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活花を、どうして嬉しがつて眺める余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ両方とも事実であったのだから、事実としてあなたに教えて上げるといふより外に仕方がないのです。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言付け足しておきましょう。私は金に対して人類を疑ったけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかったのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したもので、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未亡人びぼうじんの事を常に奥さんといっていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんといえます。奥さんは私を静かな人、大人なしい男と評しました。それから勉強家だとも褒めてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかったのか、遠慮していたのか、どっちだかよく解りませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。それのみならず、ある場合に私を鷹揚おうような方かただといって、さも尊敬したらしい口の利きき方をした事があります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「あなたは自分で気

が付かないから、そうおっしやるんです」と真面目まじめに説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅うちへ置くつもりではなかつたらしいのです。どこかの役所へ勤める人か何かに坐敷ざしきを貸す料簡りょうけんで、近所のものに周旋を頼んでいたらしいのです。俸給が豊ゆたかでなくって、やむをえず素人屋しろうとやに下宿するくらいの人だからという考えが、それで前かたから奥さんの頭のどこかにはいつていたのでしよう。奥さんは自分の胸に描えがいたその想像のお客と私とを比較して、こっちの方を鷹揚たうやうだといって褒ほめるのです。なるほどそんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけ、鷹揚たうやうだったかも知れません。しかしそれは気性きしょうの問題ではあ

りませんから、私の内生活に取ってほとんど関係のないのと一般  
でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体に推し広げて、同  
じ言葉を応用しようと力めるのです。

### 十三

「奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらく  
くするうちに、私の眼はもとほどこきよる付かなくなりました。自  
分の心が自分の坐すわっている所に、ちゃんと落ち付いているような  
気にもなれました。要するに奥さん始め家うちのものが、僻ひがんだ私の

眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしよう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風ふうに取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言することく、実際私を鷹揚おうようだと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それほど外へ出なかつたようにも考えられますから、あるいは奥さんの方で胡魔化ごまかされていたのかも解わかりません。

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来まし

た。奥さんともお嬢さんとも笑談じょうだんをいうようになりました。茶を入れたからといって向うの室へやへ呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買って来て、二人をこっちへ招いたりする晩もありました。私は急に交際の区域が殖ふえたように感じました。そのため大切な勉強の時間を潰つぶされる事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向いっこう邪魔にならなかつたのです。奥さんはもとより閑人ひまじんでした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといっしょに集まって、

世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲って、私の室の前に立つ事もありますし、茶の間を抜けて、次の室の襖ふすまの影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来てちよつと留とまります。それからきつと私の名を呼んで、「ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていましたから、傍はたで見たらさぞ勉強家のように見えたのでしよう。しかし實際をいうと、それほど熱心に書物を研究してはいなかったのです。頁ページの上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているくらいなものでし

た。待っていて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行つて、こっちから「ご勉強ですか」と聞くのです。

お嬢さんの部屋は茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋にいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕切しきりがあつても、ないと同じ事で、親子二人が往いつたり来たりして、どっち付かずいに占領していたのです。私が外から声を掛けると、「おはいんなさい」と答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんはそこにいても滅多めったに返事をしな事ありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へはいったついでに、そこに坐すわつて話し込むような場合もその内うちに出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒おかされて来るのです。そうして若い女とただ差向さしむかいで坐すわっているのが不安なのだとはかりは思えませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。しかし相手の方はかえつて平気でした。これが琴を浚たじうのに声さえ碌ろくに出せなかつたあの女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました

た。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかったのです。私の眼にはよくそれが解わかっていました。よく解るように振舞って見せる痕迹こんせきさえ明らかでした。

## 十四

「私はお嬢さんの立ったあとで、ほっと一息ひといきするのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持になるのです。私は女らしかったのかも知れませんが。今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃ころの私たちは大

抵そんなものだったのです。

奥さんは滅多めったに外出した事がありませんでした。たまに宅うちを留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかつたのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口からいうのは変ですが、奥さんの様子を能よく観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えます。それでいて、或ある場合には、私に対して暗あんに警戒するところもあるようなのですから、始めてこんな場合に出会った私は、時々心持をわるくしました。

私は奥さんの態度をどっちなかに片付けかたづてもらいたかつたので

す。頭の働きからいえば、それが明らかかな矛盾に違いなかったの  
です。しかし叔父おじに欺あやむかれた記憶のまだ新しい私は、もう一歩踏  
み込んだ疑いを挟はさまずにはいられませんでした。私は奥さんのこ  
の態度のどっちかが本当で、どっちかが偽いつわりだろうと推定しまし  
た。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、  
何でそんな妙な事をするかその意味が私には呑のみ込めなかったの  
です。理わけ由けを考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女と  
いう一字に塗なすり付けて我慢した事もありました。必ひつ竟きやう女めだからあ  
あなのだ、女というものはどうせ愚ぐなものだ。私の考えは行き詰つ  
まればいつでもここへ落ちて来ました。

それほど女を見縊<sup>みくび</sup>っていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊<sup>な</sup>る事ができなかつたのです。私の理屈はその人の前に全く用を為さないほど動きませんでした。私はその人に対して、ほとんど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気<sup>けだか</sup>高い気分がすぐ自分に乗り移つて来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両<sup>ちゆう</sup>端が

あつて、その高い端はじには神聖な感じが働いて、低い端には性欲せいよくが動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕つかまえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事のできない身体からだでした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭においを帯びていませんでした。

私は母に対して反感を抱いだくと共に、子に対して恋愛の度を増まして行ったのですから、三人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑むざむざになって来ました。もつともその変化はほとんど内面的で外へは現れて来なかったのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという気に

なりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どっちも偽りではないのだらうと考え直して来たのです。その上、それが互いたがの違いに奥さんの心を支配するのではなくって、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんができるだけお嬢さんを私に接近させようとしていながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として二人を接近させたがっていたのだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の

方面から近づく念の萌きざさなかつた私は、その時入いらぬ心配だと思  
いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれからなくなりまし  
た。

## 十五

「私は奥さんの態度を色々そうごう総合して見て、私がこの家うちで充分信  
用されている事を確かめました。しかもその信用は初対面の時か  
らあったのだという証拠さえ発見しました。他ひとを疑うたぐり始めた私の  
胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に

比べると女の方がそれだけ直覚に富んでいるのだらうと思いましたが。同時に、女が男のために、欺だまされるのもここにあるのではなからうかと思いました。奥さんをそう観察する私が、お嬢さんに対して同じような直覚を強く働かせていたのだから、今考えるとおかしいのです。私は他ひとを信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。それでいて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件については何もいわなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえすでに一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥

さんの方の話だけを聞こうと力つとめました。ところがそれでは向うが承知しません。何かにつけて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好いい事をしたと思いましたが。私は嬉うれしかったのです。

私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したといわないばかりの顔をし出しました。それから私を自分の親みよ戚りに当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は

腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいです。ところがそのうちに私の猜疑心さいぎしんがまた起って来ました。

私が奥さんを疑り始めたのは、ごく些細な事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張って来ます。私はどういう拍子かふと奥さんが、叔父おじと同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力めるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾な策略家として私の眼に映じて来たのです。私は苦々しい唇を噛みましました。

奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をする

のだと公言していました。私もそれを嘘うそとは思いませんでした。懇意になつて色々打ち明け話を聞いた後あとでも、そこに間違まちがいはなかつたように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊ゆたかだというほどではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と特殊の關係をつけるのは、先方につけて決して損ではなかつたのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前いったくらの強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を加えたって何になるでしょう。私は一人で自分を嘲笑ちやうしやうしました。馬鹿だなといって、自分を罵ののつた事もあります。しかしそれだけの矛

盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶はんもんは、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家ではなからうかという疑問に会って始めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだらうと思うと、私は急に苦しくって堪たまらなくなるのです。不愉快なわけではありません。絶体絶命のような行き詰まった心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかったのです。だから私は信念と迷いの途中に立って、少しも動く事ができなくなってしまいました。私にはどっちも想像であり、またどっちも真実であったのです。

「私は相変わらず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へはいる活字は心の底まで浸しみ渡らないうちに烟けむのごとく消えて行くのです。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想めいそうに耽ふけってでもいるかのよう

に、他たの友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好いい仮面を人が貸してくれたのを、かえって仕合しあわせとして喜びました。それでも時々は気が済まなかったものでしよ

う、発作的に焦燥ぎ廻って彼らを驚かした事もあります。

私の宿は人出入りの少ない家でした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありませんが、極めて小さな声で、いるのだからかいないのだから分らないような話をして帰ってしまうのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでした。私の所へ訪ねて来に気兼ねをするほどの男は一人もなかったのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんがかえって食客の位地にいたと同じ事です。

しかしこれはただ思い出したついでに書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただそこにどうでもよくない事が一つあったのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室<sup>へや</sup>で、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違って、すこぶる低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮<sup>こうふん</sup>を与えるのです。私は坐<sup>すわ</sup>っていて変にいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それともただの知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案してみるのです。坐<sup>すわ</sup>っていてそんな事の知れようはずがありません

せん。そうかといって、起たって行って障子しょうじを開けて見る訳にはな  
おいきません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を  
打って私を苦しめます。私は客の帰った後で、きつと忘れずにそ  
の人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて  
簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるま  
で追窮ついきゆうする勇氣をもっていなかったのです。権利は無論もってい  
なかつたのでしよう。私は自分の品格を重んじなければならぬ  
という教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏切うらぎりしている物  
欲しそうな顔付かおつきとを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いま  
した。それが嘲笑ちやうしの意味でなくって、好意から来たものか、また

好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐に解釈の余地を見出し  
得ないほど落付おちつきを失ってしまふのです。そうして事が済んだ後  
で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじやなかる  
うかと、何遍なんべんも心のうちで繰り返すのです。

私は自由な身体からだでした。たとい学校を途中で已やめようが、また  
どこへ行つてどう暮らそうが、あるいはどこの何者と結婚しよう  
が、誰だれとも相談する必要のない位地に立っていました。私は思い  
切つて奥さんにお嬢さんお嬢さんを貰もらい受ける話をして見ようかという決  
心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもそのた  
びごとに私は躊躇ちゆうちゆうして、口へはとうとう出さずにしまったので

す。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するかわりませんけれども、その代り今までとは方角の違った場所に立って、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出せば出せたのです。しかし私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乗るのは何よりも業腹でした。叔父に欺された私は、これから先どんな事があっても、人には欺されまいと決心したのです。

「私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵えろとい  
いました。私は実際田舎で織った木綿ものしかもっていません  
のです。その頃の学生は絹の入った着物を肌に着けませんでし  
た。私の友達に横浜の商人が何かで、宅はなかなか派出に暮して  
いるものがありました。そこへある時羽二重の胴着が配達で届  
いた事があります。すると皆ながそれを見て笑いました。その男  
は恥ずかしがって色々弁解しましたが、折角の胴着を行李の底へ  
放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄つてたかつ  
て、わざと着せました。すると運悪くその胴着に蝨がたかりまし  
た。友達はちよつと幸いとも思つたのでしよう、評判の胴着を

ぐるぐると丸めて、散歩に出たついでに、根津ねづの大きな泥溝どろぞうの中へ棄すててしまいました。その時いつしよに歩いていた私は、橋の上うへに立たって笑わらいながら友達の所作しよさを眺ながめていましたが、私の胸むねのどこにも勿体もったいないという気は少しも起りませんでした。

その頃ころから見ると私も大分だいぶん大人おとなになっていました。けれどもまだ自分で余所行よそゆきの着物きものを拵とぎえるというほどの分別ぶんべつは出でなかつたのです。私は卒業そつぎょうして髯ひげを生ひやす時代じだいが来きなければ、服装ふくそうの心配しんぱいなどはするに及およばないものだという変へんな考えかえをもっていたのです。それで奥おくさんに書物しよぶつは要いるが着物きものは要いらないといいました。奥おくさんは私の買かう書物しよぶつの分量ぶんりやうを知しっていました。買かった本ほんをみんな読よ

むのかと聞くのです。私の買うものの中うちには字引きもありませんが、当然眼を通すべきはずでありながら、頁ページさえ切っていないのも多少あったのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだという事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実もとの下に、お嬢さんの気に入るような帯たんものか反物を買ってやりたかったのです。それで万事を奥さんに依頼しました。

奥さんは自分一人で行くとはいいません。私にもいっしょに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないというのです。今と違った空気の中に育てられた私どもは、学生の身分と

して、あまり若い女などといっしよに歩き廻る習慣をもっていないな  
かったものです。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたか  
ら、多少躊躇ちゆうちゆうしましたが、思い切つて出掛けました。

お嬢さんは大層着飾っていました。地体じたいが色の白いくせに、白  
粉ろいを豊富に塗ったものだからなお目立ちます。往来の人がじろじ  
ろ見てゆくのです。そうしてお嬢さんを見たものはきつとその視  
線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋にほんばしへ行つて買いたいものを買いました。買う間にも  
色々気が変わるので、思ったより暇ひまがかかりました。奥さんはわざ  
わざ私の名を呼んでどうだろうと相談をするのです。時々反物たんものを

お嬢さんの肩から胸へ豎たてに宛あてておいて、私に二、三步遠退とおのいて見てくれるというのです。私はそのたびごとに、それは駄目だめだとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前の口を聞きました。

こんな事で時間が掛かって帰りは夕飯ゆうめしの時刻になりました。奥さんは私に対するお礼に何かご馳走ちそうするといつて、木原店きはらだなという寄席せのある狭い横丁よこぢょうへ私を連れ込みました。横丁も狭いが、飯を食わせる家うちも狭いものでした。この辺へんの地理ちりを一向心得いっこうこころない私は、奥さんの知識に驚いたくらいです。

我々は夜よに入いって家うちへ帰りました。その翌日あくるひは日曜でしたから、私は終日室へやの中うちに閉じ籠こもっていました。月曜になって、学校

へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から調戯からかわれました。いつ妻さいを迎えたのかと行ってわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君さいくんは非常に美人だといって賞めるほのです。私は三人連づれで日本橋へ出掛けたところを、その男にどこかで見られたものとみえます。

## 十八

「私は宅うちへ帰って奥さんとお嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。しかし定めて迷惑だろうと行って私の顔を見まし

た。私はその時腹のなかで、男はこんな風ふうにして、女から気を引いて見られるのかと思いました。奥さんの眼は充分私にそう思わせるだけの意味をもっていたのです。私はその時自分の考えている通りを直截ちよくせつに打ち明けてしまえば好かったかも知れません。しかし私にはもう狐疑こぎという薩張さっぱりしない塊かたまりがこびり付いていました。私は打ち明けようとして、ひよいと留とまりました。そうして話の角度を故意に少し外そらしました。

私は肝心かんじんの自分というものを問題の中から引き抜いてしまいました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探ったのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、

明らかに私に告げました。しかしまだ学校へ出ているくらいで年が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しました。奥さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色に大分重きを置いているらしく見えました。極めようと思えばいつでも極められるんだからというような事さえ口外しました。それからお嬢さんより外ほかに子供がないのも、容易に手離れたがらない原因げんいんになっていました。嫁にやるか、聾むこを取るか、それにさえ迷っているのではなかろうかと思われるところもありました。

話しているうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。しかしそれがために、私は機会を逸いっしたと同様の結

果に陥おちいってしまいました。私は自分について、ついに一言も口を開く事ができませんでした。私は好いい加減なところで話を切り上げて、自分の室へやへ帰ろうとしました。

さつきまで傍そばにいて、あんまりだわとか何とかいって笑ったお嬢さんは、いつの間にか向うの隅に行つて、背中をこっちへ向けていました。私は立とうとして振り返つた時、その後姿うしろすがたを見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚を前にして坐すわっていました。その戸棚の一尺しちやくばかり開あいている隙間すきまから、お嬢さんは何か引き出して膝ひざの

上へ置いて眺<sup>なが</sup>めているらしいかったです。私の眼はその隙間の端<sup>はじ</sup>に、一昨日<sup>おととい</sup>買った反物<sup>たんもの</sup>を見付け出しました。私の着物もお嬢さんののも同じ戸棚の隅に重ねてあったのです。

私が何ともいわずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になって、私にどう思うかと聞くのです。その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ解<sup>わか</sup>らないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判然<sup>はつきり</sup>した時、私はなるべく緩<sup>ゆっ</sup>くならな方がいいたろうと答えました。奥さんは自分もそう思うといいました。

奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなっている所へ、もう一人

男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家庭の一員となった結果は、私の運命に非常な変化を来きたしています。もしその男が私の生活の行路こうろを横切らなかつたならば、おそらくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立って、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅うちへ引張ひっぱって来たのです。無論奥さんの許諾きょだくも必要ですから、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。ところが奥さんは止よせといいました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せという奥さ

んの方には、筋の立った理屈はまるでなかったのです。だから私は私の善いと思うところを強いて断行してしまいました。

## 十九

「私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供こどもの時からなかよしの仲好でした。小供の時からといえは断らないでも解っているでしょう、二人には同郷の縁故があつたのです。Kは真宗しんしゅうの坊さんの子でした。もつとも長男ではありません、次男でした。それである医者いしやの所へ養子にやられたのです。私の生れた

地方は大変本願寺派の勢力の強い所でしたから、真宗の坊さんは他のものに比べると、物質的に割が好かったです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年頃になつたとすると、檀家のものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやつてくれます。無論費用は坊さんの懐から出るものではありません。そんな訳で真宗寺は大抵有福でした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まつたものかどうか、そこも私には分りません。とにかくKは医者の家へ養子に

行ったのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に変わっていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰って東京へ出て来たのです。出て来たのは私といっしょでなかったけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。その時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にいました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合いながら、外を睨めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでいて六畳の間の中で

は、天下を睥睨するような事をいつていたのです。

しかし我々は真面目でした。我々は実際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かったです。寺に生れた彼は、常に精進という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬していました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、すなわち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか、解りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遙か

に坊さんらしい性格をもっていたように見受けられます。元来Kの養家ようかでは彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母を欺あやむくと同じ事ではないかと詰なりました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、そのくらいの事をして構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、おそらく彼にもよく解っていなかつたでしょう。私は無論解つたとはいえません。しかし年の若い私たちには、この漠然ぼくぜんとした言葉が尊たつとく響いたので。よし解らないにしても気高けだかい心持に支配されて、そちらの方へ動いて行こうと

する意気組いきぐみに卑いやしいところの見えるはずはありません。私はKの  
説に賛成しました。私の同意がKにとってどのくらい有力であつ  
たか、それは私も知りません。一いち函ちずな彼は、たとい私がいくら反  
対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違いなかつたと  
は察せられます。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、  
多少の責任ができてくるぐらいの事は、子供ながら私はよく承知  
していたつもりです。よしその時にそれだけの覚悟がないにして  
も、成人した眼で、過去を振り返る必要が起つた場合には、私に  
割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至しとう当になるく  
らいな語気で私は賛成したのです。

「Kと私わたくしは同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくれる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたって構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方ありません。Kは私よりも平気でした。

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込こまごめのある寺の一間まを借りて勉強するのだといっていました。私が帰って来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大観音おおがんのんの傍そばの汚い寺の中に閉じと

籠こもっていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室へやでしたが、彼はそこで自分の思う通りに勉強ができたのを喜んでいるらしく見えませんでした。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなっていくのを認めたように思います。彼は手頸てくびに珠数じゆずを懸けていました。私  
がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定する真似まねをして見せました。彼はこうして日に何遍なんべんも珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解わかりません。円い輪になっているものを一粒ずつ数えてゆけば、どこまで数えていっても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪つま繰ぐる手を留めたでしょう。詰つまらない事ですが、私はよくそれを

思うのです。

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経きんじょうの名を度々たびたび彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教キリストきょうについては、問われた事も答えられた例ためしもなかったのですから、ちよつと驚きませんでした。私はその理由わけを訊ねたずずにはいられませんでした。Kは理由はないといいました。これほど人の有難ありがたがる書物なら読んでみるのが当り前だろうともいいました。その上彼は機会があつたら、『コーラン』も読んでみるつもりだといいました。彼はモハメツドと剣という言葉に大いなる興味をもっているようでした。

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。

帰っても専門の事は何にもいわなかったものとみえます。家<sup>うち</sup>でもまたそこに気が付かなかったのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一向<sup>さうじゆう</sup>外部へは通じていません。我々はまた比較的内部の空気ばかり吸っているので、校内の事は細大とも世の中に知れ渡っているはずだと思いき過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていたのでしよう、澄ました顔でまた戻って来ました。国を立つ時は私もいっしょでしたから、汽車へ乗るや否<sup>いな</sup>やすぐどうだったとKに問いました。Kは

どうでもなかったと答えたのです。

三度目の夏はちょうど私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎年家へ帰って何をするのだというのです。彼はまた踏み留まって勉強するつもりらしかったのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとって、いかに波瀾に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱と孤独の淋しさを一つ胸に抱いて、九月に入ってからまたKに逢いました。すると彼の運命もまた私と同様に変調を示していました。彼

は私の知らないうちに、養家先へ手紙を出して、こっちから自分の詐りを白状してしまったのです。彼は最初からその覚悟でいたのだそうです。今更仕方がないから、お前の好きなものをやるより外に途はあるまいと、向うにいわせるつもりもあつたのでしうか。とにかく大学へ入ってまでも養父母を欺き通す気はなかつたらしいのです。また欺こうとしても、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れません。

「Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙だますような不埒ふらちなものに学資を送る事はできないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私わたくしに見せました。Kはまたそれと前後して実家から受け取った書翰しょかんも見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責きつせきの言葉がありました。養家先ようかさきへ対して済まないという義理が加わっているからでもありません。こっちでも一切構いっさいわないと書いてありました。Kがこの事件のために復籍してしまいか、それとも他たに妥協の道を講じて、依然養家に留とどまるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしなければならぬのは、月々に必要な学資でした。

私はその点についてKに何か考えがあるのかと尋ねました。Kは夜学校の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど払底でもなかったのです。私はKがそれで充分やって行けるだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背いて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかといって手を拱いでいる訳にゆきません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一も二もなくそれを跳ね付けました。彼の性格からいって、自活の方が友達の保護の下に立つより遙に快よく思

われたのでしよう。彼は大学へはいった以上、自分一人ぐらいどうかできなければ男でないような事をいいました。私は私の責任を完<sup>ま</sup>うするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。

Kは自分の望むような口をほどなく探し出しました。しかし時間を惜<sup>お</sup>しむ彼にとって、この仕事がどのくらい辛<sup>つら</sup>かったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩<sup>ゆる</sup>めずに、新しい荷を背負<sup>し</sup>って猛進したのです。私は彼の健康を気遣<sup>きづか</sup>いました。しかし剛<sup>ごう</sup>気な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡がらがって来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛末てんまつを詳しく聞かずにしまいました。解決のますます困難になってゆく事だけは承知していましたが、人が入って調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促うながしたのですが、Kは到底駄目だめだといって、応じませんでした。この剛情きょうじょうなところが、——Kは学年中で帰れないのだから仕方がないといいましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒りいかも買うようになりまし

た。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効果ききめもありませんでした。私の手紙は一言の返事ひとことさえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ちました。今までも行掛ゆきがかり上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外に置いてもKの味方をする気になりました。

最後にKはとうとう復籍に決しました。養家から出してもらった学資は、実家で弁償する事になったのです。その代り実家の方でも構わないから、これからは勝手にしろということです。昔の言葉でいえば、まあ勘当かんどうなのでしょう。あるいはそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。K

は母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母けいぼに育てられた結果とも見る事ができるようです。もし彼の実の母が生きていたら、あるいは彼と実家との関係に、こうまで隔へだたりができずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父はいうまでもなく僧侶そうりよでした。けれども義理堅い点において、むしろ武士さむらいに似たところがありはしないかと疑われます。

## 二十二

「Kの事件が一段落ついた後あとで、私は彼の姉の夫から長い封書を

受け取りました。Kの養子に行った先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。

手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく早く返事を貰いたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣いだ兄よりも、他家へ縁づいたこの姉を好いていました。彼らはみんな一つ腹から生れた姉弟ですけれども、この姉とKとの間には大分年齒の差があつたのです。それでKの小供の時分には、継母よりもこの姉の

方が、かえって本当の母らしく見えたのでしよう。

私はKに手紙を見せました。Kは何ともいいませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けました。Kはそのたびに心配するに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があっても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかったのです。

私はKと同じような返事を彼の義兄宛あてで出しました。その中うちに、万一の場合には私がどうでもするから、安心するようという意味を強い言葉で書き現あらわしました。これは固もとより私の一存いちぞんで

した。Kの行先を心配するこの姉に安心を与えようという好意は無論含まれていましたが、私を軽蔑したとより外に取りようのない彼の实家や養家に対する意地もあつたのです。

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になるまで、約一年半の間、彼は独力で己れを支えていったのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅い問題も手伝っていたでしょう。彼は段々感傷的になつて来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負って立っているような事をいいます。そうしてそれを打ち消せ

ばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たわる光明が、次第に彼の眼を遠退とおのいて行くようにも思っって、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもっって、新しい旅に上のほるのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍のろいのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になっていますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮あせり方はまた普通に比べると遙はるかに甚はなはだしかったです。私はついに彼の気分を落ち付けるのが専一せんいちだと考えました。

私は彼に向って、余計な仕事をするのは止よせといいました。そ

うして当分身体からだを楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情こわいこころなKの事ですから、容易に私のいう事などは聞くまいと、かねて予期していたのですが、実際いい出して見ると、思ったよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養って強い人になるのが自分の考えだということです。それにはなるべく窮屈な境遇にいたくなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔興すいこうです。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちっとも強くなっていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹かかっているくらいなのです。私は仕方がないから、彼に向って

至極しごく同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向って、人生を進むつもりだったとついには明言しました。（もつともこれは私に取ってまんざら空虚な言葉でもなかったのです。Kの説を聞いていると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから）。最後に私はKといっしょに住んで、いっしょに向上の路みちを辿たどって行きたいと発議ほつぎしました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪ひざまずく事をあえてしたのです。そうして漸やっとの事で彼を私の家に連れて来ました。

「私の座敷には控えの間まというような四畳が付属していました。玄関を上がって私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだから、実用の点から見ると、至極しごく不便な室へやでした。私はここへKを入れたのです。もっとも最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったのですが、Kは狭苦しくっても一人でいる方が好いいといって、自分でそっちのほうを択えらんだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛

成だったのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止よした方が好いいというのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいというと、世話は焼けないでも、気心の知れない人は厭いやだと答えるのです。それでは今厄介やっかいになっている私だって同じ事ではないかと詰なると、私の気心は初めからよく分つていると弁解して已やまないのです。私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更かえます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止よせといい直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。

実をいうと私だって強しいてKといっしょにいる必要はなかったのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時に躊躇ちゆうちゆうするだろうと思ったのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅うちへ置いて、二人前ふたりまえの食料を彼の知らない間まにそつと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言いちごんも奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云々うんぬんしました。一人で置くとますます人間が偏屈へんくつになるばかりだからといいました。それに付け足して、Kが養家ようかと折合おりあいの悪かった事や、実家と離れてしまった事

や、色々話して聞かせました。私は溺れおぼかかった人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであたたかい面倒を見てやってくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々ようよう奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末てんまつをまるで知らずにいました。私もかえってそれを満足に思っ、のっそり引き移って来たKを、知らん顔で迎えました。

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かなにをしてくれました。すべてそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変わらずむっちり

した様子をしているにもかかわらず。

私がKに向って新しい住居すまいの心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一言いちげん悪くないとたったただけでした。私からいわせれば悪くないどころではないのです。彼の今までいた所は北向きの湿っぽい臭いにおのする汚い室へやでした。食物くいものも室相応そうおうに粗末そまつでした。私の家へ引き移った彼は、幽谷ゆうこくから喬木きやうぼくに移った趣おもむきがあつたくらいです。それをさほどに思う気色けしきを見せないのは、一つは彼の強情きやうじやうから来ているのですが、一つは彼の主張しやうけんからも出ているのです。仏教の教義で養われた彼は、衣食住いしょくじゆについてとかくの贅沢ぜいたくをいうのをあたかも不道德ふとうとくのように考えていました。なまじい昔の高僧こうそうだとか

聖徒セイントだとかの伝でんを読んだ彼には、ややともすると精神と肉体とを切り離れたがる癖がありました。肉を鞭撻べんたつすれば霊の光輝が増すように感ずる場合さえあったのかも知れません。

私はなるべく彼に逆さからわない方針を取りました。私は氷を日向ひなたへ出して溶とかす工夫をしたのです。今に融とけて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思ったのです。

「私は奥さんからそういう風ふうに取り扱あつかわれた結果、段々快活くわくたつになつて来たのです。それを自覚じかくしていたから、同じものを今度はKの上に応用おうようしようとして試しみたのです。Kと私とが性格せいかくの上において、大分相違だいぶんさいちのある事は、長く交際つきあつて来た私によく解わかつていましたけれども、私の神経しんけいがこの家庭かていに入いつてから多少角かどが取とれたごとく、Kの心もここに置おけばいつか沈しずまる事があるだろうと考かんえたのです。

Kは私より強い決心けつしんを有あしている男おとこでした。勉強べんきやうも私の倍ばいぐらいはしたでしょう。その上持もつて生なれた頭あたまの質たちが私よりもずっとよかつたのです。後あとでは専門せんもんが違ちがいましたから何なにともいえません

が、同じ級にいる間は、あいた中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしててもKに及ばないという自覚があったくらいです。けれども私が強しいてKを私の宅うちへ引ひつ張ばって来た時には、私の方がよく事理を弁わままえていると信じていました。私にいわせると、彼は我慢と忍耐の区別を了解していません。私に思われたのです。これはとくにあなたのために付け足しておきたいのですから聞いて下さい。肉体なり精神なりすべて我々の能力は、外部の刺戟しげきで、発達もするし、破壊されもするでしょうが、どっちにしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に陰悪な方向へむいて進ん

で行きながら、自分はもちろん傍はたのものも気が付かずにいる恐れが生じてきます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥かゆばかり食っていると、それ以上の堅いものを消化こなす力がいつの間になくなってしまふのだそうです。だから何でも食う稽古けいこをしておくと医者はいうのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなかるうと思います。次第に刺戟を増すに従って、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味でなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじり弱って行つたなら結果はどうなるだらうと想像してみればすぐ解わかる事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに気が付いて

いなかっただのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいとその困難は何でもなくなるものだと極めていたらしいのです。艱苦かんくを繰り返せば、繰り返すというだけの功德くどくで、その艱苦が気にかからなくなる時機に邂逅めぐりあえるものと信じ切っていたらしいのです。

私はKを説くときに、ぜひそこを明らかにしてやりたかったのです。しかしいえばきつと反抗されるに極きまっていました。また昔の人の例などを、引合ひきあいに持って来るに違いないと思いました。そうなれば私だって、その人たちとKと違っている点を明白に述べなければならなくなります。それを首肯うけがってくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこまでゆくと容

易に後<sup>あと</sup>へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛<sup>か</sup>ります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつつ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気性<sup>きしょう</sup>をよく知った私<sup>わたし</sup>はついに何ともいう事ができなかつたのです。その上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹<sup>か</sup>っていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたところで、彼は必ず激するに違いないのです。私は彼と喧嘩<sup>けんか</sup>をする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の

感に堪えなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取って忍びない事でした。一歩進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭いやでした。それで私は彼が宅うちへ引き移ってから、当分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。

## 二十五

「私は蔭かげへ廻まわって、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をする

ように頼みました。私は彼のこれまで通って来た無言生活が彼に崇たつているのだらうと信じたからです。使わない鉄が腐るようたに、彼の心には錆さびが出ていたとしか、私には思われなかったのです。

奥さんは取り付き把はのない人だといって笑っていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持って来きようという、要いらないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、寒いけれども要らないんだといったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にもゆきません。気

の毒だから、何とかいってその場を取り繕つくろっておかなければ済ま  
なくあります。もっともそれは春の事ですから、強しいて火にあた  
る必要もなかったのですが、これでは取り付き把がないといわれ  
るのも無理はないと思いました。

それで私はなるべく、自分が中心になって、女二人とKとの連  
絡をはかるように力つとめました。Kと私が話している所へ家うちの人を  
呼ぶとか、または家の人と私が一つ室へやに落ち合った所へ、Kを  
引っ張り出すとか、どっちでもその場合に応じた方法をとって、  
彼らを接近させようとしたのです。もちろんKはそれをあまり好  
みませんでした。ある時はふいと起たって室の外へ出ました。また

ある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話むだばなしをしてどこが面白いというのです。私はただ笑っていました。しかし心の中うちでは、Kがそのために私を軽蔑けいべつしていることがよく解わかりました。

私はある意味から見て実際彼の軽蔑あたいに価あたいしていたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遙はるかに高いところにあつたともいわれるでしょう。私もそれを否いなみはしません。しかし眼だけ高くつて、外ほかが釣り合あわないのは手もなく不具かたわです。私は何を措おいても、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像イメージで埋うづまっても、彼自身が偉くなつて

ゆかない以上は、何の役にも立たないという事を発見したので  
す。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍そばに  
彼を坐すわらせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空気に  
彼を曝さらした上、錆さびび付きかかった彼の血液を新しくしようと試み  
たのです。

この試みは次第に成功しました。初めのうち融合しにくいよう  
に見えたものが、段々一つに纏まとまって来出きだしました。彼は自分以  
外に世界のある事を少しずつ悟ってゆくようでした。彼はある日  
私に向って、女はそう軽蔑けいべつすべきものでないというような事をい  
いました。Kははじめ女からも、私同様の知識と学問を要求して

いたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ軽蔑の念を生じたものと思われれます。今までの彼は、性によって立場を変え、事を知らずに、同じ視線ですべての男女なんによを一様に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうといいました。彼はもつともだと答えました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になっている頃ころでしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一口ひとくちも打ち明けませんでした。

今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠こもっていたようなK

の心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私に取って何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的で事をやり出したのですから、自分の成功に伴う喜びを感じずにはいられなかったのです。私は本人にいわない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思った通りを話しました。二人も満足の様子でした。

## 二十六

「Kと私は同じ科わたくしにおりながら、専攻の学問が違っていましたが、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早けれ

ば、ただ彼の空室くうしつを通り抜けるだけですが、遅いと簡単な挨拶あいさつをして自分の部屋へはいるのを例にしていました。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖ふすまを開ける私をちよっと見ます。そうしてきつと今帰ったのかと聞いています。私は何も答えないで點頭うなずく事もありますし、あるいはただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあります。

ある日私は神田かんだに用があつて、帰りがいつもよりずっと後おくれました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子こうしをがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥たしかにKの室へやから出たと思ひました。玄関まっすぐから真直まっすぐに行けば、茶の間、お

嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取まどりなので、どこで誰の声がしたくらいは、久しく厄介やっかいになっていて私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已やみました。私が靴を脱いでいるうち、——私はその時分からハイカラで手数てかずのかかる編上あみあげを穿はいていたのですが、——私がごんでその靴紐くつひもを解いているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思いました。ことによると、私の疝違かんちがいかも知れないと考えたのです。しかし私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちゃんと坐すわっていました。Kは例の通り今

帰ったかといいました。お嬢さんも「お帰り」と坐ったままで挨拶しました。私には気のせいかその簡単な挨拶が少し硬いように聞こえました。どこかで自然を踏み外しているような調子として、私の鼓膜こまくに響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。

奥さんははたして留守でした。下女げじよも奥さんといっしょに出たのでした。だから家うちに残っているのは、Kとお嬢さんだけだったのです。私はちよつと首を傾けました。今まで長い間世話になっていたけれども、奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、

宅うちを空けた例ためしはまだなかつたのですから。私は何か急用でもでき  
たのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑っている  
のです。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点  
だといえればそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事に  
よく笑いたがる女でした。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、す  
ぐふだん不断の表情に帰りました。急用ではないが、ちよつと用があつ  
て出たのだと真面目まじめに答えました。下宿人の私にはそれ以上問い  
詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も  
帰って来ました。やがて晩食ばんめしの食卓でみんなが顔を合わせる時刻

が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、食事のたびに下女が膳ぜんを運んで来てくれたのですが、それがいつの間にか崩れて、飯時めしどきには向うへ呼ばれて行く習慣になっていたのです。Kが新しく引き移った時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極きめました。その代り私は薄い板で造った足の畳たたみ込める華奢きゃしゃな食卓を奥さんに寄附きふしました。今ではどこの宅うちでも使っているようですが、その頃ころそんな卓の周囲に並んで飯を食う家族はほとんどなかったのです。私はわざわざ御茶おちゃの水みずの家具屋へ行って、私の工夫通りにそれを造り上げあさせたのです。

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻さかなやに肴屋さかなやが来な

かったので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかったのだという説明を聞かされました。なるほど客を置いていける以上、それももつともな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱しかられてすぐ已やめました。

## 二十七

「一週間ばかりして私わたくしはまたKとお嬢さんがいつしよに話している室へやを通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否いなや笑

い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかったです。しょう。それをつい黙って自分の居間まで来てしまったのです。だからKもいつものように、今帰ったかと声を掛ける事ができなくなりました。お嬢さんはすぐ障子しょうじを開けて茶の間へ入ったようでした。

夕飯ゆうめしの時、お嬢さんは私を変な人だといいました。私はその時  
もなぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨にらめるよう  
な眼をお嬢さんに向けるのに気が付いただけでした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院でんずういんの裏手から  
植物園の通りをぐるりと廻まわってまた富坂とみざかの下へ出ました。散歩と

しては短い方ではありませんでしたが、その間に話した事は極めて  
あいだ  
て少なかつたのです。性質からいうと、Kは私よりも無口な男で  
した。私も多弁な方ではなかつたのです。しかし私は歩きなが  
ら、できるだけ話を彼に仕掛けてみました。私の問題はおもに二  
し  
か  
人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを  
彼がどう見ているか知りたかつたのです。ところが彼は海のもの  
とも山のものとも見分けの付かないような返事ばかりするので  
す。しかもその返事は要領を得ないくせに、極めて簡単でした。  
彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を  
払っているように見えました。もっともそれは二学年目の試験が

目の前に逼せまっている頃ころでしたから、普通の人間の立場から見ても、彼の方が学生らしい学生だったのでしよう。その上彼はシュエデ  
ンボルグがどうだとかこうだとかいって、無学な私を驚かせまし  
た。

我々が首尾よく試験を済ませました時、二人とももう後あと一年だ  
とって奥さんは喜んでくれました。そういう奥さんの唯一ゆいいつの誇ほこ  
りとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になっていた  
のです。Kは私に向って、女というものは何にも知らないで学校  
を出るのだといいました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古けいこしてい  
る縫針ぬいはりだの琴だの活花いけばなだのを、まるで眼中に置いていないようで

した。私は彼の迂闊うかつを笑ってやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁はんぱくもしませんでした。その代りなるほどという様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんといったような調子が、依然として女を軽蔑けいべつしているように見えたからです。女の代表者として私の知っているお嬢さんを、物の数かずとも思っていないらしかったからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬しつとは、その時にもう充分萌きざしていたのです。

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振くちぶりを見せました。無論彼は自分の自由意志でど

こへも行ける身体からだではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行っても差支さしつかえない身体だったのです。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないというのです。宅うちで書物を読んだ方が自分の勝手だというのです。私が避暑地へ行って涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行ったらよかろうというのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はたださえKと宅のものが段々親しくなっ行って行くのを見ているのが、余り好いい心持ではなかったのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかといわれればそれまでです。私

は馬鹿に違いないのです。果<sup>はて</sup>しのつかない二人の議論を見るに見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はとうとういっしょに房州<sup>ぼうしゅう</sup>へ行く事になりました。

## 二十八

「Kはあまり旅へ出ない男でした。私<sup>わたくし</sup>にも房州<sup>ぼうしゅう</sup>は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田<sup>ほた</sup>とかいいました。今ではどんなに変わっているかわりませんが、その頃<sup>ころ</sup>はひどい漁村でした。第一<sup>だいち</sup>どこもかしこも

腥なまぐせいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦すり剥むくのです。拳こぶしのような大きな石が打ち寄せる波に揉もまれて、始終ごろごろしているのです。

私はすぐ厭いやになりました。しかしKは好いいとも悪いいともいいません。少なくとも顔付かおつきだけは平気なものでした。そのくせ彼は海へ入るたんびにどこかに怪け我がをしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦とみうらに行きました。富浦からまた那古なこに移りました。すべてこの沿岸はその時分から重おもに学生おもの集まる所でしたから、どこでも我々にはちょうど手頃てごろの海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐すわって、遠い海の

色や、近い水の底を眺めました。岩の上から見下す水は、また特別に綺麗なものでした。赤い色だの藍の色だの、普通市場に上らないような色をした小魚が、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。

私はそこに坐って、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙っている方が多かったです。私にはそれが考えに耽っているのか、景色に見惚れているのか、もしくは好きな想像を描いているのか、全く解らなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしていないと一口答えるだけでした。私は自分の傍にこうじつとして坐っているものが、

Kでなくって、お嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いて岩の上に坐っているのではないかしらと忽然疑い出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭になります。私は不意に立ち上ります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴ります。纏まった詩だの歌だのを面白そうに吟ずるような手緩い事はできないのです。ただ野蛮人のごとくにわめくのです。ある時私は突然彼の襟頸を後ろからぐいと攫みしました。こうして海の中へ突き落したらどうするといつてKに聞きました。Kは動きませんでした。後ろ向きのまま

ま、ちようど好いい、やってくれと答えました。私はすぐ首筋おきを抑えた手を放しました。

Kの神経衰弱はこの時もう大分だいぶよくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏になって来ていたのです。私は自分より落ち付おちいているKを見て、羨やいましがりました。また憎らにくましがりました。彼はどうしても私に取り合あう気色けしきを見せなかつたからです。私にはそれが一種の自信のごとく映うつりました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足できなかつたのです。私の疑うたがいはもう一歩前へ出て、その性質あきを明あらめたがりありました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで

行くべき前途の光明こうみやうを再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私との利害に何の衝突の起る訳はないのです。私はかえって世話のし甲斐ががあつたのを嬉うれしく思うくらいなものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとすれば、私は決して彼を許す事ができなくなるのです。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛そしている素振そぶりに全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけると鈍にぶい人なのです。私には最初からKなら大丈夫という安心があつたので、彼をわざわざ宅うちへ連れて来たのです。

「私は思い切って自分の心をKに打ち明けようと思いました。もつともこれはその時に始まった訳でもなかったのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹ができていたのですけれども、打ち明ける機会をつらまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際<sup>てぎわ</sup>では旨<sup>うま</sup>くゆかなかったのです。今から思うと、その頃私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入った話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種<sup>たね</sup>をもたないのも大分<sup>ぶぶん</sup>いたでしょうが、たといもっていても黙っているのが普通のよ

うでした。比較的自由な空気を呼吸している今のあなたがたから見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学どうがくの余習よしゅうなのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せておきます。

Kと私は何でも話し合える中でした。偶たまには愛とか恋とかいう問題も、口のぼに上らないではありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまっただけでした。それも滅多めったには話題にならなかったのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切っていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなった日には、突然調子を崩くずせるものではありません

ん。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢さんの事をKに打ち明けようと思いついてから、何遍齒なんべんがゆい不快に悩まされたか知れません。私はKの頭のどこか一カ所を突き破つて、そこから柔らかい空気を吹き込んでやりたい気がしました。

あなたがたから見て笑止千万しょうしせんばんな事もその時の私には実際大困難だったのです。私は旅先でも宅うちにいた時と同じように卑怯ひきようでした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事もできなかつたのです。私にいわせると、彼の心臓の周囲は黒い漆うるしで重あつく塗り固められたのも同然でした。私の注そそぎ懸けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入

らないで、悉く弾き返されてしまうのです。

或る時はあまりKの様子が強くて高いので、私はかえって安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫びました。詫びながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭な心持になるのです。しかし少時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるように見えました。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入るだろうと思われました。どこか間が抜けていて、それでどこか

に確<sup>しつ</sup>かりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えませんでした。学力<sup>がくりき</sup>になれば専門こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと自覚していました。——すべて向うの好<sup>い</sup>いところだけがこう一度に眼先<sup>めさき</sup>へ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭<sup>いや</sup>ならひとまず東京へ帰つてもいいといったのですが、そういわれると、私は急に帰りたくなくなりました。実はKを東京へ帰したくなかったのかも知れませんが。二人は房州<sup>ぼうしゅう</sup>の鼻を廻<sup>まわ</sup>って向う側へ出ました。我々は暑い日に射<sup>い</sup>られながら、苦しい思いをして、上総<sup>かずさ</sup>のそこ一里<sup>いちり</sup>に騙<sup>だま</sup>されな

がら、うんうん歩きました。私にはそうして歩いている意味がまるで解らなかつたくらいです。私は冗談半分Kにそういいました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入っ行って行こうと行って、どこでも構わず潮へ漬りました。その後をまた強い日で照り付けられるのですから、身体が倦怠くてぐたぐたになりました。

### 三十

「こんな風にして歩いていると、暑さと疲労とで自然身体の調子

が狂って来るものです。もつとも病氣とは違います。急に他の身体の中へ、自分の靈魂が宿替やどがえをしたような気分になるのです。私は平生へいせいの通りKと口を利ききながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中りょちゆう限りという特別な性質を帯おびる風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮しおのため、また歩行のため、在来と異なった新しい関係に入る事ができたのでしよう。その時の我々はあたかも道づれになった行商ぎやうのようなものでした。いくら話をしてもいつもと違って、頭を使う込み入った問題には触れませんでした。

我々はこの調子でとうとう銚子ちやうしまで行ったのですが、道中たつ

た一つの例外があつたのを今に忘れる事ができないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊こみなとという所で、鯛たいの浦うらを見物しました。もう年数ねんすうもよほど経たっていますし、それに私にはそれほど興味のない事ですから、判然はんぜんとは覚えていませんが、何でもそこは日蓮にちれんの生れた村だとかいう話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯びいそに打ち上げられていたとかいう言伝いいつたえになつて居るのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山いるのです。我々は小舟やとを傭やとつて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図いちずに波を見ていました。そうしてその波の中

に動く少し紫がかった鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかったものとみえます。彼は鯛よりもかえって日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。ちようどそこに誕生寺たんじようじという寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽藍がらんでした。Kはその寺に行つて住持じゆうじに会つてみるといい出しました。実をいうと、我々はずいぶん変な服装なりをしていたのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠すげがさを買つて被かぶっていました。着物もとは固もとより双方とも垢あかじみた上に汗あせで臭くさくなっていました。私は坊さんなどに会うのは止よそ

うといたしました。Kは強情くわうじやうだから聞きません。厭いやなら私だけ外に待っているというのです。私は仕方がないからいつしよに玄関にかかりましたが、心のうちではきつと断られるに違いないと思っ  
ていました。ところが坊さんというものは案外丁寧ていねいなもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会ってくれました。その時分の私はKと大分だいぶん考えが違っていましたから、坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起りませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮そうにちれんといわれるくらいで、草書そうしょが大変上手であったと坊さんがいった時、字の拙あやいKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。K

はそんな事よりも、もっと深い意味の日蓮が知りたかったのでしよう。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内けいだいを出ると、しきりに私に向って日蓮の事を云々うんぬんし出しました。私は暑くて草臥くたびれて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好いい加減な挨拶あいさつをしていました。それも面倒になってしまいいには全く黙ってしまったのです。

たしかその翌あくる晩の事だと思えますが、二人は宿へ着いて飯めしを食って、もう寝ようという少し前になってから、急にむずかしい問題を論じ合い出しました。Kは昨日きのう自分の方から話しかけた日蓮の事について、私に取り合わなかったのを、快く思っていないな

かったのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だといって、何だか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蟠わだかまっていますから、彼の侮蔑むべつに近い言葉をただ笑って受け取る訳にいきません。私は私で弁解を始めたのです。

### 三十一

「その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを

隠しているというのです。なるほど後から考えれば、Kのいう通りでした。しかし人間らしくない意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、しゅったつてん出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが彼のどこをつらまえて人間らしくないというのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。——君は人間らしいのだ。あるいは人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事をいうのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ。

私がこういった時、彼はただ自分の修養が足りないから、他にひと

はそう見えるかも知れないと答えただけで、一向私を反駁しよう  
としませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、かえって  
気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼  
の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り  
昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうとって悵然と  
していました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ  
豪傑でもないのです。霊のために肉を虐げたり、道のために体を  
鞭うったりしたいわゆる難行苦行の人を指すのです。Kは私に、  
彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解らないのが、いかに  
も残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌る日か  
らまた普通の行商の態度に返って、うんうん汗を流しながら歩き  
出したのです。しかし私は路々その晩の事をひよいひよいと思い  
出しました。私にはこの上もない好い機会が与えられたのに、知  
らない振りをしてなぜそれをやり過ぎたのだらうという悔恨の  
念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる  
代りに、もっと直截で簡単な話をKに打ち明けてしまえば好かつ  
たと思い出したのです。実をいうと、私がそんな言葉を創造した  
のも、お嬢さんに対する私の感情が土台になっていたのですか  
ら、事実を蒸溜して拵えた理論などをKの耳に吹き込むよりも、

原の形もとそのまかたちまを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったでしょう。私にそれができなかつたのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自おのから一種の惰性があつたため、思い切つてそれを突き破るだけの勇気が私に欠けていたのだという事をここに自白します。気取り過ぎたといつても、虚栄心が崇たつたといつても同じでしょうが、私のいう気取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の気分がまた變つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう

小理屈はほとんど頭の中に残っていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。おそらく彼の心のどこにも霊がどうの肉がどうのという問題は、その時宿っていなかったでしょう。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺めました。それから両国へ来て、暑いのに軍鶏を食いました。Kはその勢いで小石川まで歩いて帰ろうというのです。体力からいえばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなったばかりでなく、むやみに歩いていたうちに大変

瘠やせてしまったのです。奥さんはそれでも丈夫そうになったと  
いって賞ほめてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしい  
といってまた笑い出しました。旅行前時々腹の立った私も、その  
時だけは愉快な心持がしました。場合が場合なのと、久しぶりに  
聞きいたせいでしよう。

## 三十二

「それのみならず私わたくしはお嬢さんの態度の少し前と変かっているのに  
気が付きました。久しぶりで旅から帰った私たちが平生へいせいの通り落

ち付くまでには、万事について女の手が必要だったのですが、その世話をしてくれる奥さんはとにかく、お嬢さんがすべて私の方を先にして、Kを後廻しあとまわにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかもしれません。場合によってはかえって不快の念さえ起しかねなかったろうと思うのですが、お嬢さんの所作しよさはその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉うれしかったです。つまりお嬢さんは私だけに解わかるように、持前もちまえの親切を余のです。つまりお嬢さんは私だけに解わかるように、持前もちまえの親切を余分に私の方へ割り宛あててくれたのです。だからKは別に厭いやな顔もせずに平気でいました。私は心の中うちでひそかに彼に対する愷歌がいかを奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中頃なかごろから我々はまた学校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自てんでんの時間の都合で出入りの刻限にまた遅速ができてきました。私がKより後おくれて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰ってもお嬢さんの影をKの室へやに認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「今帰ったのか」を規則のごとく繰り返しました。私の会釈もほとんど器械のごとく簡単でかつ無意味でした。たしか十月の中頃と思います。私は寝坊ねぼうをした結果、日本服にほんぶくのまま急いで学校へ出た事があります。穿物はきものも編上あみあげなどを結んでい

る時間が惜しいので、草履ぞうりを突っかけたなり飛び出したのです。

その日は時間割からいうと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっ  
ていました。私は戻って来ると、そのつもりで玄関の格子こうしを  
がらりと開けたのです。するといなと思っていたKの声がひよ  
いと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きまし  
た。私はいつものように手数てかずのかかる靴を穿はいていないから、す  
ぐ玄関に上がって仕切しきりの襖ふすまを開けました。私は例の通り机の前に  
坐すわっているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこにはいな  
かったのです。私はあたかもKの室へやから逃のがれ出るように去るその  
後姿うしろすがたをちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰った  
のかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えまし

た。私が自分の室にはいってそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りといって私に挨拶あいさつをしました。私は笑いながらさつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌さばけた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だったのです。お嬢さんはすぐ座を立えんがわづたって縁側伝えんがわづたいに向うへ行いってしまいました。しかしKの室の前に立ち留とどまって、二言三言内ふたことみことと外とで話をしていました。それは先刻さつきの続きらしかったのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になって来ました。K

と私がいつしよに宅うちにいる時でも、よくKの室へやの縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入って、ゆっくりしていました。無論郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いてゆく事もあるのですから、そのくらいの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬでしょうが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあったくらいです。それならなぜKに宅を出してもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引ひっ

張<sup>ば</sup>って来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれができないのです。

### 三十三

「十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套<sup>わたくし がいとう</sup>を濡<sup>ぬ</sup>らして例の通り蒟蒻<sup>こんやくえんま</sup>閻魔<sup>えんま</sup>を抜けて細い坂路<sup>さかみち</sup>を上<sup>あが</sup>って宅<sup>うち</sup>へ帰りました。Kの室は空虚<sup>がくうつ</sup>でしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳<sup>かざ</sup>そうと思って、急いで自分の室の仕切り<sup>しきり</sup>を開けました。すると私の火鉢には冷た

い灰が白く残っているだけで、火種ひだねさえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙って室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間まからKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰ったのかと聞きましたら、奥さんは帰ってまた出たと答えました。その日もKは私より後おくれて帰る時間割だったのですから、私はどうした訳かと思いました。奥さんは大方用事おおかたでもできたのだらうといっていました。

私はしばらくそこに坐すわったまま書見しょけんをしました。宅たくの中がしんと静しずまって、誰だれの話わし声こゑも聞きこえないうちに、初冬はつふゆの寒ささと佗わびしさとが、私の身体からだに食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと賑にぎやかな所へ行きたくなつたのです。雨はやつと歇あがつたようですが、空はまだ冷たい鉛なのように重く見えたので、私は用心のため、蛇じゃの目を肩かたに担かいで、砲兵工廠ほうへいこうしょうの裏手の土塀どべいについて東へ坂を下おりました。その時分はまだ道路の改正ができない頃ころなので、坂の勾配こうはいが今よりもずっと急でした。道幅も狭くて、ああ真直まっすぐではなかつたのです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞ふさがっているのと、放み

水はきがよくないので、往来はどろどろでした。ことに細い石橋を渡わたって柳町やなぎまちの通りへ出る間が非道ひどだったので。足駄あしだでも長靴でむむやみに歩く訳にはゆきません。誰でも路みちの真中に自然と細長く泥が掻かき分けられた所を、後生ごしょう大事だいじに辿たどって行かなければならないのです。その幅は僅わずか一、二尺しゃくしかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になってそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かずにいたのです。私は不意に自分の前が塞ふさがったので偶然眼を上げ

た時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kはちよつとそこまでといったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替かわせました。するとKのすぐ後ろに一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかつたのですが、Kをやり越あとした後で、その女の顔を見ると、それが宅うちのお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶あいさつをしました。その時分の束髪そくはつは今と違って廂ひさしが出ていないのです、そうして頭の真中まんなかに蛇へびのようにぐるぐる巻きつけてあったものです。私はぼ

んやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どっちか路みちを譲らなければならぬのだという事に気が付きました。私は思い切ってどろどろの中へ片足踏ふん込こみました。そうして比較的通りやすい所を空あけて、お嬢さんを渡してやりました。

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行って好いいか自分にも分らなくなりました。どこへ行っても面白くないような心持がするのです。私は飛は泥ねの上がるのも構わずに、糠ぬかる海みの中を自暴やけにどしどし歩きました。それから直すぐ宅へ帰って来ました。

「私はKに向ってお嬢さんといっしょに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町まさはごちようで偶然出会ったから連れ立って帰って来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりませんでした。しかし食事の時、またお嬢さんに向って、同じ問いを掛けたくまりました。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするので。そうしてどこへ行つたか中あててみるとしまいというのです。その頃ころの私はまだ癩癩かんしゃくも持ちましたから、そう不真面目ふまじめに若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているもののうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。

お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無<sup>む</sup>邪<sup>じや</sup>氣<sup>き</sup>にやるのか、その区別がちよつと判然<sup>はんぜん</sup>しない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方<sup>ほう</sup>でしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくもなかつたのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬<sup>しつと</sup>に歸<sup>き</sup>していいものか、または私に対するお嬢さんの技巧と見倣<sup>みな</sup>してしかるべきものか、ちよつと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面<sup>りめん</sup>にこの感情の働きを明らかに

意識していたのですから。しかも傍はたのものから見ると、ほとんど取るに足りない瑣事さじに、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事よじですが、こういう嫉妬しつとは愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです。

私はそれまで躊躇ちゆうちゆうしていた自分の心を、一思ひとおもいに相手の胸へ擲たたき付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉くれると明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、

一日一日と私は断行の日を延ばして行っただけです。そういうと私はいかにも優柔な男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志の力に不足があったためではありません。Kの来ないうちは、他の手に乗るのが厭だという我慢が私を抑え付けて、一步も動けないようにしていました。Kの来た後は、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。はたしてお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へいい出す価値のないものと私は決心していたのです。恥を掻かせられるのが辛いなどというのとは少し訳が違います。こっちで

いくら思っても、向うが内心ほか他の人に愛の眼まなこを注そそいでいるならば、私はそんな女といっしょになるのは厭いやなのです。世の中では否いやおう応なしに自分の好いた女を嫁に貰もらって嬉うれしがっている人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑のみ込めない鈍物どんぶつのする事と、当時の私は考えていたのです。一度貰もらってしまえばどうかこうか落ち付くものだらりの哲理では、承知する事ができないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時にもっとも迂遠うえんな愛の実際家だったのです。

肝心かんじんのお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会

も、長くいつしよにいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかりが私を束縛したとはいえません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せずに口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。

「こんな訳で私はどちらの方面へ向つても進む事ができずに立ち竦んでいました。身体の悪い時に午睡などをすると、眼だけ覚めて周囲のものが判然見えるのに、どうしても手足の動かせない場合がありました。私は時としてああいう苦しみを人知れず感じたのです。

その内年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多をやるから誰か友達を連れて来ないかといった事があります。するとKはすぐ友達なぞは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往来で会った時挨拶をするくらいのもものは多少あ

りましたが、それらだつて決して歌留多かるとなどを取る柄がらではなかつたのです。奥さんはそれじゃ私の知つたものでも呼んで来たらどうかといひ直しましたが、私も生憎あいにくそんな陽気な遊びをする心持になれないので、好いい加減な生返事なまへんじをしたなり、打ちやっておきました。ところが晩になつてKと私はとうとうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないので、内々うちうちの小人こじん数かずだけ取ろうという歌留多ですからすこぶる静かなものでした。その上こういう遊技をやり付けないKは、まるで懐手ふところをしている人と同様でした。私はKに一体百人一首ひゃくにんいっしゆの歌を知っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと答えました。私の言葉を聞いたお

嬢さんは、大方Kを軽蔑おおかた けいべつするとでも取ったのでしよう。それから眼に立つようにKの加勢をし出しました。しまいには二人がほとんど組になって私に当るといふ有様になって来ました。私は相手次第では喧嘩けんかを始めたかも知れなかったのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかった私は、無事にその場を切り上げる事ができました。

それから二、三日経たった後の事のちでしたらう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ行くといつて宅うちを出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃ころでしたから、留守居同様あとに

残っていました。私は書物を読むのも散歩に出るのも厭いやだったの  
で、ただ漠然と火鉢の縁ふちに肱ひじを載せて凝じつと顚あごを支えたなり考えて  
いました。隣となりの室へやにいるKも一向音いっこうを立てませんでした。双方と  
もいるのだからかいないのだから分らないくらい静かでした。もつとも  
こういう事は、二人の間柄として別に珍しくも何ともなかつたの  
ですから、私は別段それを気にも留めませんでした。

十時頃になって、Kは不意に仕切りの襖ふすまを開けて私と顔を見合みあわ  
せました。彼は敷居の上に立ったまま、私に何を考えていると聞  
きました。私はもとより何も考えていなかっただけです。もし考え  
ていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だったかも知れま

せん。そのお嬢さんには無論奥さんも食っ付いていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回めぐって、この問題を複雑めづにしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで臆おぼろげ気に彼を一種の邪魔ものの如く意識していながら、明らかにそうと答える訳にいかなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐すわりました。私はすぐ両りょう脇わきを火鉢の縁から取り除のけて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは

市ヶ谷のどこへ行ったのだろうと。私は大方叔母さんおばの所だろうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きま  
す。私はやはり軍人の細君さいくんだと教えてやりました。すると女の年  
始は大抵十五日過すぎだのに、なぜそんなに早く出掛けたのだろうと  
質問するのです。私はなぜだか知らないと挨拶するより外ほかに仕方  
がありませんでした。

### 三十六

「Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已やめませんでした。しま

いには私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私  
は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を  
問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の  
調子の変っているところに気が付かずにはいられないのです。私  
はとうとうなぜ今日に限ってそんな事ばかりいうのかと彼に尋ね  
ました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元  
の肉が顫えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口  
な男でした。平生から何かいおうとすると、いう前によく口のあ  
たりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志  
に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも

籠こもっていたのでしよう。一旦いったん声が口を破やぶって出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちよつと眺ながめた時、私はまた何か出て来るなとすぐ瘡かんづ付いたのですが、それがはたして何なんの準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみてください。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまうのです。

その時の私は恐ろしさの塊かたまりといいました。ようか、または苦しさを

の塊りといいました。何しろ一つの塊りでした。石か鉄のよ  
うに頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力  
性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事にその状態  
は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気  
分を取り戻しました。そうして、すぐ失策しまったと思いました。先せん  
を越されたなと思いました。

しかしその先なみをどうしようという分別はまるで起りません。恐  
らく起るだけの余裕がなかったのでしょう。私は腋わきの下から出る  
気味のわるい汗が襯衣シヤツに滲しみ透とおるのを凝じつと我慢して動かずにいま  
した。Kはその間あいだいつもの通り重い口を切っては、ぽつりぽつり

と自分の心を打ち明けてゆきます。私は苦しくって堪りませんでした。おそらくその苦しきは、大きな広告のように、私の顔の上に判然はつきした字で貼り付けられてあつたらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍のろい代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず掻かき乱されていきましたから、細こまかい点になるとほとんど耳へ入

らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前いった苦痛ばかりでなく、ときには一種の恐ろしさを感じるようになつたのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌きざし始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何ともいう事ができませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事もいえなかつたのです。またいう気にもならなかつたのです。

ひるめし  
午食の時、Kと私は向い合せに席を占めました。下女げじよに給仕を

してもらって、私はいつにない不味い飯を済ませました。二人は食事中もほとんど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだから分りませんでした。

### 三十七

「二人は各自の室に引き取ったぎり顔を合わせませんでした。Kの静かな事は朝と同じでした。私も凝と考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。しかしそれにはもう時機が後れてしまったという気も起りました

た。なぜ先刻<sup>さつき</sup>Kの言葉を遮<sup>たふしぎ</sup>って、こっちから逆襲しなかったのか、そこが非常な手落<sup>てぬか</sup>りのように見えて来ました。せめてKの後<sup>あと</sup>に続いて、自分は自分の思う通りをその場で話してしまったら、まだ好かったろうにも考えました。Kの自白に一段落が付いた今となって、こっちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨に揺<sup>ゆ</sup>られてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切<sup>しき</sup>りの襖<sup>ふすま</sup>を開<sup>あ</sup>けて向うから突進してきてくれれば好<sup>い</sup>いと思いました。私にいわせれば、先刻はまるで不意<sup>ふい</sup>撃<sup>うち</sup>に会ったも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかったので

す。私は午前に失ったものを、今度は取り戻そうという下心したごころを持っていました。それで時々眼を上げて、襖を眺めながました。しかしその襖はいつまで経たっても開あきません。そうしてKは永久に静かなのです。

その内私うちの頭は段々この静かさに掻かき乱されるようになって来ました。Kは今襖の向うで何を考えているだろうと思うと、それが気になって堪たまらないのです。不断もこんな風ふうにお互いが仕切一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あったのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったのですから、その時の私はよほど調子が狂っていたものと

見なければなりません。それでいて私はこっちから進んで襖を開ける事ができなかつたのです。一旦いったんいいそびれた私は、また向うから働き掛けられる時機を待つより外ほかに仕方がなかつたのです。

しまいには私は凝じっとしておられなくなりまして。無理に凝としていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立って縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という目的もなく、鉄瓶てつびんの湯を湯呑ゆのみに注ついで一杯呑みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの室を回避するようにして、こんな風に自分を往来の真中に見出みいだしたのです。私には無論どこへ行くという的あてもありません。ただ凝じっとしていられないだけでした。それで方

角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き廻まわったのです。私の頭はいくら歩いてもKの事でいっぱいになっていました。私もKを振り落ふるす気で歩き廻る訳ではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼そしゃくしながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解かいしがたい男のように見えました。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けないらばいられないほどに、彼の恋が募つって来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真ま面目じめな事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決

する前に、彼について聞かなければならない多くをもっている  
信じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が  
悪かったのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝  
と坐<sup>すわ</sup>っている彼の容貌<sup>ようぼう</sup>を始終眼の前に描<sup>えが</sup>き出しました。しかもい  
くら私が歩いても彼を動かす事は到底できないのだという声<sup>こゑ</sup>がど  
こかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のように思  
えたからでしょう。私は永久彼に崇<sup>た</sup>られたのではなからうかとい  
う気<sup>き</sup>さえしました。

私が疲れて宅<sup>うち</sup>へ帰った時、彼の室は依然として人<sup>ひと</sup>気のないよう  
に静かでした。

「私が家へはいると間もなく俾くろまの音が聞こえました。今のように護謨輪ゴムわのない時分でしたから、がらがらいう厭いやな響ひびきがかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。

私が夕飯ゆうめしに呼び出されたのは、それから三十分ばかり経たった後あとの事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着はれぎが脱すぎ棄すてられたまま、次の室を乱雑いらだに彩いろどっていました。二人は遅くなると私たちに済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰って来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取ってほと

んど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のように、素気ない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言でした。たまに親子連で外出した女二人の気分が、また平生よりは勝れて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったです。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利きたくないからだといいました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追窮しました。私はその時ふと重たい瞼を上げてKの顔を見ました。私には

Kが何と答えるだろうかという好奇心があったのです。Kの唇は例のように少しふる顫えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとしたか思われなのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしい事を考えているのだろうかといいました。Kの顔は心持薄赤くなりました。

その晩私はいつもより早く床とこへ入りました。私が食事の時気分が悪いといったのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯そばゆを持って来てくれました。しかし私の室へやはもう真暗まっくらでした。奥さんはおやおやといったって、仕切りの襖ふすまを細目に開けました。洋燈ランプの光がKの机から斜ななめにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きて

いたものとみえます。奥さんは枕元に坐って、大方風邪を引いたのだろうから身体を暖ためるがいいといって、湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。私はやむをえず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転させるだけで、外に何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思い出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。

た。何をしているのだと私は重ねて問いました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経ったと思う頃に、押入おしいれをがらりと開けて、床とこを延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時なんじかとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがて洋燈ランプをふつと吹き消す音がして、家中うちゅうが真暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴さえて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝けさ彼から聞いた事について、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はど

うだと、とうとうこっちから切り出しました。私は無論襖越ふすまこじにそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻さっきから二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直すなおな調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまたはっと思わせられました。

### 三十九

「Kの生返事なまへんじは翌日よくじつになっても、その翌日になっても、彼の態度

によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとすると、けしき気色を決して見せませんでした。もっとも機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃そろって一日宅うちを空あけでもしなければ、二人はゆっくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。わたくし私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗あんに用意をしていた私が、折があったらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。

同時に私は黙もくって家うちのものの様子を觀察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振そぶりにも、別に平生へいせいと変った点はあ

りませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、かんじん肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、ただ通じていないのは慥たしかでした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会をこしり拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思って、例の問題にはしばらく手を着けずにそっとしておく事にしました。

こういつてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮しおの満干みちひと同じように、色々の高低たかびくがあったのです。私

はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと疑<sup>うたが</sup>ってもみました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のよ<sup>う</sup>に、明瞭<sup>めいりょう</sup>に偽<sup>いつわ</sup>りなく、盤上<sup>ばんじょう</sup>の数字を指し得<sup>う</sup>るものだろうかと考えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚<sup>あげ</sup>句<sup>く</sup>、漸<sup>ちゆうぜん</sup>くここに落ち付いたものと思<sup>おも</sup>って下さい。更にむずかしくいえば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかったのかも知<sup>し</sup>りません。

その内<sup>うち</sup>学校がまた始<sup>はじ</sup>まりました。私<sup>わたし</sup>たちは時間の同じ日には連

れ立って宅うちを出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違ったところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自てんでんに各自てんでんの事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあつたのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極きめなければならないと、私は思ったのです。すると彼は外ほかの人にはまだ誰だれにも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉うれし

がりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵かなわないという自覚があったのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家ようかを三年も欺あざむいていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがためにかえって彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかったのです。

私はまた彼に向って、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白について、実際的の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに

彼はそこになると、何にも答えません。黙って下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立てかくをしてくれるな、すべて思った通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然断はつきり言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言いちごんの返事も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち留まって底そこまで突き留める訳にいきません。ついそれなりにしてしまいました。

## 四十

「ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机

の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引<sup>ひ</sup>っ繰<sup>く</sup>り返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりません。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館で

は他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳にゆかないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかというのです。私は少し待っていていればしてもいいと答えました。彼は待っているといったまま、すぐ私の前の空席に腰をおろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりしました。何だかKの胸に一物があつて、談判でもしに來られたように思われて仕方がないので

す。私はやむをえず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち付き払ってもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。

二人は別に行く所もなかったの、竜岡町たつおかちょうから池の端はたへ出て、上野うえのの公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を総合そうごうして考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引ひっ張ばり出だしたらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際の方面へ向ってちつとも進んでいませんでした。彼は私に向って、ただ漠然と、どう思うというの

です。どう思うというのは、そうした恋愛の淵ふちに陥おちいった彼を、どんな眼で私が眺ながめるかという質問なのです。一言いちごんでいうと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生へいせいと異なる点を確かに認める事ができたと思いましたが。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思ひとわくを憚はばか  
るほど弱くでき上ってはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸もあり勇気もある男なのです。  
養家事件ようかでその特色を強く胸の裏うちに彫ほり付けられた私が、これは  
様子が違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向って、この際何なんで私の批評が必要なのかと尋ねた

時、彼はいつもにも似ない悄然しやうぜんとした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいといいました。そうして迷っているから自分で自分が分らなくなってしまったので、私に公平な批評を求め、るより外ほかに仕方がないといいました。私は隙すかさず迷うという意味を聞き糺ただしました。彼は進んでいいか退しりぞいていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいといっただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えています。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に

都合のいい返事を、その渴き切った顔の上に慈雨の如く注いで  
やったか分かりません。私はそのくらいの美しい同情をもつて生れ  
て来た人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違っ  
ていました。

## 四十一

「私はちょうど他流試合でもする人のようにKを注意して見てい  
たのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名  
の付くものを五分の隙間もないように用意して、Kに向ったので

す。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞ようさいの地図を受け取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺ながめる事ができたと同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨ほつこうしてふらふらしているのを発見した私は、ただ一打ひとつうちで彼を倒す事ができるだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚きよに付け込んだのです。私は彼に向って急に厳粛な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあつたのですから、自分に滑稽こっけいだの羞恥しゅうちだのを感じずる余裕はありませんで

した。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」といい放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありませぬ。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行手を塞ごうとしたのです。

Kは真宗寺に生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知して

いますが、私はただ男女なんによに関係した点についてののみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進しやうじんという言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲きんよくという意味も籠こもっているのだらうと解釈していました。しかし後で実際に聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、撰せん欲よくや禁欲きんよくは無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨害さまたげになるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃ころからお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかつたのです。私

が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑ぶべつの方が余計に現あらわれていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けて来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違ちがいなかっただのです。しかし前にもいった通り、私はこの一言で、彼が折角せつかく積み上げた過去を蹴散けちらしたつもりではありませぬ。かえってそれを今まで通り積み重ねて行かせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構かまいません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にどう影響するかを見詰めていました。

「馬鹿だ」とやがてKが答えました。「僕は馬鹿だ」

Kはぴたりとそこへ立ち留とどまったまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよっとしました。私にはKがその刹那せつなに居直いなおり強盗のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしては彼の声がいかにも力に乏しいという事に気が付きました。

私は彼の眼遣めづかいを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないのです。そうして、徐々そろそろとまた歩き出しました。

## 四十二

「私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗あんに待ち受けました。あるいは待ち伏せといった方がまだ適当かも知れません。その時の私はたといKを騙だまし打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍そばへ来て、お前は卑怯ひきようだと言ひとこと私語さごとやいてくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はっと我に立ち帰ったかも知れません。もしKがその人であつたなら、私はおそらく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘たしなめるには余

りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だったのです。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、かえってそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やっとKの眼を真向まむきに見る事ができたのです。Kは私より背せいの高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼おおかみのごとき心を罪のない羊に向けたのです。

「もうその話は止めよう」と彼がいました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶ができなかつたのです。するとKは、「止めてくれ」と今度は頼むようにいい直しました。私はその時彼に向つて残酷な答を与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食い付くように。

「止めてくれて、僕がいい出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」

私がこういった時、背せいの高い彼は自然と私の前に萎縮いしゆくして小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通りすいじゆう頗る強情きやうじやうな男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質たちだったのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然そつぜん「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「覚悟、——覚悟ならない事もない」と付け加えました。彼の調子てうしは独言ひつごんのようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川こいしかわの宿の方に足を向けま

した。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋さびしいものでした。ことに霜に打たれて蒼あお味みを失った杉の木立こだちの茶褐色ちやかつしよくが、薄黒い空の中に、梢こずえを並べて聳そびえているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ噛かじり付いたような心持がしました。我々は夕暮の本郷台ほんごうだいを急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向うの岡おかへ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃ころになって、ようやく外套がいとうの下に体たいの温味あたたかみを感じ出したぐらいです。

急いだためでもありませんでした。宅うちへ帰って食卓に向った時、奥さんはどう

して遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行つたと答えました。奥さんはこの寒いのにといって驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があったのかと聞きたがりません。私は何も無いが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑っても、碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むように掻き込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。

「その頃は覚醒かくせいとか新しい生活とかいう文字もんじのまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意いちいに新しい方角へ走り出さなかつたのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事のできないほど尊たつとい過去があつたからです。彼はそのために今日こんにちまで生きて来たといつてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向つて猛進しないといつて、決してその愛の生温なまぬるい事を証拠立てる訳にはゆきません。いくら熾烈しれつな感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏み留とどまつて自分の過去を振り

返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す路<sup>みち</sup>を今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情<sup>けんじやう</sup>と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野<sup>うえの</sup>から帰った晩は、私に取って比較的安静な夜<sup>よ</sup>でした。私はKが室<sup>へや</sup>へ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机の傍<sup>そば</sup>に坐<sup>すわ</sup>り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていました。でしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあったのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳<sup>かざ</sup>した後<sup>あと</sup>、自分の室に帰りました。

外の事ほかにかけては何をしても彼に及ばなかった私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対してもつていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚ましました。見ると、間の襖ふすまが二尺しゃくばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵よいの通りまだ燈火あかりが点ついているのです。急に世界の変った私は、少しの間口あいだを利きく事もできずに、ぼうっとして、その光景ながを眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師かげぼうしのようなKに向って、何か

用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行ったついでに聞いてみただけだと答えました。Kは洋燈ランプの灯ひを背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりもかえつて落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇くらやみに帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝よくあさになつて、昨夕ゆうべの事を考えてみると、何だか不思議でした。私はこれによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯めしを食

う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだといえます。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然はつきりした返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡ができるのかとかえって向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日ちようど同じ時間に講義の始まる時間割になっていたの  
で、二人はやがていっしょに宅うちを出ました。今朝けさから昨夕の事が  
気に掛かっている私は、途中でまたKを追窮ついきゆうしました。けれどもK  
はやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件に  
ついて何か話すつもりではなかったのかと念を押してみました。

Kはそうではないと強い調子でいい切りました。昨日<sup>きのう</sup>上野で「その話はもう止めよう」といったではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもった男なのです。ふとそこに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかつたその二字が妙な力で私の頭を抑え<sup>おさ</sup>始めたのです。

## 四十四

「Kの果断に富んだ性格は私<sup>わたくし</sup>によく知れていました。彼のこの事

件についてのみ優柔な訳も私にはちゃんと呑み込めていたので  
す。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかり攫まえ  
たつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉  
を、頭のなかで何遍も咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん  
色を失って、しまいにはぐらぐら揺き始めるようになりました。  
私はこの場合もあるいは彼にとって例外でないのかも知れないと  
思い出したのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決す  
る最後の手段を、彼は胸のなかに畳み込んでいたのでした。な  
かと疑り始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返  
してみた私は、はっと驚きました。その時の私がもしこの驚きを

もって、もう一返彼の口にした覚悟の内容を公平に見廻したら  
ば、まだよかったかも知れません。悲しい事に私は片眼めっかちでした。  
私はただKがお嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉  
を解釈しました。果敢に富んだ彼の性格が、恋の方面に発揮され  
るのがすなわち彼の覚悟だろうと一図いちずに思い込んでしまったので  
す。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。  
た。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより  
先に、しかもKの知らない間まに、事を運ばなくてはならないと覚  
悟を極きめました。私は黙って機会を覘ねらっていました。しかし二日

経<sup>た</sup>つても三日経<sup>た</sup>つても、私はそれを捕<sup>つら</sup>まえる事ができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待<sup>た</sup>って、奥さんに談判を開こうと考<sup>え</sup>えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をす<sup>る</sup>るとい<sup>っ</sup>た風<sup>ふう</sup>の日ばかり続<sup>い</sup>て、どうしても「今<sup>だ</sup>」と思<sup>う</sup>好都合が<sup>出</sup>て来<sup>て</sup>く<sup>れ</sup>ないのです。私はいら<sup>ら</sup>し<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

一週間の後<sup>のち</sup>私<sup>は</sup>とうとう堪<sup>え</sup>切<sup>れ</sup>なくな<sup>っ</sup>て仮病<sup>けびょう</sup>を遣<sup>つ</sup>いま<sup>し</sup>た。奥<sup>さん</sup>からもお嬢<sup>さん</sup>から<sup>も</sup>、K自身<sup>かみ</sup>から<sup>も</sup>、起<sup>き</sup>ろ<sup>と</sup>い<sup>う</sup>催促<sup>そそ</sup>を受<sup>け</sup>た私<sup>は</sup>、生返事<sup>なまへんじ</sup>をしただ<sup>け</sup>で、十時<sup>じゅうじ</sup>頃<sup>ま</sup>で蒲団<sup>ふとん</sup>を被<sup>か</sup>つて寝<sup>て</sup>いま<sup>し</sup>た。私<sup>は</sup>K<sup>も</sup>お嬢<sup>さん</sup>もい<sup>な</sup>く<sup>な</sup>っ<sup>て</sup>、家<sup>の</sup>内<sup>なか</sup>がひ<sup>っ</sup>そ<sup>り</sup>静<sup>ま</sup>っ<sup>た</sup>頃<sup>ま</sup>を見計<sup>みはか</sup>ら<sup>っ</sup>て寝床<sup>ねど</sup>を出<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。私<sup>の</sup>顔<sup>を</sup>見<sup>た</sup>

奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もっと寝ていたらよかろうと忠告してもくれました。身体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗っていつもの通り茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手に持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈托していたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終って烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍を離れる訳にゆきません。下女を呼んで膳を下げ

させた上、鉄瓶てつびんに水を注さしたり、火鉢ふちの縁ふちを拭ふいたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向うでなぜですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだといいました。奥さんは何ですかと行って、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分にはいり込めないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し洩まわりました。

私は仕方なしに言葉の上で、好いい加減にうろつき廻まわった末、Kが近頃ちかごろ何かいいはしなかったかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いも寄らないという風をして、「何を？」とまた反問して

来ました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃったんですか」とかえって向うで聞くのです。

## 四十五

「Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかった私は、「いいえ」といってしまった後で、すぐ自分の嘘うそを快こころよからず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだといい直しました。奥さんは「そうですか」といって、後あとを待っています。私はどうしても

切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私に下さい」といいました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。それでも少時返事ができなかつたものと見えて、黙って私の顔を眺めていました。一度いい出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてられません。「下さい、ぜひ下さい」といいました。「私の妻としてぜひ下さい」といいました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち付いていました。「上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。私が「急に貰いたいのだ」とすぐ答えたら笑い出しました。そうして「よく考えたの

ですか」と念を押すのです。私はいい出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のように判然はきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合には大変心持よく話のできる人でした。「宜よござんす、差し上げましょう」といいました。「差し上げるなんて威張いばった口の利きける境遇ではありません。どうぞ貰もらって下さい。ご存じの通り父親のない憐あわれな子です」と後あとでは向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭めいりょうに片付ついてしまいました。最初からしまい

までにおそらく十五分とは掛<sup>か</sup>らなかつたでしょう。奥<sup>か</sup>さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山だといいました。本人の意<sup>い</sup>嚮<sup>こう</sup>さえたしかめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私の方が、かえって形式に拘<sup>こ</sup>泥<sup>でい</sup>するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾<sup>ちゅうとく</sup>を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」といいました。

自分の室<sup>へや</sup>へ帰った私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考えて、かえって変な気持になりました。はたして大丈夫なのだろ

うかという疑念さえ、どこからか頭の底に這い込んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

私は午頃ひるごろまた茶の間へ出掛けて行って、奥さんに、今朝けさの話を  
お嬢さんに何時いつ通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、  
自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうというよう  
な事をいいます。こうなると何だか私よりも相手の方が男みた  
ようなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さん  
が私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽けい  
古こから帰って来たら、すぐ話そうというのです。私はそうしても

らう方が都合が好いと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙って自分の机の前に坐って、二人のこそそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないような気もするのです。私はとうとう帽子を被って表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかたのです。私が帽子を脱って「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病気は癒ったのかと不思議そうに聞くのです。私は「ええ癒りました、癒りました」と答えて、ずんずん水道橋の方へ曲ってしまいました。

## 四十六

「私は猿楽町さるがくちやうから神保町じんほうちやうの通りへ出て、小川町おがわまちの方へ曲りました。私がこの界隈かいわいを歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でした。その日は手摺てずれのした書物などを眺ながめる気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅うちの事を考えていました。私には先刻さつきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真中で我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんが

お嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。また或<sup>あ</sup>る時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋<sup>まんせいばし</sup>を渡って、明神の坂<sup>みょうじん</sup>を上がって、本郷台<sup>ほんごうだい</sup>へ来て、それからまた菊坂<sup>きくざか</sup>を下りて、しまいに小石川の谷<sup>こいしかわ</sup>へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨<sup>また</sup>がって、いびつな円を描<sup>えが</sup>いたともいわれるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKの事を考えなかつたのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向<sup>うしん</sup>分りません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得<sup>う</sup>るくらい、一方に緊張していたとみればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかつた

のですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子こうしを開けて、玄関から坐敷ざしきへ通る時、すなわち例のごとく彼の室へやを抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向って書見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今帰ったのかとはいいませんでした。彼は「病気はもう癒いいのか、医者へでも行ったのか」と聞きました。私はその刹那せつなに、彼の前に手を突いて、詫あやまりたくなったのです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかったのです。もしKと私がたった二人曠野こうやの真中にでも立っていた

ならば、私はきつと良心の命令に従って、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い留められてしまったのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかったのです。

夕飯ゆうめしの時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもより嬉うれしそうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今ただいまと答えるだけでした。それを

Kは不思議そうに聞いていました。しまいはどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方おおかたきま極りが悪いのだろうと行って、ちよつと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追窮ついきゆうしに掛かかりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔付かおつきで、事の成行なりゆきをほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それを悉く話ことごとされては堪たまらないと考えました。奥さんはまたそのくらいの事を平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生へいせいより多少機

嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いだいている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一息ひとらきして室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私は色々の弁護を自分の胸で拵こしらえてみました。けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑怯ひきような私はついに自分で自分をKに説明するのが厭いやになったのです。

## 四十七

「私はそのまま二、三日過ごしました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのはいうまでもありません。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思ったのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟しげきするのですから、私はなお辛つらかったです。どこか男らしい気性を具そなえた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素すっば抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの拳止動作きよしどうさも、Kの心を曇らす不審の種とまらないとは断言できません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位

置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもっていると、自分で自分を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそういつてもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目めんぼくのないうのに変りはありません。と**いつて**、**拵**うづえ事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問きつもんされるに極きまっています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝はけ出さなければなりま

せん。真面目な私には、それが私の未来の信用に関すると思われなかったのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

要するに私は正直な路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに気のついていっているものは、今のところただ天と私の心だけだったのです。しかし立ち直って、もう一步前へ踏み出そうとするには、今滑った事をぜひとも周囲の人に知らなければならぬ窮境に陥ったのです。私はあくまで滑った事を隠したがりました。同時に、どう

しても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟はさまつてまた立ち竦すくみました。

五、六日経たった後のち、奥さんは突然私に向って、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰なめるのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理で妾わたしが話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生へいせいあんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」

私はKがその時何かいいはしなかつたかと奥さんに聞きま  
した。奥さんは別段何にもいわないと答えました。しかし私は進ん  
でもっと細かい事こまを尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固も  
より何も隠す訳がありません。大した話もないがといいながら、  
一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんのいうところを総合そうごうして考えてみると、Kはこの最後の  
打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kは  
お嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそう  
ですかとただ一口ひとくちいっただけだったそうです。しかし奥さんが、  
「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔

を見て微笑を洩らしながら、「おめでとうございます」といったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子しょうじを開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事ができません」といったそうです。奥さんの前に坐すわっていた私は、その話を聞いて胸が塞ふさがるような苦しさを覚えました。

## 四十八

「勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになり

ます。その間Kは私に対して少しも以前と異なつた様子を見せなかつたので、私は全くそれに気が付かずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけにもせよ、敬服に値すあたべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙はるかに立派に見えました。「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑けいべつしている事だろうと思つて、一人で顔を赧あからめました。しかし今更Kの前に出て、恥を搔かかせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。

私が進もうか止よそうかと考えて、ともかくも翌日あくるひまで待とうと

決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然とします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肱を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返さ

れたように裾すその方に重なり合っているのです。そうしてK自身は向うむきに突つツ伏ぶ伏ふしているのです。

私はおいといつて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体からだは些ちっとも動きません。私はすぐ起き上って、敷居しきいぎわ際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈ランプの光で見廻みまわしてみました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目ひとめ見ると、動かぬ硝子ガラスで作った義眼のように、動く能力を失いま

した。私は棒立ちぼうだちに立ち竦すくみました。それが疾風しつぷうのごとく私を通  
過したあとで、私はまたああ失策しまったと思いました。もう取り返  
しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の  
前に横たわる全生涯を物凄ものすごく照らしました。そうして私はがたが  
た顫ふるえ出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事ができませんでした。私はす  
ぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私  
の名宛なあてになっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中  
には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私  
は私に取ってどんなに辛つらい文句がその中に書き列つらねてあるだろう

と予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があったのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず助かったと思いました。（固もとより世間せけんてい体の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。）

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行はくしじやっこうで到底行先ゆくさきの望みがないから、自殺するといっただけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあっさりとした文句でその後あとに付け加えてありました。世話ついでに死後の片付方かたづけかたも頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛け

て済まんから宜しく詫をしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだらうという意味の文句でした。

私は顫える手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆なの眼に着くように、元の通り机の上に

置きました。そうして振り返って、襖ふすまに迸ほとばしっている血潮を始めて見たのです。

## 四十九

「私は突然Kの頭を抱かかえるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔しにがおが一目見ひとめたかったです。しかし俯伏うつぶしになっている彼の顔を、こうして下から覗のぞき込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄ぞっとしたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触さわった冷たい耳と、平へい

生せいに変わらない五分刈ごぶがりの濃い髪かみの毛けを少時しばらくなが眺ながめていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかったのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能くわんねいを刺激しげきして起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然こっぜんと冷たくなつたこの友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私は何の分別ぶんべつもなくまた私の室へやに帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻まわり始めました。私の頭は無意味でも当分そうして動いていると私に命令するのです。私はどうかしなければならな  
いと思いました。同時にもうどうする事もできないのだと思いま

した。座敷の中をぐるぐる廻らなければいられなくなったので  
す。檻おりの中へ入れられた熊くまのような態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮たしなります。奥さんとはかく、お嬢さんを驚かす事は、とてもできないう強い意志が私を抑おさえつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。

私はその間に自分の室の洋燈ランプを点つけました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒らちの明あかない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれど

も、もう夜明よあけに間まもなかった事だけは明らかです。ぐるぐる廻りまわながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女げじよはその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行ったのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だといって注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室へやまで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不断着ふだんぎの羽織を

引<sup>ひ</sup>つ掛<sup>か</sup>けて、私の後<sup>あと</sup>に跟<sup>つ</sup>いて来<sup>こ</sup>ました。私は室<sup>むすむす</sup>へはいるや否<sup>いな</sup>や、  
今<sup>いま</sup>まで開<sup>あ</sup>いていた仕<sup>し</sup>切<sup>き</sup>りの襖<sup>ふすま</sup>をす<sup>す</sup>ぐ立<sup>た</sup>て切<sup>き</sup>りました。そうして奥<sup>おく</sup>  
さん<sup>さん</sup>に飛<sup>と</sup>んだ事<sup>こと</sup>がで<sup>で</sup>きたと小<sup>こ</sup>声<sup>こゑ</sup>で告<sup>つ</sup>げま<sup>ま</sup>した。奥<sup>おく</sup>さん<sup>さん</sup>は何<sup>なに</sup>だ<sup>だ</sup>と聞<sup>き</sup>  
きま<sup>ま</sup>した。私<sup>わたし</sup>は顚<sup>あご</sup>で隣<sup>りん</sup>の室<sup>むすむす</sup>を指<sup>さ</sup>すよう<sup>よう</sup>にし<sup>し</sup>て、「驚<sup>おど</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>け<sup>ま</sup>  
せん<sup>ん</sup>」<sup>ん</sup>とい<sup>い</sup>いま<sup>ま</sup>した。奥<sup>おく</sup>さん<sup>さん</sup>は蒼<sup>あお</sup>い顔<sup>かほ</sup>をし<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>した。「奥<sup>おく</sup>さん<sup>さん</sup>、K  
は自<sup>じ</sup>殺<sup>ころ</sup>しま<sup>ま</sup>した」<sup>ん</sup>と私<sup>わたし</sup>がま<sup>ま</sup>た<sup>た</sup>い<sup>い</sup>いま<sup>ま</sup>した。奥<sup>おく</sup>さん<sup>さん</sup>はそ<sup>そ</sup>こ<sup>こ</sup>に居<sup>い</sup>竦<sup>すく</sup>  
ま<sup>ま</sup>つたよう<sup>よう</sup>に、私<sup>わたし</sup>の顔<sup>かほ</sup>を見<sup>み</sup>て黙<sup>もく</sup>つていま<sup>ま</sup>した。その時<sup>とき</sup>私<sup>わたし</sup>は突<sup>つ</sup>然<sup>ぜん</sup>奥<sup>おく</sup>  
さん<sup>さん</sup>の前<sup>まえ</sup>へ手<sup>て</sup>を突<sup>つ</sup>いて頭<sup>あたま</sup>を<sup>を</sup>下<sup>くだ</sup>げま<sup>ま</sup>した。「済<sup>す</sup>みま<sup>ま</sup>せん。私<sup>わたし</sup>が悪<sup>わる</sup>  
か<sup>か</sup>つたので<sup>で</sup>す。あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>た<sup>た</sup>に<sup>に</sup>もお嬢<sup>おぢやう</sup>さん<sup>さん</sup>に<sup>に</sup>も済<sup>す</sup>ま<sup>ま</sup>ない事<sup>こと</sup>にな<sup>な</sup>りま<sup>ま</sup>し  
た」<sup>ん</sup>と詫<sup>あや</sup>まりま<sup>ま</sup>した。私<sup>わたし</sup>は奥<sup>おく</sup>さん<sup>さん</sup>と向<sup>むか</sup>い合<sup>あ</sup>うま<sup>ま</sup>で、そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>な言<sup>い</sup>葉<sup>は</sup>を

口にする気はまるでなかったのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らずそういつてしまったのです。Kに詫まる事のできない私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫びなければいられなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈しなかつたのは私にとって幸いででした。蒼い顔をしながら、「不慮の出来事なら仕方がないじゃありませんか」と慰めるようにいつてくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられたように、硬く筋肉を攪んでいました。

「私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立って今閉めたばかりの唐紙からかみを開けました。その時Kの洋燈ランプに油が尽きたと見えて、室へやの中はほとんど真暗まっくらでした。私は引き返して自分の洋燈を手に持ったまま、入口に立って奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗のぞき込みました。しかしはいろいろとはしません。そこはそのままにしておいて、雨戸を開けてくれと私にいいました。

それから後あとの奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人びぼうじんだけあつ

て要領を得ていました。私は医者の所へも行ききました。また警察へも行ききました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはそうした手続てつづきの済むまで、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈けいどうみやくを切つて一息ひといきに死んでしまったのです。外ほかに創きずらしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯ひで見た唐紙の血潮は、彼の頸筋くびすじから一度に迸ほとばしつたものと知れました。私は日中にっちゆうの光で明らかにその迹あとを再び眺ながめました。そうして人間の血の勢いきおいというものの劇はげしいのに驚きましました。

奥さんと私はできるだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまったので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体に横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰った時は、Kの枕元にもう線香が立てられていました。室へはいるとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さ

んも眼を赤くしていました。事件が起ってからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分<sup>きぶん</sup>に誘われる事ができたのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛<sup>くわん</sup>ろいだから知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴<sup>いってき</sup>の潤<sup>うるお</sup>を与えてくれたものは、その時の悲しさでした。

私は黙って二人の傍<sup>そば</sup>に坐っていました。奥さんは私にも線香を上げてやれといっています。私は線香を上げてまた黙って坐っていました。お嬢<sup>おぢやう</sup>さんは私には何ともいいません。たまに奥<sup>おく</sup>さんと一口<sup>ひとくち</sup>二口<sup>ふたぐち</sup>言葉を換<sup>か</sup>わす事がありました。それは当座の用事<sup>ようじ</sup>についてのみでした。お嬢<sup>おぢやう</sup>さんにはKの生前<sup>せいかん</sup>について語るほどの余裕<sup>よゆう</sup>がま

だ出て来なかつたのです。私はそれでも昨夜の物凄い有様を見せ  
ずに済んでまだよかつたと心のうちで思いました。若い美しい人  
に恐ろしいものを見せると、折角の美しさが、そのために破壊さ  
れてしまいそうで私は怖かつたのです。私の恐ろしさが私の髪の毛の  
末端まで来た時ですら、私はその考えを度外に置いて行動す  
る事はできませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに  
鞭うつと同じような不快がそのうちに籠つていたのです。

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋め  
るかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司ヶ谷  
近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変

気に入っていたのです。それで私は笑談しょうだんはんぶん半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあります。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬はなつむったところで、どのくらいの功德くどくになるものかとは思いました。けれども私は私の生きている限り、Kの墓の前に跪ひざまずいて月々私の懺悔ざんげを新たにしたかったので。今まで構い付けなかったKを、私が万事世話をして来たという義理もあったのでしよう、Kの父も兄も私のいう事を聞いてくれました。

「Kの葬式の帰り路みちに、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだろうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早くお前が殺したと白状してしまえという声を聞いたのです。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛あてで書き残した手紙を繰り返すだけで、外ほかに一口ひとくちも付け加える事はしませ

んでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐ふんから一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によって指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭えん世的せいてきな考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にもいわずに、その新聞を畳たたんで友人の手に帰しました。友人はこの外ほかにもKが気が狂って自殺したと書いた新聞があると言って教えてくれました。忙しいので、ほとんど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹はらの中では始終気にかかっていたところでした。私は何よりも宅うちのものの迷惑になるような記事の出るのを恐

れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪  
らないと思っていたのです。私はその友人に外ほかに何とか書いたの  
はないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその  
二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引ひつ越こしたのはそれから間もなくでした。奥さ  
んもお嬢さんも前の所ところにいるのを厭いやがりますし、私もその夜よの記  
憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極きめた  
のです。

移って二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒  
業して半年も経たたないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しま

した。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから、目<sup>め</sup>出度<sup>でたい</sup>といわなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随<sup>つ</sup>いていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなかるうかと思いました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻<sup>さい</sup>といえます。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓<sup>はかまい</sup>参りをしようといいい出しました。私は意味もなくただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人揃<sup>そろ</sup>ってお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうという

のです。私は何事も知らない妻の顔をしけじけ眺めていましたが、妻からなぜそんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。

私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗ってやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになった顛末を述べてKに喜んでもらうつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ自分が悪かったと繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫でてみて立派だと評していました。その

墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行つて見立てたりした因縁があるので、妻はとくにそういいたかったのでしよう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋められたKの新しい白骨とを思い比べて、運命の冷罵を感じずにはいられなかったのです。私はそれ以後決して妻といつしよにKの墓参りをしない事にしました。

## 五十二

「私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は

私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であった結婚すら、不安のうちに式を挙げたといえはいえない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、ことによるとあるいはこれが私の心持を一転して新しい生涯に入る端緒はいになるかも知れないとも思ったのです。ところがいよいよ夫として朝夕妻さいと顔を合せてみると、私の果敢はかない希望は手厳しい現実のために脆もろくも破壊されてしまいました。私は妻と顔を合せているうちに、卒然そつぜんに脅おびかされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私をどこまでも結び付けて離さないようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を

遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだらうとかいう詰問を受けました。笑って済ませる時はそれで差支えないのですが、時によると、妻の癩も高じて来ます。しまいには「あなたは私を嫌っていらっしやるんでしよう」とか、「何でも私に隠していらっしやる事があるに違いない」とかいう怨言も聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層思い切って、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしいざという間際になると自分以外のあ

る力が不意に来て私を抑え付けおさけるのです。私を理解してくるあなたのことだから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すベキ筋だから話しておきます。その時分の私は妻に対して己おのれを飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような善良な心で、妻の前に懺悔ざんげの言葉を並べたなら、妻は嬉うれし涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違いないのです。それをあえてしない私に利害の打算があるはずはありません。私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印いんするに忍びなかったから打ち明けなかったのです。純白なものに一粟ちひしちかくの印インキ気でも容赦ようしやなく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

一年経つてもKを忘れる事のできなかつた私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐するために書物に溺れようと力めました。私は猛烈な勢をもつて勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公にする日の来るのを待ちました。けれども無理に目的を拵えて、無理にその目的の達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快です。私はどうしても書物のなかに心を埋めていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺めだしたのです。

妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいは坐っていてどうか

こうか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支さしつかえのない境遇にいたのですから、そう思われるのももつともです。私も幾分かスポイルされた気味がありました。しかし私の動かなくなった原因の主なもの、全くそこにはなかつたのです。叔父おじに欺あざむかれた当時の私は、他の頼ひとみにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他ひとを悪く取るだけあって、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかともこの己おれは立派な人間だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事みごとに破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他ひとに愛想あいそを尽かした

私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。

### 五十三

「書物の中に自分を生埋めにする事のできなかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好きだとはいいません。けれども飲めば飲める質でしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰そうと力めたのです。この浅薄な方便はしばらくするうちに私をなお厭世的にしました。私は爛酔の真最中にふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似を

して己れを偽いつわっている愚物ぐぶつだという事に気が付くのです。すると身振みぶるいと共に眼も心も醒さめてしまいます。時にはいくら飲んでもこうした仮装状態にさえ入はいり込めないでむやみに沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後あとには、きつと沈鬱ちんうつな反動があるのです。私は自分の最も愛している妻さいとその母親に、いつでもそこを見せなければならなかったのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛かります。

妻の母は時々気拙きまづい事を妻にいうようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分は自分で、単独に私を責めなければ気が済まなかったらしいのです。責めるといっても、決して強い

言葉ではありません。妻から何かいわれたために、私が激した例<sup>ためし</sup>はほとんどなかったくらいですから。妻はたびたびどこが気に入らないのか遠慮なくいつてくれと頼みました。それから私の未来のために酒を止<sup>や</sup>めろと忠告しました。ある時は泣いて「あなたはこの頃<sup>ごろ</sup>人間が違った」といいました。それだけならまだいいのですけれども、「Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」というのです。私はそうかも知れないと答え、た事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。

私は時々妻に詫あやまりました。それは多く酒に酔あって遅く帰った翌日あくるひの朝でした。妻は笑いました。あるいは黙もくっていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどっちにしても自分が不愉快で堪たまらなかったのです。だから私の妻に詫あやまるのは、自分に詫あやまるのとつまり同じ事になるのです。私はしまい酒を止やめました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭いやになったから止めたといった方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりに、打ち遣うって置やきます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびた

び受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞せきぼくでした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありませんでした。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありません。ところが、私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正ましく失

恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向ってみると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私はしまいにはKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑い出しました。そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横過り始めたからです。

## 五十四

「その内妻さいの母が病気になりました。医者に見せると到底とうてい癒ならな  
いという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやり  
ました。これは病人自身のためでもありませんし、また愛する妻の  
ためでもありませんが、もっと大きな意味からいうと、ついに人  
間のためでした。私はそれまでも何かしたくって堪たまらなかつた  
のだけれども、何もする事ができないのでやむをえず懐手ふところをして  
いたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分か  
ら手を出して、幾分でも善いい事をしたという自覚を得たのはこの  
時でした。私は罪滅つみほろぼしとでも名づけなければならぬ、一種の氣  
分に支配されていたのです。

母は死にました。私と妻はたった二人ぎりになりました。妻は私に向って、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたといいました。自分自身さえ頼りにする事のできない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思いました。また不幸な女だと口へ出してもいいました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解らないのです。私もそれを説明してやる事ができないのです。妻は泣きました。私が不断からひねくれた考えで彼女を観察しているために、そんな事もいふようになるのだと恨みました。

母の亡くなつた後、私はできるだけ妻を親切に取り扱ってやり

ました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人こじんを離れてもっと広い背景があつたようです。ちよ  
うど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいの  
です。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちに  
は、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄きはくな点がどこか  
に含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たにしたと  
ころで、この物足りなさは増すとも減る気遣きづかいはなかつたので  
す。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をは  
ずれても自分だけに集注される親切を嬉うれしがる性質が、男よりも  
強いように思われますから。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもぴたりと一つになれないものだろうかといいました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧あいまいな返事をしておきました。妻は自分の過去を振り返って眺ながめているようでしたが、やがて微かすかな溜息ためいきを洩もらしました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃ひらめきました。初めはそれが偶然外そとから襲おそって来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしている中うちに、私の心がその物凄ものすごい閃ひらめきに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜ひそんでいるもののごとくに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がど

うかしたのではなからうかと疑うたぐってみました。けれども私は医者にも誰にも診みてもらおう気にはなりませんでした。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓まいへ毎月行げつかせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍ろぼうの人から鞭むちうたれたいとまで思った事もあります、こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭うたれるよりも、自分で自分を鞭うつべきだという気になります。自分で自分を鞭うつよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生

きて行こうと決心しました。

私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたらしいのです。それを思うと、私は妻さいに対して非常に気の毒な気がします。

## 五十五

「死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の

刺戟しげきで躍おどり上がりました。しかし私がどの方面かへ切って出よう  
と思い立つや否いなや、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心を  
ぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてそ  
の力が私にお前は何をする資格もない男だと抑おさえ付けるように  
いつて聞かせます。すると私はその一言いちげんで直すぐぐたりと萎しおれてしま  
います。しばらくしてまた立ち上がろうとすると、また締め付け  
られます。私は齒を食いしばって、何で他ひとの邪魔をするのかと怒  
鳴り付けます。不可思議な力は冷ひややかな声で笑います。自分でよ  
く知っているくせにといいます。私はまたぐたりとなります。

波瀾はらんも曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常に

こうした苦しい戦争があったものと思つて下さい。妻が見て歯痒はがゆがる前に、私自身が何層倍歯痒なんぞうばいい思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋ろうやの中に凝じつとしてゐる事がどうしてもできなくなつた時、またその牢屋をどうしても突き破る事ができなくなつた時、必竟私ひつきやうにとって一番楽な努力で遂行すいこうできるものは自殺より外ほかにないと私は感ずるようになったのです。あなたはなぜと  
いつて眼を睜みはるかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。  
動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩い

て進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日こんにちに至るまですでに二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹ひかされました。そうしてその妻をいっしょに連れて行く勇氣は無論ないので。妻にすべてを打ち明ける事のできないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲ぎせいとして、妻の天寿てんじゆうを奪うなどという手荒てあらな所作しよさは、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻まわり合せがあります、二人を一束ひとたぎらにして火に燻くべるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。

同時に私だけがいなくなった後の妻を想像してみるといかにも不憫ふびんでした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなったといった彼女の述懐じゆっかいを、私は腸はらわたに沁しみ込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇ちゆうちゆうしました。妻の顔を見て、止よしてよかったと思う事もありました。そうしてまた凝じつと竦すくんでしまいます。そうして妻から時々物足りなそうな眼で眺めながられるのです。

記憶して下さい。私はこんな風ふうにして生きて来たのです。始めてあなたに鎌倉かまくらで会った時も、あなたといっしょに郊外を散歩した時も、私の気分が大した変りはなかったのです。私の後ろには

いつでも黒い影が括ッ付いていました。私は妻のために、命を引きずって世の中を歩いてきたようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。九月になったらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く会う気でいたのです。秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、きつと会うつもりでいたのです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後あとに生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちまし

た。私は明白あからさまに妻にそういいました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死じゅんしでもしたらよかろうと調戯からかいました。

## 五十六

「私は殉死という言葉をはほとんど忘れていました。平生へいせい使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談じょうだんを聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向ってもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつも

りだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかつたのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たよ  
うな心持がしたのです。

それから約一カ月ほど経たちました。御大葬ごたいそうの夜私はいつもの通  
り書齋すわに坐すわつて、相凶あいずの号砲ごうほうを聞きました。私にはそれが明治が  
永久に去った報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが  
乃木大将のぎたいししょうの永久に去った報知にもなっていたのです。私は号外を  
手にして、思わず妻に殉死だ殉死だといいました。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読みま  
した。西南戦争せいなんせんそうの時敵に旗を奪とられて以来、申し訳のために死の

う死のうと思つて、つい今日まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらえて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間死のう死のうと思つて、死ぬ機会を待っていたらしいのです。私はそういう人にとつて、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、どつちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解らないように、あなたに

も私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。あるいは箇人のもって生れた性格の相違といった方が確かかも知れません。私は私のできる限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己れを尽したつもりです。

私は妻を残して行きます。私がいなくなっても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間に、こっそりこの世からいなくなるようにします。私は死

んだ後で、妻から頓死とんししたと思われたいのです。気が狂ったと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする気でいたのですが、書いてみると、かえつてその方が自分を判然はつきりえが描き出す事ができたような心持がして嬉しいのです。私は酔興すいきやうに書くのではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外ほかに誰も語り得るものはないのですから、それを偽いつわりなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あな

たにとつても、外の人にとつても、徒勞ではなかるうと思いま  
す。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延  
べたという話をつい先達て聞きました。他から見たら余計な事の  
ようにも解釈できましようが、当人にはまた当人相應の要求が心  
の中にあるのだからやむをえないともいわれるでしよう。私の努  
力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありませ  
ん。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。  
しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はあ  
りません。この手紙があなたの手落ちる頃には、私はもうこの  
世にはいないでしよう。とくに死んでいるでしよう。妻は十日ば

かり前から市ヶ谷いちがやの叔母おばの所へ行きました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間あいだに、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他の参考ひとに供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己おのれの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一ゆいいつの希望なのですから、私が死んだ後あとでも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にし

「さよならさよなら。」

### 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ      2016年3月15日 第一期製作

原稿 青空文庫  
発行者 佐藤 聖  
発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘C室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---